文學博士 吉澤義則撰

校本物類稱呼

諸國方言索引

立命館出版部

例言

一、本書は、方言辭彙作製にいたる過程として、越谷吾山輯諸國方言集『物類稱呼』の總索引を試みたものである。

一、物類稱呼は、全國の方言を天地・人倫・動物・生植・器用・衣食・言語等に分類解說したもので、方言研究者の座右に無かるべからざる書物である。

一、本書は、分つて本文篇及び索引篇の二篇とする。

一、本文篇は、物類稱呼の全文を收めたものである。

一、抑、物類稱呼には、二種の刊本がある。共に「安永四乙未正月」といふ刊記であるが、刊行書肆が一は「江都書林大坂屋平三郎伊南甚助」とし、二は「江都書林　須原屋市兵衛同善五郎」となつてゐる。(他に、全然刊行書肆名の記載なきものと、寛政十二年河内屋源七刊『和歌連俳諸國方言』と改題したものと、その後刷の前川文榮堂藏版とあるものなどがあるが、いづれも第二種版の後刷に過ぎない)。前者は所謂初刊本であり、後者は吾山が初刊本の誤謬や不滿の點を、板木を改めずに濟む範圍に於て、出來る限り、自ら訂正增補した補訂本と思はれる。それは左記對照表によつてもわかることと思ふ。

大坂屋刊本	須原屋刊本
(卷五) 〔四丁ノ裏〕正親町一位公通卿の狂歌にさみせんのいとしかはゆしなどゝも詠し給へば。かはゆしと云。たよろしからんや。	正親町一位公通卿の狂歌にさみせんのいとしかはゆしなどゝも詠し給へり。

〔十二丁ノ裏〕出羽の尾花にてはせを翁の發句にも　　出羽の尾花澤にてはせを翁の發句にも

〔二十丁ノ表〕をゝくといへとたゝくや雪の門　丈艸　　をゝくといへとたゝくや雪の門　去來

一、本書は、須原屋刊本を本文と爲し、大坂屋刊本との相違を一々頭註に示しておいた。但し原著者吾山が補訂した箇所凡そ四百箇所のうち、句讀點の補訂箇所のみは頭註することを省略した。尙ほ底本とした須原屋刊本は編者の藏本であり、頭註に用ひた大坂屋刊本は東京帝室博物館藏本である（岩崎文庫藏本は一見異本のやうに見えるが、この書は、後人が大坂屋刊本・須原屋刊本の二本を混綴したまでのものである）。

一、曩に日本古典全集四期本に收載せられたのは大坂屋刊本である。

一、索引篇は、五十音順索引と地名別索引との二章から成つてゐる。共に排列は大體發音假名遣順に據つた。又その第一段は方言語を、第二段は本文篇檢出の頁數を、第三段は本文篇一頁の「上」段乃至「下」段を示した。第四段（括弧內）は舊刊本（大坂屋刊本・須原屋刊本共通）の卷數・丁數及びその一丁の「表」「裏」を示した。

一、本書刊行に就いては小川壽一氏を煩はした事が非常に多かつた。玆に記して謝意を表す。

昭和八年九月

編者識

物類稱呼諸國方言索引　本文篇

物類稱呼

目次

卷一

天地

北辰……一上（裏）
北斗……一上
昴……一上
參……一上
風……一上
夏雲……三上
虹……三下
液雨……三下
雪……三下
霜……三下
氷柱……三下
凍……四上
水……四上
泥……四上
水口……四上

原……四上
土堤……四上
岸險……四下
谷……四下
岩窟……四下
穴……四下
四會……四下
小路……四下
河岸……四下
閨房……五上
庇……五上
地震……五上
石……五上
日南……五上
神無月……五上
晦日……五下

人倫

父……五下
母……五下
兄……六上
姉……六下
夫……六下

妻……六下
小兒……七上
息女……七下
乳母……七下
寡……八上
妾……八上
遊女……八上
夜發……一〇上
鹿酌奴……一〇上
奴……一一上
陰陽師……一一上
梓巫……一一上
氏子……一一下
盜賊……一一下
乞人……一一下
屠兒……一二下
譬……一二下
眉……一三上
腹……一三上
膝……一三上
尻……一三上
陰……一三下
瞎……一三下
螺……一三下
跟……一三下

卷二

動物

馬……一四上
牛……一四上
野猪……一四上
狐……一四下
猫……一四下
鼠……一五下
鼵鼠……一五下
蝙蝠……一六上
鼠……一六上
川童……一六下
雎鳩……一七上
刀鴨……一七上
鵰……一七上
鴟……一七下
魚狗……一七下
鵠……一八上

信天翁……一八上
秧鷄……一八上
鷸……一八上
蒿雀……一八下
鷺眉鳥……一八下
百舌鳥……一八下
繡眼兒……一九上
布穀鳥……一九上
蚊母鳥……一九上
杜鵑……一九上
燕……一九下
斑鳩……一九下
木啄鳥……一九下
鴉……二〇上
鶴……二〇上
鶴鴿……二〇下
剖葦鳥……二〇下
鯉……二一上
鰤……二一上
鰡……二一上
棘鰭魚……二一下
鳥賴魚……二二上
比目魚……二二上
鞋底魚……二二下
幾須古……二二下
阿古……二二下
藻魚……二二下
目張……二二下
笠子魚……二三上
伊佐木……二三上
鮎魚女……二三上
保宇保宇……二三上
方頭魚……二三下
石鮒魚……二三下
鰭……二三下
鰯條魚……二三下
丁斑魚……二四上
鮫魚……二四下
王鮪……二四下
鰤……二五上
松魚……二五下
河豚……二五下
鰐……二五下
鯉……二六上

青魚……二六下
鰡魚……二六下
鰻鱺……二七上
海鰻……二八上
黃顙魚……二八上
鯽魚……二八上
杜父魚……二八下
鮇魚……二九上
吹沙魚……二九上
鯵……二九上
文鰩魚……二九上
和加佐幾……二九上
鱔……二九下
伊多……二九下
鯄……二九下
毛呂古……二〇上
石首魚……二〇上
鰬鯸……二〇上
鬻魚……二〇上
魟鮪魚……二〇上
鱁……二〇上
太刀魚……二〇下

惠曾……二〇下
沙噀……二〇下
海鷄魚……二〇下
海蝦……二一上
鏐絡……二一上
水龜……二一上
鼈……二一上
蝦魁……二一下
甲蟹……二一下
鬼蟹……二一上
榮螺……二一上
鰒魚……二一上
蛤蜊……二一下
淺利貝……二一下
朗光……二一下
蜆……二一下
鹽吹貝……二一下
多伊良木……二一下
田螺……二一下
寄居蟲……二一上
蟶……二一上
細螺……二一上

石蚓……二三上
海馬……二三上
和尙魚……二三上
蝸牛……二三下
蛞蝓……二四上
蛇……二四上
蝮蛇……二四上
蚺蛇……二四下
蜥蜴……二四下
蜂……二四下
馬蜂……二四下
蠟蝓……二四下
蠶……二五上
蝶……二五下
蜻蛉……二六上
蛆蟑……二六下
茅蜩……二六下
蟋蟀……二六下
蓋馬……二七上
莎鷄……二七上
蜈蚣……二七上
紡虫……二七下
蟷螂……二七下
蝦蟆……二七下
蟾蜍……二八上
蟹……二八上
螃蟹……二八上
馬陵……二八上
蚯蚓……二八上
水黽……二八下
飛蛾……二八下
兜蟲……二八下
蛹蟲……二九上
髯蟲……二九上
蝗……二九下
卷三
生植
米……四〇上
秣……四〇下
蜀黍……四〇下
玉蜀黍……四〇下
紅豆……四〇下
綠豆……四一上
豌豆……四一上

萊菔……四一上
茲……四一上
韭……四一下
冬葱……四一下
野蒜……四一下
蒜……四二上
芋……四二上
佛掌薯……四二上
黃獨……四二下
冬餘子……四二下
甘藷……四二下
薺……四二下
紫蕎……四三上
鼠麴草……四三上
火焰……四三上
蠶豆……四三上
刀豆……四三下
眉兒豆……四三下
黎豆……四三下
莧……四三下
萱艸……四四上
蘭蒿……四四上
獨活……四四上
迷蕨……四四上
番椒……四四上
茼蒿……四四下
土筆……四四下
冬瓜……四四下
南瓜……四五上
越瓜……四五上
菜瓜……四五上
絲瓜……四五上
甜瓜……四五下
西瓜……四五下
錦荔枝……四五下
磬梨……四六上
桔蔞……四六上
桔梗……四六上
防風……四六上
澤瀉……四六上
麥門冬……四六下
石蒜……四六下
酸摸……四六下
酢漿草……四六下

白前……四七上
大蓼……四七上
立葵……四七上
蒐菪……四七上
鼓子花……四七上
鐵掌艸……四七上
白頭翁……四七下
兔絲……四七下
三稜……四八上
玉樓春……四八上
石逍遙……四八上
連錢草……四八上
烏鳳花……四八上
蘧篨草……四八下
鹿蹄草……四八下
羊乳……四八下
淫羊藿……四八下
薄荷……四八下
沙參……四八下
大戟……四八下
澤……四八下
鴨跖艸……四九上
茯蒲根……四九上
蕺菜……四九上
升麻……四九下
遠志……四九下
天麻……四九下
龍牙……四九下
兔葵……四九下
景天……四九下
獨頭蘭……五〇上
蓍……五〇上
浮薺……五〇下
石龍芮……五一上
眼子菜……五一上
菰……五一上
燕子花……五一上
牛面艸……五一下
綿棗兒……五一下
蘿摩……五一下
羊蹄……五一下
蘭菊……五二上
聚八仙……五二上
車前……五二上

海金砂……五二上
堇……五二上
碎米菜……五二下
錢藤……五二下
燕麥……五二下
天南星……五三上
蕊吾……五三上
續斷……五三上
卷柏……五三上
有通……五三上
紫羅傘……五三上
水仙……五三上
嬰莫……五三上
西番連……五三下
南天燭……五三下
玉紫……五四上
茶蘼……五四上
水楊……五七下
白楊……五七下
接骨木……五七下
楠木……五七下
山椒……五八上
枸橘……五八上
樟……五八上
橙……五八上
枸骨……五八上
釣樟……五八上
李……五八下
柚……五八下
笋……五八下
柴……五八下
榾……五九上
菌茸……五九下
松毬……五九下

卷四

器用

注連……六〇上

郁子……五四上
天仙花……五四下
合子草……五四下
堅香子……五四下
辛夷……五五上
笑靨花……五五上
雪毬花……五五上
八手木……五五上
莽艸……五五上
木槿……五五下
曼陀羅花……五五下
五味……五五下
薤……五六上
山茶科……五六上
柾……五六上
合歡木……五六下
吉利子樹……五六下
蚊子木……五六下
橡實……五七上
小梅……五七上
八朝梅……五七上
寒紅梅……五七下
屋臺……六〇上
紙手……六〇上
稻扱……六〇上
連枷……六〇下
碓……六〇下
枵……六〇下
篩……六一上
案山子……六一上
賸……六一下
機躡……六一下
杼……六一下
尺……六一上
綿筒……六一上
柊……六一上
樣……六一上
斬……六一上
鋸……六一上
算盤……六一上
杠秤……六一下
錢……六一下
彎……六一下
椀……六一下
猪口……六一下

盆……六三下
俎板……六三下
摺鉢……六三下
摺粉木……六三下
燈臺……六四上
鐵灸……六四上
飯櫃……六四上
煙筒……六四上
煙盒……六四下
釜……六四下
鍋……六五上
杓……六五下
茶碗……六五下
鑿……六五下
湯鑓……六五下
土瓶……六六上
提燈……六六上
行灯……六六上
灯檠……六六下
發燭……六六下
衣架……六七上
歩障……六七上
剃刀……六七上
櫛……六七上
櫛……六七上
蟬髩掃……六七下
皆……六七下
竹瓮……六七下
人偶……六七下
紙帳……六八上
穀匣……六八上
桶……六八上
盥……六八下
籬……六八下
裳……六九上
苞……六九上
木鉢……六九上
杵……六九上
梯……六九上
甄……六九下
漏斗……六九下
扉……六九下
草履……六九下
橋……七〇上
供饗……七〇下
財布……七〇下
巾着……七一上

衣・食

羽織……七一上
袴……七一上
頭巾……七一上
腰帶……七一上
繻半……七一下
犢鼻褌……七一下
寢衣……七二上
雨衣……七二上
飯……七二下
小豆粥……七三上
奈良茶……七四上
雑炊……七四上
牡丹餅……七五上
團子……七五下
煎餅……七六上
白雪糕……七六上
滑餡……七六上
糒米……七六上
炒……七六上
菜服漬……七六下
酒……七六下

卷五

言語

大いなる事……七八上
多いと云事……七八下
わざとゝいふ事……七八下
所の仕來といふ詞……七九上
見よといふ事……七九上
勞して苦しむこと……七九下
いかにしてもと云事……七九下
女色の事……七九下
呵らるゝといふ事……八〇上
よひとよといふ事……八〇下
方外なる物……八〇下
かはいらしいと云詞……八一上
あぢなし……八一上
情なきといふ詞……八一下
しぐむといふ事……八一下
久しきといふ事……八一下

あるましき事をするといふ詞……八二上
他をさしていふ詞……八二上
自をさしていふ詞……八二下
穴のあいたといふ事……八二下
おそろし……八二下
こゝろなく……八三上
あそこ・こゝ……八三上
あのやうに・このやうに……八三上
出る……八三下
よいと云事……八三下
わるいといふ事……八三下
すてると云事……八四下
負ふと云事……八四下
東へ西へといふ事……八四下
右へ左へといふ事……八五上
つかはせといふ詞……八五上
くるゝといふ事……八五上
なに事じやといふ事……八五下
たのみなきといふ詞……八五下
ある時にと云事……八五下
くたびれといふ事……八六上
打擲すといふ事……八六上
ゆるやかに坐する事……八六上
かりそめと云詞……八六下
やをら……八六下
急にといふ事……八七上
目さむる……八七上
明日・明後日といふ事……八七上
雨降らんとして日和になりたるを……八七上
日和の定らぬを……八七上
羞明といふ事……八七下
あたらしいといふ事……八七下
うつぶくと云事……八七下
律義なる人……八七下
太義なといふ事……八八上
なぜと云事……八八上
脇へ退といふ事……八八上
しらぬといふ事……八八下
互に人を雇ひつ、やとはつれつする事……八九上
たづぬるといふ事……八九上
めてたきと云詞……八九上
嫁といふ事……八九下
夕……八九下
他人を馳走する事……九〇上
醜き女を譏る詞……九〇上
おめきさけぶと云詞……九〇上
咳をせく……九〇上
めいわくといふ事……九〇下
道路のぬかり……九〇下
跨といふ事……九〇下
水にものを浸す事……九〇下
なぶる……九一上
されたはふるゝ事……九一上
さうじや・かうじやと云を……九一上
物に驚くこと……九一上
養生……九一下
正直……九一下
いつはりうそ……九一下
やくたいもなしといふを……九一下
いかやうにもといふを……九一下
是ほどゝいふ詞……九二上
はなはだしきといふ詞……九二上
物を借るといふ事……九二上
ぎしむ……九二下
直にといふ事……九二下
他と連立行を……九二下
際……九二下
外の事……九三上
物に喫の生したるを……九三上
焦臭を……九三上
おろかにあさましきを……九三上
月水……九三下
物事輕率に騒しき事……九三下
殘りなくと云詞……九三下
たび〳〵といふ事……九四上
ねんごろなる事……九四上
いろ〳〵といふ事……九四上
居るといふ事……九四上
八道……九四上
十六むさし……九四上
石投……九四下
かくれんぼ……九四下
鬼わたし……九四下
他の呼に答る語……九四下
助語……九五上

以上

(1)「諸國方言」ノ四字ナシ

(1) 和名鈔
(2) 平聲
(3) あながち
(5) げつ
(6) 自然

物類稱呼諸國方言序

二條のおとゝの鈔波集に草の名も所によりてかはるなりといふ句に救濟法師なにはの芦もいせの濱荻と附しにもとづきて諸國の方言の物ひとつにして名の數々なるたぐひを採り選ひて五の卷とはなしけらしそもくいにしへを去る事遙にしてそのいふ所も彼にうつりこれにかはりて本語を失ひたるも世に多かるへし中にも都會の人物は萬國の言語にわたりてをのづから訛すくなししかはあれど漢土の看語に泥みて却て上古の遺風を忘るゝにひとしく邊鄙の人は一郡一邑の方語にして且てにはあしく訛おほしされども實素淳朴に應してまことに古代の遺言をうしなはず大凡我朝六十餘州のうちにても山城と近江又美濃と尾張これらの國を境ひて西のかたつくしの果まて人みな直音にして平聲おほし北は越後信濃東にいたりては常陸をよひ奥羽の國々すへて拗音にして上聲多きは是風土水氣のしからしむるなれはあながちに褒貶すべきにも非す畿内にも俗語あれば東西の邊國にも雅言ありて是非しがたししかしながら正音を得たるは花洛に過べからずとぞ今こゝにあらはす趣は其事の淸濁にさのみ拘はるにもあらずたゞ他郷を知らざるの兒童に戸を出すして略萬物に異名ある事をさとさしめて遠方より來れる友の詞を笑はしむるの罪をまぬかれしめんがために編て物類稱呼となつくる事になんなりぬ

安永乙未孟春日

江都日本橋室町 越谷吾山識

物類稱呼凡例

一此書あつめて五冊となし天地、人倫、艸木、氣形、器用、衣食、言語、等を七門にわかつは、簡易にして探り索めやすきを要とす。それが中に天地と言語と器用衣類の如きまゝ交へ出すもの有。もとより街談巷說を、聞るにしたがひてしるし侍れば、管見不堪の誤多からむのみ。又其國にて如レ此稱すとは、國中凡の義にあらす。一國は勿論一邑のうちにても品物の名異るもの也。具に錄する事あたはず

一諸品の和訓は源順ノ和名鈔及漢語抄、本朝印行の諸家本艸等に讓りて悉に誌さず。聊是は識者のために非す、專蒙に便せんとす。故に事物の悉く知りやすきのみを載て、なを又所々註釋をくはふ

一引用る所の書の目には□（○編者云、今植字の便宜上□を以てこれに代用した。）をもふけて是をわかつ、又方言の讀法には｜をもつて知らしむ。たとへば花鳥風月くは｜ちやう　ふう｜げつ　如レ此の類ひなり。余是に准ず

一諸國ともに中品以上の人物は言語あやまらす。靑聲自然と和合して能通用す。故に爰に洩す事多し

一此編に著す所は唯民俗要用の事のみをしるす。廣大なる國郡無盡の言語、いくばくの歲月を經るとも大成する事難し。殊更短才をもはからず、をそらくは蠡海の譏もあらんかし

物類稱呼卷之一

江都　越谷吾山秀眞　編輯

天　地

北辰　ほくしん（北極と稱するもをなし。うごかぬ星なり）○上總國にて。ひとつのほし又番のほしと稱す

北斗　ほくと（うごく星なり）○東國にて。七曜のほしと稱す。又四三の星ともいふ

昴　ぼう（すばる星と云、二十八宿の内也）○東國にて。九ようの星と云、江戸にては。むつら星といふ

參　しん（からすきぼしと云、二十八宿の内也）○中星の横につらなりたる三の星を江戸にて。三光といひ又三ッ星といふ。關西にて。親になひ星と云。東國にて。三ちやうの星と呼。武藏の國葛西にて。さんかぼしといふ

風　かぜ○畿内及中國の船人のことばに、西北の風を。あなぜと稱す。二月の風を。をに北といふ。三月の風を。へばりごちと云。四月未の方より吹風を。あぶらまぜと云。五月の南風を。あらはへといふ。六月末の風を。しらはへといふ。土用中の北風を。土用あいといふ。七月末の風を。おくりまぜと云。八月の風を。あをぎたといふ。九月の風を。はま西といふ。十月の風を。ほしの入。ごちといふ。十一月十二月の頃吹風を。大西と云○西國にても南風を。はへと云東南の風を。をしやばへと云○北國にては東風を。あゆの風といふ。西北の風を。よりけと云。北風を。ひとつあゆと云。東北の風を。ぢあゆと云。丑の方より吹風を。まあゆと云。南風を。ぢくだりと云○江戸にては東南の風を。いなさといふ。東北の風を。ならいと云（つくばならいといふあり）西北の風を。はがちと云。東風を。下總ごちといふ。未申の方より吹風を。富士南と云○伊勢ノ國鳥羽、或は伊豆國の船詞に、二月十五日前後に一七日ほど、いかにもやはらかに吹く風を。ねはん西風といふ（但し年毎に吹にもあらず）三月土用少し前より南風吹。あぶらまじといふ。四月よき日和にて南風吹。おほせといふ。五月梅雨に入て吹南風を。くろはへといふ。梅雨半に吹風を。あらはへと云。梅雨晴る頃より吹南風を。しらはへと云。六月土用半過より北東の風一七日程吹年有。ございと云（六月十六七日伊勢の御祭禮有、出家も參事也。故に御祭といふ也）六月中旬東風吹年

(1) をは

(2) 東南ノ風

あり。ほんごちと云。それ過てより南風吹。をくれまじといふ。八月の風を。あをぎたと云（はじめは雨にそひて吹、後はよくはれて北風吹なり）又。雁わたしとも云。十月中旬に吹く北東の風を。星の出入といふ（夜明にすばる星西に入時吹也）又大風には二月吹を。貝よせと云（正月の節より四十八夜前後の西風也）三四月東南の風吹を。なたねづゆと云。四五月吹東南の風を。たけのこづゆといふ。八月に吹風を。野分といふ（正月の節より二百十日め前後にふくなり）十月西風吹。神わたしと云（霜月の荒といふは、廿三日より晦日までの間に荒るとしあり）○近江國湖水にて、風の定らぬ事を。論義といふ。日和風を。といてと云。湖上の風を。根わたしと云。秋冬の風を。日あらしといふ。春夏の風を。やませ風、又。ながせ風、又。せた嵐など云○播磨邊、又四國にて、春南風にて雨を催す風を。やうずと云○越後にて東風を。だしといふ。西北の風を。しもにしといふ。西南の風を。ひかたといふ

今按に、西北の風を名づけて「あなぜ」といふは「あなじ」の轉語也【後拾遺】に

〽あなじ吹瀬戸のしほ合に船出してはやくそ過るさやかた

山を

と詠せし也。上古風をば「し」(1)と稱し「ち」と稱せり。嵐こがらしこち・はやちなといふ是也。又神社の棟に有千木といふ物も風木とも書也。尙說あり。又二月ふく風を「鬼北」といふは、丑寅の間より吹くをいふなるべし。丑寅の方を鬼門といへばなり。又「あぶらまぜ」は「あぶらまじ」の轉語か、あなじとをなじき心にや、又はへは薫風也【呂氏春秋】。東南(2)風を云と有【事文續集】夏ノ風也と見えたるも同じ。俳諧に風薫と句作するもこれなり。又星の入ごちと云有、惣じて九月の節より正月の節中は、すまる星の出入に日和かはりやすき物也。常には月日の出入をよく心得べし。夜入る月にはひよりそこねやすし。夜出る月には少惡くも直る事あり。是を若月の入、そこね、出月の出直りと船の上にていふ事也。又俗に春北風に多南、いつも東は定降の慕雨といへる諺有。又

〽五月西、春は南に、秋は北、いつも東風にて雨降るとしれ、

とよめる俗歌もあり。其國々々におるて方角のかはりめ有。大凡關西は西風なれは則雨降、東風にて則晴るといへり。關東にては西風にて晴れ、東風にて雨降る也【詩】雪ノ々ノ谷ノ風以陰以雨ノと有。谷風は則東風也。しかあれば異國にても東風にて雨降ると見えたり。又東武にて。はやてと云。爲家卿の歌に

〽浪しらむ沖のはやてやつよからし生田かいそによする釣舟

【舊事紀】疾風と有、是也。又八月の風を暴風と云。歌連俳ともに野分と詠。陸奥にて鮭下風とよぶ、此頃より鮭の魚を捕といへり

夏雲　なつのくも　○江戸にて。坂東太郎と云（坂東太郎といふ大河あり）大坂にて。丹波太郎と云。播磨にて。岩ぐもといふ。九州にて。比古太郎と云（比古ノ山ハ西國の大山なり）近江及越前にて。信濃太郎と云。加賀にて。いたちぐもといふ。安房にて。岸雲と云

今案に、これらの異名夏雲のたつ方角をさしていひ又其形によりてなづく

〽水無月になりぬと見へぬおほそらにあやしき峯の雲の色かな

と詠し給ふ【古文前集】四時ノ詩云、春ノ水滿ツ四澤ニ夏ノ雲多シ奇峯とあり。この詩より、今俳諸に雲の峯と句作なす歟

虹　にじ　○東國の小兒。のじと云。尾張の土人錦づるといふ。西國にて。いうじと云。【萬葉】ぬじ又のすとも詠り（西國にていうじと云は夕虹の略語か）

液雨　しぐれ　○美濃加納にて。山めぐりと云【丹鉛錄】曰、張野處ノ廬山記云。天將雨則有白雲、或冠峯岩、或亘中領、俗謂之山帶、不出三日必雨云々。又唐詩風吹山帶遙知雨なども作れり。又不時に村雨の降を、相州箱根山にて。わたくし雨といふ

雪　ゆき　○東武にて。綿帽子雪といふを、西國にて。花びら雪と云。中國にて。へだれ雪と云。越路にて。ほた雪といふ。上總にて。ほたん雪と云。雲州にて。だんびら雪といふ。又ほろ〳〵降る雪を越路にて。はだれ雪と云

霜　しも　○關西にて。露霜（いまた霜の形をなさゞるをいふ）といふを、關東にて。水霜といふ。なを說有略す

氷柱　つらゝたるひ　○越後にて。かな氷と云。奥の津輕にて。しがまといふ。同南部にて。墮氷と云。仙臺にて。たるひと云。會津及信州邊にて。すごほりといふ。西國及近江邊にて。ほだれと云。下總にて。とろろうといふ。下野にてほうがねと云。伊勢白子にて。かなごと云。出羽最上にて。

ほんだらと云（氷柱垂氷の說有、略す）

凍　いて　○山陰道及相州箱根小田原邊にて。しみと云。源通村卿の詠に

へはこね山また明ぬまに越ゆかん道のぬかりのしみとけぬまに

水　みづ　○上總下總邊小兒の詞に。まんまと云。薩摩にて。あかといふ。閼伽は水の梵語也。但舟にては諸國共に「あか」といふ

泥　どろ　○備後福山にて。だべんと云　今按に金泥・銀泥なといふ物も此意成へし。可後勘（和名「ひちりこ」又「こひぢ」と云、戀路によそへて歌によめり）

水口　みなくち　○（苗代へひく水くち也）上總にて。水の手といふ。越中ノ國にては。いのくちと呼。東國にて。水口と稱す　今按に、苗代とは上古田地を代といひし也。今もしろをかくと云事有。又雁など時々に田を飛さるを、代をかゆるといふも此こゝろなり

原　はら　○筑紫にて。はるといふ（何のはる、かのはるなといふ）

土堤　どて　○上總及信濃にて。まゝといふ（つゝみといふ有、土堤とは別也）

崖險　がけ　○筑紫にて。ほきといふ

谷　たに　○關西にて。たにと稱す（黑谷鹿谷のたくひ也）相州鎌倉及上總邊にて。やつと呼（扇か谷、龜か谷等なり）江戸近邊にて。やと唱ふ（澁谷瀨田谷等也）

岩窟　いはや　○鎌倉及上總にて。やぐらと呼ぶ

穴　あな　○東國にて。めどと云。【東雅】曰孔竅を呼てめどと云、あなめど又轉して「みづ」と云、針の穴を「みづ」といふが如き是也

四會　よつゝじ　○奥州津輕にて。十文字と呼（十字【說文】ニ云衢也）信州にて四方の辻と云。越後にて。四ツ口といふ。同長岡にて。よつかどゝ云。下總にて。四ツ岐といふ

小路　こうぢ　○京都にて稱す。江戸にて。横丁と云（但式部小路・鍛小路、又浮世小路なと呼有）大坂及伊勢松坂にて。小路と云。勢州山田にて世古と云

辻子　京にていふ。江戸大坂ともに。ろぢといふ

河岸　かし　○江戸にて。かしといふ（本町河岸、或は濱町がしなと云）大坂にて。はまといふ（濱の芝居などいふ）京にて。川ばたといふ

(1) 鹿谷

(2) 「谷」ノ振假名「やつ」無シ

(3) 「と云」ノ二字無シ

閻浮　ねや　○遠州にて。ほそをりと云。下總にて。こさといふ。武藏にて。をかたといふ

庇　ひさし　○關西にて。をだれといふ。越後にて。がぎといふ（いせの國にて家居にあるを庇といひ、土藏に有をがぎといふ。江戸にては商家の暖簾といふものをかくる具に尾垂といふ有）

地震　ぢしん　○關東及北陸道にて。ぢしんといふ。西國及中國四國にて。なゐといふ。【日本天智天皇紀】是春地震と有

雹　いし　○畿内にて。ごろたと云は、石の小なる物を云。東國にて。石ころといふ。山陰道にては。くりと云（細小なるものか）越中にて。いしなといふ。江戸にて。じやりと云

日南　ひなた　○野州栃木にて。てるみといふ。日陰を。てるくみといふ（東國にて樹陰を。こさといふは木さはりの略語にや、又爲家卿の歌に、へこさふかはくもりもぞするみちのくのゑぞには見せし秋の夜の月と詠し給ひしは、蝦夷人の術に胡砂吹といふ事の有よし也）

神無月　かみなづき　○出雲國にて。かみありづきといふ（貝原翁いづもの國にても神在月とは稱せずといへり。然とも大社神領はみな神ありづきと稱す）

晦日　つごもり　○阿波の國にて。こもりといふ。奥ノ津輕にては十二月小(1)月なれは翌朝日を入て終晦日として、正月二日を元日とす。是を津輕の私大ともいふ也

人倫

父　ちゝ　○大和にて。あんのうと稱す。播磨邊より西國にて。てゝらと云。長崎にて。ちやんと云。肥前佐賀にて。別當といふ。越前にて。のゝといふ。父を「てゝ」と稱し「とゝ」と呼ふは諸國の通稱也【萬葉】及【字治拾遺】等に「てゝ」と見えたり。「とゝ」は【稗文】ニ爹爹と書侍るもあれど「てゝ」といひ「とゝ」といふは、父の轉語なるへし。又上總にて祖母を祟めて「のゝ」と稱し、越前にて父を「のゝ」と呼は極老の剃髮せしなどを「のゝ」といひならはしたる物ならん、小兒に對して如來を如々と略語し、如々轉して「のゝ」となりたる物か。但し古代よりの詞なる歟しらず

母　はゝ　○西國にて。かくといふ。長崎にて。あひいと云（阿妣なるべしといふ說あり）肥の佐賀にては。あうほうと云（阿母といふの轉語にや）出羽にて。だゞといふ　山崎垂加翁ノ云、俗人の母を稱して袋といふは胞胎の義に

(1) 小月

よろと云々。又母といひ「かゝ」といふは、諸國の通稱歟。京にて兒童は。ハワサンと呼ひ、年長しては母者人と稱す。東國にては。かゝさんといふ【袖中抄】に、きり〳〵すのなく聲つゞりさせかゝはひろはん【註】かゝとは古きつゞれなとの事と也。しかれは下賤の者の妻女を「かゝ」と呼は是より出たる歟。又「はゝ」と云詞轉して「かゝ」となりたる歟。父といひ母とよぶはもとより通稱にして、それより轉したる詞も國々多かるべし。たゞけやけき語のみをこゝに記す。以下准之

兄　あに（嫡子也、俗に總領といふ）○越後にて。あんにやさといふ。東國にて。せなといふ。出羽にて。あんこうといふ。奥ノ南部にて。あいなといふ。九州にて。ばほうといふ。備前にて。親かたといふ。土佐にて。おやがたちといふ（備前にていふ親かたもをなし心か）　西川氏ノ云、ばほうと云は破茅なるべきか、或書の中に茅の始て土中に生したる物を破茅といふと見えたり云云。吾山熟案に、破茅の說も可ならん、しかはあれどばほうは梅朋の略ならん歟。梅は花の兄ともいへば梅の朋と云意なるべし。又曰兄を「せ」といひ、弟を「なせ」といひし事【日本紀】に見へたり。又妹背といふは妹と背との事なるよし、東土にて「せな」といふも古代の遺風なるべし

姉　あね ○九州にて。ばほうぢよといふ。上總房州にてなゝといふ（兄弟に限らず、目上の女を尊んで「なゝ」といふ）

夫　をつと ○薩摩にて。との丈といふ（夫男夫子などゝ歌書にをゝく出）

妻　つま ○京にて他の妻を。お內義さんとよぶ。大坂にて。おゑさんとよぶ（お家さま也）江戸にて。かみさまといふ。甲斐にて。中居といふ（甲州の國風の哥にへ甲金や三升舛に四角箸切はふづくりをこれお中居とよめり）播磨邊、又越後わたりにて。ごりよんと云（よめ御料などの轉語か）奥州南部、又は津輕にて。あつばといふ（吾が母といふの轉語なるべし、小兒の母に對していふ詞か）仙臺にて。おかたとといひ、又ごゞさまと呼は、たつとぶ詞なり。御は尊稱也御は女の通稱也。故に御をかさねて唱るにや。又仙臺にては媳婦を呼て。をむかさりといふ。上總にて。めことといふ（【源氏】に、めこのかほも見でと有、これは吾妻也）他の妻をば。をちようと云（御女郎の略語か）伊勢にやよといふ（下賤の妻をいふと也）尾張にて。お家とよぶは、江戸にてお袋といふにあたる、同國にて。かみさまとよぶは、老女の稱也。對馬にて。をゆみといふ。肥ノ佐賀にて。をとも女郎といふ（おともとは手前の事をいふ、おとゝいふ時はそこもとゝいふにひとし）又をかたといひ、女房內義なとやうの詞は、通稱にして記にいとまあらず

小兒　をちご ○京にて。いとゝ稱す（いとをし、又いとけなしなとの下略なるべし）關東にて。ねんねといふ（やゝとよぶは諸國の通語也）信州にて。あかといふ（同國にて。びいとよぶは幼女なり）越後にて。ほゞつごといふ（同國にて「にがこ」と云はみとりこの事也）奥羽にて。わらしといひ又ほこといふ（わらしは童男也【和名】童わらは又振子わらはべ、注ニ童男女と有、今わらんへともいふ通稱也）長崎にて。さまといふ（同所にて「ごゞ」と云は小女の事也）。奥ノ南部にて末子を。よてことといふ。武藏下總にて。てごといふ。案に、奥羽にて。ほこといふ詞は古代の遺語なるべし。東武にても。をほこと云。二度をほこなと云詞有。是も小兒を「ほこ」といふ意也。又「わこ」といふ詞有。上古「わけ」といひし詞轉して「わこ」といふ【古語拾遺】男兒をワコと(1)よみたり。俗に若子の字を用るはもと是弱の字を用ゆへき事なれと、其字又讀て「よはし」といふを嫌ひて若の字を借用ひし也といへり【萬葉】かつしかのまゝのてこなと詠せしは、かの邊にてすへの子を「てご」といひぬれば、てごの女といへる事なるにや未詳

息女　むすめ ○京畿にて。ごれうにんといふ。薩摩にても。ごれう(2)といふ。中國及奥州にて。おごうといふ（御とは女の稱也）奥の南部にて。をごれんといふ。越後ノ高岡、長岡にて。をこれんといふは他の妻女を云也。備前なともなし

乳母　めのと（俗にうばといふ）○畿內の小兒は。ちいと云。江戸の小兒は。をちゝといふ。尾張邊又陸奥にてまゝといふ（古き詞にて源氏物語にも見えたり）（南留別志）に云、あことはうばの事也。上總國一宮といふ所は、あこなし御曹子の城なりと、千葉介が乳母にうませたる子也「なす」とはうむといふ事也。又

へうつくしやべにには似たり梅花あこがかほにもつけたくぞある

菅家のいときなき時よみ給ふなといふとあり。今案に、

(1) ワユ

(2) これう

(1) こひ

徂來翁の說明らかなり。然とも小兒をも「あこ」といひしにや。日本紀に見えたり【職人盡歌合】機織女の詞に、あこやゝくだもてこよと有。是は小兒をさして「あこ」といひしやうに聞えたり。今も東國の邊土にて「あこ」といひ京畿にて「わこ」といふ類皆通音にて同し意ならんか。又「須兒」といふは、賤きものをいひて、小兒にてはあらず。俊賴朝臣の歌に

〻山里はすこが竹垣さきはやす萩をみなへしこきませにけり

寡　やもめ（俗に後家又後室ともいふ）○京にて。やまめと云。尾州にて。やごめといふ（これらは轉訛してかくいふものか）遠江にて。つぐめといふ

妾　おもひもの○京師にて。てかけとよぶ。東國にて。めかけと云。西國及尾州にて。ごひ(1)と云（御妃にや）。奥ノ南部にて。おなめといふ

遊女　うかれめ　○畿内にて。をやま又けいせいと云。江戸にては。女郎といふ（江戸にてはをやまと云名は戲場にのみ有）伊勢ノ山田にて。艶女といふ。同國鳥羽にて。はしりがねと云（鳥羽は湊成によりて、はしるとは船人の祝詞なるべし）近江にて。そぶつといふ。出羽秋田にて。ねもちといふ。奥州にて。をしやらくといふ（國によりて遊女のなき所も有也。他鄕の遊女をさしてもいふなるべし）奥州松前にて。やかんといふ。越前敦賀にて。かんひやうと云（夕がほをさらすといふ心なり）又越前越後の海邊に浮身と云物有、是は旅商人此所に逗留の内、女をまうけて夫婦の如くす。此家を浮身宿と云

〻海に降る雪や戀しき浮身宿　はせを

今按に、傾城の名は李・延・年か詩の意をとりて倭俗遊女の稱とはなせり。和漢に遊女の名有事久し【詩】漢有遊女云々【東鑑】清水冠者を遊女の別當とせられし事を載たり。又遊女の異名をゝし。所謂「ながれめ」「うかれめ」「うかれ妻」「海士の子」「たはれめ」「ひとよ妻」等也。古歌に詠せし地名は美濃の野上の里、青墓の里、近江のかゝみ山、野路、小野のしの原、尾張にはかやつの原、山城に大井川、小倉山の麓など詠せし也。川竹のなかれの身なといへるは、或は備後、鞆の津、津ノ國ノ神崎より出て揚屋、新艘、水揚、引舟、これらの品類悉く水邊によるの名なりとかや。淫語にかけるといふ詞有。これ又水邊によせて、橋

(1) 妓字

(2) 客

の緣よりいひならはしたる物か【拾遺集】

〻中々にいひははなたてしなのなる木曾路の橋のかけたるやなそ　源賴光

かゝる歌の心ばへにもかよふなるべし。また古は軍營へも妓を迎へし事有。妓者待軍士無妻者と見え侍る。妓は十人にすぐれたる奴を見立て妓に仕立る故に、奴の字の上に十字を冠らしめて妓字(1)とすともみえたり。又花柳に入の客を呼て大盡といふを、大神になそらへてみな神樂の緣語をつけたる物か。末社・牽頭・御幣持・ヲヒヤル（笛の音によるか）神なとゝよぶ類也。妓有と云物有。若いものといふ。ぎうは牛にて牛は鼻にてつかふ也。又ぎうは花にてつかふ也（花は客(2)の賜物也）又は遊君を花と見て花に遣はるゝといふ意にもあらんか。既に忘八屋の妻を花車といふ。花をまはすといふ意也。大坂の新町はいにしへの神崎を此地に引たる遊所也。遊女の詞一格有。又京都にて西鳥訛といふは、島原詞と云事也。たとへば祇園町にて「なさるか」「なはらんか」などいふを、島原にては「なますか」「なさせ」なとゝいふ。江戸吉原にて「よくありんす」といふを、京にては「よいわいなあ」といふ。吉原にて「すきんしんよ」といふを、京にては「すかんわいなあ」と云。如此の妖言は、其ひとつ二ッをあげて省て記さず。又いはく、遊女は老去まて眉を描しにや【金葉集】

〻さりともとかく眉墨のいたつらに心ほそくも老にけるかな

遊女を君といひし事は【彌世繼】に云、とをとうみの國はしもとの宿につきたるに、例の遊女えもいはず鎭東さうぞきてまいれり、賴朝卿うちほゝゑみて

〻はしもとの君に何をかわたすべき、と有ければ、梶原平三景時下の句つかうまつりしことなと有。爰に略す○傀儡は美濃國野上ノ里なと其外國々の驛舍に有て、今云人形なとまはして旅客をなくさめし遊女也。今時飯賣又飯盛なといふも彼傀儡の類にや

○遊客の曲廓に至るを京都にて。騷と云。江戸にて。そゝりと云。長崎にて臘ふりといふ○京大阪にて茶屋とよぶは、芝居の茶屋又は水茶屋の事を云。遊里に有茶屋はみな揚屋といふ。江戸にては吉原中ノ町其外殘らす茶屋と呼なり

○京大坂の旅人宿の下女を。はすはといふ。東海道筋に

て。をじやれといふ。越後にて。しやくといふ（すこしの流をくむといふこゝろなり）。相州小田原邊にて。ばくといふ（遊女をよねといへは、米に對したる麥なり）。勢州にて。出女房といふ。又同國及美濃にて。もか共云。遠州にて。やぞうといふ。信州輕井澤にて。をしやらくといふ。出女は驛舍の婢也。【風俗文選】に出女説有、今こゝに贅せず。旅籠屋といふも古くいひつたへたり【萬葉】八多籠良と書【和名】鞄飼馬籠也と有。又西國及東國の童謡に、旅籠はいくら、十三はたごといふ事あり。いにしへ鳥羽街道にて十三錢の旅籠ありし事なりとぞ

夜發　やほち【和名】○京大坂にて。そうかといふ（いにしへ辻君立君などいへるものゝたくひか、大坂にて濱君などゝ古くいえり）。江戸にて。よたかといふ。紀州にて幻妻といふ。長崎にて。はいはちと云。四國にて。けんたんといふ（間短と書か）。大坂及尾州にて人の妻をけんさいと云。是は罵る詞に用ゆと見えたり。【春秋左氏傳】昭八年有仍氏ノ女嬦黑而光可以鑑名曰玄妻

濾酌奴　ろくしやく○京都にて造酒屋の下部をろくしやくと云（又乘物を舁ものをもいふ）東國にては造酒家の桶の大いなる物をいひ、又乘物をかくものをいふ

或云、主人たる人の心を京間六尺五寸間にたとへて、下男の心を田舍の六尺間にたとへて、下部たる物を六尺とはいふ也。案に、酒家の下男をろくしやくと名くるは、酒を濾酒を酌を役となすものなれは、濾酌といふ意を用へきか。又、乘物を舁ものをろくしやくとよぶは【史ノ始皇本紀】秦ハ水德を以て王たり、故に六の數を用ゆ。輿は六尺なり、と見えたり。しかれは輿の六尺の數よりろくしやくの名も出たるにや。又かの乘物舁く者はきはめて長高きものなるが故にかくなつけたる歟

○酒釀事を司とるものをとうじと云は、一説にいにしへ藤次郎と云ものよく酒をつくる、是とうじといふは美にはじまるといふ。又一説に頭兒と書て酒家のかしらおとことといふの儀なりと。又異國にては杜康よりはじまりたれは杜氏なりといふ説有。【東雅】おかし酒造司に大刀自・小刀自・次刀自とて三ヲの酒造る壺有ける。其大刀自は酒三石ばかり入し物也。後に酒つくる人をも刀自といひしは、古よりいひつぎし言葉なるか、彼酒造司の刀自は三條院の御時大風に司たふれし時に、自うちわりてけりと古きものにしるし置けり。是等の事の如きも、世には異國のことなど附會していふ説ありと見えたりと有

○酒狂人を東國にて。なまるひ又よつばらひといふ。大坂にて。よたんぼといふ。遠江にて。泥ぼうといふ（醉て泥の如しといへるこゝろにや）。薩摩にて。醉食ひといふ。肥前唐津にて。さんてつまごらと云

奴　しもへ（俗に下部と云、僕をなし）○上總にて。けご（けごは古きことば也）越後にて。なごといふ。備前にて。できといふ（できは東國に云やろうをなし）。京にて。久三（一季奉公人をいふ、江戸にてはわたりものといふ）

陰陽師　をんみやうじ（をんやうじと唱ふ。然ともをんみやうじとよむ也）○備州にて。かんばらといふ（尾州にて寒中に寒ノ御祈禱寒はらひといふて、鈴をふりてよびありく有、此たくひにや）京にて。しやうもんしと云（唱門師は、人の門にたちて金鼓を鳴らし、米錢を乞ふ僧の事也。しやうもんしとよぶは心得違なり）

梓巫　あづさみこ○東國にて。降巫又口よせといふ。播摩にて。たゝきみこと云。中國にて。なをしと云○京にて。大原神子といふを、東國にて。かまはらひといふ

氏子　うぢこ○山城紫野にて今宮の氏子を。御幣子といふ

盜賊　ぬすひと○美作邊及東海道にて。じらといふ（中國四國ともにまれにじらといふ、但ししらなみの略語にや。白波ノ故事は【後漢書】に出）武藏及上總下總邊にて。せれうともいふ。近衛龍山公薩摩の方言にて詠給ふ歌に

ぬすとでゝおらぶにはたとたまがりてくわくさつから、にせゝくりそする

○須利　東國にていふ（すりはぬすびとの梵語也とぞ。又【三才圖會】に一説有、略ス）江戸にて。きんちやくきりと云上總にて。さがらといふ。攝州にて。ひるとんびといふ（とんびは鳶也。ものをさらふと云心とかや。東國にてまれ〳〵にかくもいふ也）。

○かたり　東海道及中國にて。ごまのはいといふ。日光道中にて。道中どつこと云。南部にて。よろくと云

乞人　ものもらい○江戸にて。乞食といふ【法華經】清淨乞食又乞食頭陀ノ行これは僧を云）長崎にて。ぼん藏又。山ばん。中國及四國又奥羽より越後越中邊にて。はいたうといふ。【庭訓抄】陪堂飯米を割る僧なりと有。又筑紫にて。

(1) よつばら
(2) たまがりて

ごうといふ。此國にてはこじきといふものは癩病人なり。江戸にていふ菰かぶりといふものをへいたうと云。上總にて。へいたう、是は乞食也。下總にて。氣らくといふ。肥ノ唐津又は薩摩日向にて。ぜんもんといふ。京にて。ばんたといひ又。ひでんじといふ。大坂にて。垣外といふ

今按に、悲田寺は京都鴨川西の邊に有。【拾芥抄】云、聖武天皇施藥・悲田の二寺を建て、施藥院は大人の病を療し悲田寺は小兒及乞食の病を治す。後終に乞食の寓と成よし見えたり。今におゐて癩病人の親族に捨らるゝもの般若坂に集り・往來の人に物を乞ふ。【續日本紀】云、武州入間郡の界に悲田所を置と見えたり。然らは京師のみに限らす、所々に在し事にや。又聖德太子悲田院を建て郭内に居らしむ、魁首を長吏として郭外のものを非人とす。故に今も東國にて穢多を呼て長吏といふはかゝる遺風にや。或說に、癩病人をかつたいといふは、悲田院と書て悲田院より起たる名也といふ。是は鑿說也。【證治要訣】害大と有。又關西に物よしといふもの此たぐひ也とぞ。また乞食は乞食の事にて別也、混ずべからず。【土佐日記】【伊勢物語】等にも見へたり。又增賀聖のいせより裸になりて、かたいだにこそよけれ、と大路を諷て歸られしなど今いふ乞食の事也。【發心集】（增賀傳云）名聞こそくるしけれ乞食の身こそたのしかりけり。此事徒然草にも見ゆ

屠兒　ゑた（和名ゑとり）○近江にて。くほといふ。備前にて。よろと云。薩摩にて。人外といふ。東國にて。かはだと云。上總下總にて。かはほうといふ。越後にて。ぶんじと云。同國長岡にて。じなみといふ。奥羽にて。かんほうと云（革坊なるべし）

警　すゞしろ（みどりこのうふ髮、百會のうしろにのこりたるをいふ）○江戸にて。けしぼうずといふ。上總にて。さらけといふ。相模にて。なかやまといふ

韃靼の人物は皆かくの如し。江戸深川に住しその女は勢州山田の產にして渡會氏也。老後に髮を剃といへとも、神家の女なれは僧形を忌て嬰兒のごとくに髮を殘して剃たり。風雅の鐵心に男女の情をわすれたりと常に語られしとぞ。其貞賞すべし

○髮の結ひめを京にて。わけといふ。江戸にて。まけといふ。いせにて。ゑびと云（同國にてゑびをりと云を江戸にてまけぶしといふ）○角前髮といふを、京大坂にて。すんまと云。肥前佐賀にて、あまじほと云。肥後にて。かどずと云。薩摩にて。りはと云。上總にて。こびたいといふ

眉　まゆ　○關西にて。まゆげといふ。東國にて。まみあいといふ。奥州にて。こうのけといふ。常陸及上總にて。やまといふ

腹　はら　○畿內近國及中國四國にて。ほてといふ。東國にては腹とのみ唱へてほてとはいはず。然ともほてくろし又ほてつばらなどいふ詞有。ほてくろしと云は【枕双子】腹黑とあるにをなじ。又東國て臍黑といふ詞もをなし心ばえなり

案に、いにしへ相撲取をばほてと云ける也。【三代實錄】寂（相撲）云と有。今いふ關取といふもの是也。腹をほてと云も、すまひとりを寂といふより出たる名にや、未詳

膝　ひざ　○豐州にて。つぶしといふ。中國にては。ひざのさらといふ。薩摩にて。ひざつぶしと云。奥州南部にて。ひざかぶと云。越後にて。ぶしやかぶといふ

尻　しり　○相模の三崎にて。でんぼと云。備後にて。こつべといふ。伊豫にて。つべといふ

陰　へへつび　○奥羽及越路又尾張邊にて。べゞといふ（關西關東ともにべゞといふは小兒の衣服の事なり）上總下總にて。そゝといふ。此外男女の陰名國々異名多し、略す。（江戸にて物のそゝけたつなどいふ詞有、和泉及遠江邊にてはぼゞけたつと云。江戸にてはさはいはれぬことばなり）

踹　こむら　○東國にて。ふくらばぎといふ。信濃にて。たはらつばきと云。中國にて。ひるますほといふ。讃岐にて。すぼきといふ。伊豫にて。ふくらと云

蜾　くろぶしつぶし　○長崎にて。とりのこぶしといふ。播磨にて。つくるぶしと云。遠江にて。うちめぬき。そとめぬきと云。三河にて。くろこぶしと云。仙臺にて。たゝみいぼと云。上總にて。うちいしなごそとでいしなごといふ

跟　きびすくびす　○關西にて。きびすと云。關東にて。かゝとと云。安房にて。平三郎と云。遠江にて。あぐつと云。信州にて。あくつと云。陸奥及越後にて。あぐといふ。九州にて。あどゝ云

(1) なと
(2) ぼゞけたつ
(3) うちめぬ。きそとめぬき
(4) そとていしなど

物類稱呼卷之一終

物類稱呼卷之二

動物

馬　むま　○ド總國にては。まあとよぶ。同國猴嶋郡及び下野國にては。まあめといふ。其外此國にて、蚊め、とんぼめなど丶下に「め」の字を付てよぶ。是は今つばくら、はたをりむしなどいふ物を、いにしへつばくらめ、はたをりめ、といひしたくひにて、古代の語の遺たるものなるへし。牡馬を伊勢國にて。まる馬といふ。牝馬を奥州南部にて。かけだといふ。西國及四國又は上總にて。だまとも。だ馬ともいふ。駝は和名、におひむま、今いふ小荷駄なり。又諸國にて。ざふやくと云。其意は軍馬に用ひず、もろ〳〵の雜役につかふ故也

牛　うし　○特牛を畿内及び中國西國ともに。こつといと云。東國には。こてといふ。遠江國にては。あこと云　○犢を四國にて。べゝの子といふ。中國東國ともに。べことといふ。又こつていといひ。こてといふは【和名】ことひの誤なり。又牝牛は諸國ともに、あめうしと呼なり

野猪　いのしゝ　○牡を四國にて。うのをとよぶ。牝を。かるいといふ。兒を江戸にて。瓜ぼうといふ。畿内にて。こぶりことよぶ

狐　きつね　○關西にて畫はきつね。夜は。よるのとのと呼ふ。西國にては。よるのひとといふ。又關西にてすべて。けつねとよぶ也。又歌には「きつ」とも詠し【詩經】には、くつねと訓たり。又東國にては畫はきつね。夜は。とうかと呼。常陸の國にては白狐をとうかといふ。是は世俗「きつね」を稻荷の神使なりといふ故に、稻荷の二字を音にとなへて「稻荷」と稱するなるべし。又畫夜とかはりて物の名をよびわくる事あり。予思ふに婦人兒女のものにをそれ、又は物いまひする人、かゝる迂遠の說を設たるなるべし。或は蛇の事を夜は「長虫」といひ、又灯心を「やせおとこ」と云。灯心を調る事をば「やとふ」と云。又日くれて酢を買ふ事を忌む。若もとむれば「酢」とは呼ず、「あまり」といふ。此ことは【職人盡歌合】にも見へたり。又京都に「ひめのり」といふ物を畫は「のり」といひ、夜は「ひめのり」とよぶ也

猫　ねこ　○上總の國にて。山ねこと云（これは家に飼ざるねこなり）關西東武ともに。のらねことよぶ。東國にて。ぬすびとねこ。いたりねこともいふ

夫木抄　〽まくす原下はひありくのら猫のなつけかたきは妹かこゝろか　仲正

この歌人家にやしなはざる猫を詠ぜるなり。又飼猫を東國にて。とらと云。こまといひ又。かなと名づく

今按に、猫を「とら」とよぶは其形虎ににたる故に「とら」となづくる成べし。【和名】ねこま、下略して「ねこ」といふ。又「こま」とは「ねこま」の上略なり。「かな」といふ事はむかしむさしの國金澤の文庫に、唐より書籍をとりよせて納めしに、船中の鼠ふせぎにねこを乘て來る、其猫を金澤の唐ねこと稱す。金澤を略して「かな」とぞ云ならはしける。【鎌倉志】に云、金澤文庫の舊跡は稱名寺の境内阿彌陀院のうしろの切通、その前の畠文庫の跡也。北條越後守平顯時このところに文庫を建て和漢の群書を納め。儒書には黑印、佛書には朱印を押と有。又【鎌倉大草紙】に武州金澤の學校は北條九代繁昌のむかし學問ありし舊跡なり、と見へたり。今も藤澤の驛わたりにて猫兒を囉ふに、其人何所猫にてござると問へば、猫のぬし是は金澤猫なり、と答るを常語とす

花山院御製歌に

夫木抄　〽敷しまややまとにはあらぬ唐猫を君か爲にと求めて出たり

又尾のみじかきを土佐國にてはかぶねこと稱す。關西にては。牛房と呼ふ。東國にては。牛房尻といふ。【東鑑】五分尻とあり

鼠　ねずみ　○關西にて。よめ又よめが君といふ。上野にて。夜のもの又よめ又おふく又むすめなといふ。東國にもよめとよぶ所多し。遠江國には年始にばかり「よめ」とよぶ其角か發句に

〽明る夜もほのかにうれしよめがきみ

嵯峨住去來が曰、除夜より元朝かけて、鼠の事を「嫁か君」と云にや、本說はしらずとぞ。野坡か云、娘が君は春氣にてねずみの事なり。今按に、年の始には萬の事祝詞を述侍る物にしあれは猴起と云へる詞を忌憚ていねつむいねあぐるなど唱ふるたぐひ數多有。鼠も寢のひゞきはべれは、嫁か君とよぶにてやあらん。又春氣といふ時は春三月のことなれはいかゞ有べきか。尙說有。こゝに略す

鼯鼠　うごろもち　○京にて。うごろもち、東武にて。むぐ

らもち。西國にて。もぐら、中國にて。むぐろもち、四國にて。をごらもち、遠江にて。いぐらもち、大和及伊賀伊勢にて。をごろもち、越後にて。土龍といふ

蝙蝠　かふもり（いにしへに、かはほりといひしなり）○畿内にて。蚊くひ鳥とも云。近江にて。蚊鳥とよぶ【新撰六帖】に衣笠内大臣

〻日くるれは軒に飛かふかはほりの扇の風もすゞしかりけり

又、【枕草子】に過にしかたこひしきもの、こぞのかはほりと書るは扇の事なり

蠻鼠　むさゝび ○畿内にて。野衾といふ。東國にて。もゝぐはと呼ふ。西國にて。そばをしきといふ。薩摩にて。もまといふ

もまとは【和名】もみの轉したるなるへし。古歌に大和國春日山高圓、津國三國山などよみあはせたり。東國にては日光山にすめり。其鳴聲人の呼がことし。常に梢に穴居して夜高きより飛んで人の面をおほふ。ひきゝより高きに上ることあたはず

〻春日山夜ふかき杉のこずえよりあまた落くるむさゝひのこゑ

川童　がはたらう ○畿内及九州にて。がはたらう又川のとの又川童とよぶ（九州に多し、わきて筑後の柳川尤多し）

周防及石見又四國にて。えんこうといふ

土佐國の土民は。ぐはたらう又かだらう又えんこうともいふ。其手の肱よく左右に通りぬけて滑なり。猿猴に似たるが故に、河太郎もえんこうといふ

東國に。かつぱと云（川わつぱのちゞみたる語也。小兒をしかるにもかつぱともいふ）。越中に。てがはらと云。伊勢の白子にて。かはら小僧といふ

其かたち、四五歳ばかりのわらはのごとく、かしらの毛赤うして頂に凹なるさら有。水をたくはふる時は力はなはだつよし。性相撲を好み、人をして水中に引入んとす。或は恠をなして婦女を姦婬す。其わさはひを避るには、猿を飼にしかずとなん。又九州にて川渉の人詠吟する歌に

〻いにしへのやくそくせしをわするなよ川だち男氏は菅原

右の歌を吟詠すれば菅をのがるゝよしいひつたふ

雎鳩　みさご ○播州にて。みさゝぎ、伊豆駿河邊にて。びさご、薩摩國にて。びしやごといふ

びさご、びしやご、ともに、みさごのあやまりなり

刀鴨　こがも ○越後にて。あじとと云。奥州にて。たかぶと云。關西關東にて。たかべといふ。則和名なり

鵁鶄　かいつぶり（是和歌に詠する「にほとり」也。俗に「いよめ」といふ）○畿内及中國東武共に。かいつぶりといふ。上總にて。みほといふ。長崎にては。鳰といふ。土佐國にて。いちつぶり又いよめといふ。遠州にて。めうちんといふ。東國にて。むぐづ鳥、武の神奈川にて。でつてうむぐづてうといふ。上州。かはぐるまといふ。信州にて。めうないと云。駿河にて。ひやうたんごといふ。仙臺にて。かはきじといふ

白石翁云、「にほ」とは湖をいひぬれば(1)、「にほ」とは湖中にあるの義にやあるへし、又「かいつぶり」とは其水に浚する音をかたどりいひしと見えたり。又俳諧師支考がいはくにほの海とは鳰鳥のすむ程のさゞ波なれはにほの海と云。今按に「鳰」は「にほひ鳥」の意也。にほの海とは、うら〳〵と日の出るに海のにほへるなり。にほふとは香のことにあらず、艶色のこと也。光源君のことを、桐壺の卷に此御にほひにはといえり。又法橋昌長翁のいはく、研師刄を研上てそれに色を付るをにほひをつけるといふ。則鳰の脂を引となり。又にほふ霞なども日に映ずるをいふなり

(1) いひぬれは

鷗　かもめ ○中國に。うはみと稱す。肥前にて。ねこどり又大雁といふ（沖にすむ鷗は大なるもの也）。土佐國にて。かごめ共いふ。上總及武の品川にて。うみねこ本牧にて。濱ねことも呼ぶ。近江にて。苗代鳥又。ねこさぎといふ

鷗の鳴く聲猫のなくに似たり。故に異名とす。【萬葉集】に加萬目又鴨妻と書り。鴨妻とは鴨のことくにして小しきなるをいひしなるへし。一說に、沖にあるをかもめ、磯に集をいそちどり、河に詠合するを都鳥といふと、直龍翁の說なり。未詳

魚狗　かはせみ 一名少微○中國に。すどり、京都及東武にて。かはせみ、武州及下野にて。そな、奥州仙臺にて。すなむぐり、出羽國にて。るり、下總にて。じよな、甲斐にて。そびな、駿河國沼津邊にて。ゐびとり、加州にて。むぐり、美作及備前にて。しよに、伊勢及出雲肥州四國にて。しやうび（或はしやうびん共いふ）薩摩國にて。ひすいと稱す

(1)よふ

「かはせみ」といえるは深山そびと云物あるに對しての名なり。薩州に深山ひすいとよぶ。東國にて深山しやうびん共、或は所によりては水乞鳥と云。又清盛など〻異名す。其故は此鳥飢渴して水を好によりて名付と云。○關西にて雨乞鳥と稱するも此鳥なるへし【舊事紀・古事紀・日本紀】ともに翠鳥と有

鵲　かさ〻ぎ○西國に有。唐がらすと云。又。高麗鳥と云。五畿内及東國になし。鳩より小。羽に黑白有。天武帝、御時新羅より鵲一隻を献す

信天翁　らい　○九州にて。らいと云。土佐國にて。とうくらうと呼。丹後にて。あほう鳥と云。長門國にては。沖のたゆふと云（此鳥うす青く白し、嘴長く脚赤し、海邊にあり）加賀國白山に鵜と云鳥有、同名異物也

白山の松のこかけにかくろひてやすらにすめる鵜の鳥
哉

秧鷄　くゐな　○仙臺にて。なます鳥と呼（其鳴聲、戸をたゝくに似たり。因てたゝく水鷄と歌に詠す）

鶸　かやくどり○東國にて。ほとしぎと稱す。駿河にて。かんしん鳥と呼

(2)諸鈴

へをく霜にかれもはてなてかやくきのいかて尾花の末に
鳴らん

【月令】に三月田鼠化して爲鴽と有、是なり

蒿雀　あをしとゝ　○遠江にて。青ちゝんと云。東國及四國にて。あをじと云。美作にて。青じゝうと云（鶸に似て青色なるものなり）

「青しとゝ」を略語して「あをじ」と云。鶸は山林に在て原野にいでず。「青しとゝ」は藪林にすむものなり

蠶眉鳥　ほうじろ○遠州にて。赤ちゝんと云

其聲「ちゝり」といふ物を片鈴と名付、又ちりゝころゝゝりと云か如のものを諸鈴と云。此鳥巧に聲をなす、故に東國にては「一筆令啓上候」と鳴くと云。遠州にては「つんと五粒貳朱まけた」と鳴くと云。薩州にては「をらがとゝは、三八二十四」と囀と云。歐陽公が詩に百囀千聲隨レ意移ゝと有。異域同談なり

百舌鳥　つぐみ○五畿内の俗。つむぎと云。關東にて。てうまと呼。加賀にて。かごめと云。遠江にて。つぎめと云。仙臺にて。つぐと云

【本朝食鑑】鵯【釋名】馬鳥　鳥馬也。蟾蜍をつなぎ置て

(1)つくみ

此鳥を取。東國にて鳥馬をまはすと云。又諺に「けら腹たてば、(1)つぐみよろこぶ」といえるもかゝる事を云にや。京師にて除夜毎に是を炙食を祝例とす

繡眼兒　めじろ○薩摩にて。花吸と云。上總にて。をかまの鳥と云

布穀鳥　つゝどり（いにしへふゝどり）○伊豆駿河邊にて。すみだ鳥と云（土人のいはく此鳥鳴頃田の水澄とぞ）

蚊母鳥　かつこうとり（俗かんこ鳥共いふ）○甲州にて。豆うへどりと云。東國にて。豆まき鳥ともいふ。

【大和本艸】にいはく、俗にかんこ鳥を杜鵑の雌也と云。もの遠からず【本朝食鑑】に云、ほとゝぎす樹に上って鳴く時、其かたはらの樹邊に必聲なきほとゝぎす有、是則むしくひ鳥也。故に世俗ほとゝきすの雌也とす。

今按に、此説による時は、ほとゝきすの雌は虫喰鳥成へし。かつこ鳥、をそらくは杜鵑の雌にてはあるへからす。杜鵑は鶯の巣をかりて子を生し、かつこ鳥は頰白鳥の巣に子をなすものなり

杜鵑　ほとゝぎす○伊豫國松山邊にて。こつて鳥と稱す。是子規一名を杏代鳥といふ。「くつて」「こつて」轉したる詞なるべし

燕　つばめ○但馬國にて。ひいごと云。播州にて。ひごと呼

【和名】に【爾雅集記】を引て「つばくらめ」と註せり。今俗に「つばめ」といひ、又「つばくら」と云は、後人其語をはぶきて呼也。片田舍の人は「つば」とばかりも呼。又歌には「つばくらめ」とも「つばめ」とも詠す。「つばくら」とは詠格なし。俳諧には「つばくら」共作例有。又「つばくらめ」とは、土くらひの和訓也と篤信翁の説なり。又胡燕、越燕、漢燕等有。胡燕は「やまつばめ」と云。越燕よりは稍大にして山上岩穴にすむ。巣は横に長く脇の方より出入す。越燕は巣の上より出入す。但馬國村岡にて「妙見ひいご」と云は胡燕なるべし

斑鳩　つちくれぱと（古俗の稱也）○東國にて。きじばとゝ稱す。西國にて與惣次ばとゝ呼（關西にて、としよりこひと鳴くといへり。東國にて、てゝつぽう〳〵、かゝぽう〳〵と鳴くといふ）

木啄鳥　てらつゝき（又けらつゝきといふ）○江戸にて。きつゝきと稱す。又東國にて。をけらと呼。下總にて。番匠

鳥と云

鵰　ふくろふ○常陸國にて。ねこ鳥と稱す（この鳥よく鼠を取によりてかくなづくるにや）上總にて。よごうと呼。伊勢白子にて。鳥追といふ

【擧白集】に「のりすりおけ」と鳴く、をのれが毛衣の料にやと有。又俗に「夜明なば巣つくらう」と鳴とも、又片田舍の人は「五郎七ほうこう」と鳴く共、薩摩國の人は「此月とつくわう」となくといへり

鷦鷯　みそさゞい（上古さゞき）○奥州にて。みそぬすみ、仙臺にて。みそくゞり、下野にて。みそつぐと呼。西國にては。みそつ鳥と云

或說に、此鳥溝の邊に三歲棲て長す。故にみぞさんざいと名付るを、みそさゞいといふとぞ。　今按に、「みそ」は「溝」なり「さゞい」はいにしへ「さゞき」といひし名の轉したる也。「さゞ」とはさゝやかなる意、小き事也。三歲といへる義にはあらざるべし。又鵰と云鳥にはもろ〳〵の小鳥怖れて飛去る。鵰も鷹の屬也といふ。それが中にみそさゞいは曾て怖れず。却て蜘蛛其外の虫を捕て鵰にあたふ。其時悅ふ躰にて食ふ。予正サに是を見ル

(1) 葭割雀

鶺鴒　せきれい（和名にはくなぶり、日本紀私記とつぎおしへどり）○播磨にて。かはらすゞめと云。西國及四國又は奥州にては。いしたゝきと呼。伊勢白子にて。はますゞめと云。遠江及上總常陸にて。麥まき鳥と云。東國にて。せきれいと云。薩摩にては青黃色なるものを。いしたゝきと云。黑白なるものを。せきれいと云（舊說には、にはたゝきとも、いしたゝきとも、いなおふせ鳥とも見えたり）

刮蘆鳥　よしはらすゞめ　○畿內及勢州邊。よしはら雀と云。

「よしはら雀」といふは(1)葭割雀なり。葭をわりて其中の虫を喰ふ、故に此名有、と石川丈山子の說なり

出雲及西國四國にては。ぎよう〳〵しと呼（土佐の國にては。むぎからし、又をけらなどゝもよぶ也）加賀にて。よし鳥と云。播州にて。けゝしと云。仙臺にて。から〳〵しと云。東國にて。よしきりといふ

「あし」を「よし」といへるは、物忌するものゝ云るなるべし、と徂徠翁の說なり。此「よしはら雀」の難波のよしあしも分たず、鳴聲のかまびすしきはいかにそや。

へよしきりの浮世もよしやあしの上　吾山

(1) いせごい

鯉　こい○武藏國にて鯉魚の小なるを。ぶんしろと稱す是は文正といふをあやまりて呼也。或時予が僕の、鯉を庖丁せんとて筒井のもとへもて行て井の中へ落しぬと、いひはべりければ、狂歌よみける

へつゝいづゝ井筒にこひを落しけりむかし男も今の男も　吾山

鰤　たなご○關西にて。たなごと云。關東にて。にがぶなと呼。つくしにて。しぶなと云（たなごは鮒の類也。又海に鱮魚有、同名異物なり）

鰯　なよし（此魚の惣名也。世にほらと云。日本紀に云口女これなり）○極小なる物を江都にて。をぼこと云（東國に小兒をおぼこと云。故に此魚の小なる物を云）加賀にて。ちよぼと云。土佐にて。いきなごと云（土州にてはいきなごを塩辛とす、銀びしことよぶ）小なるものを、關西關東ともに「いな」と呼（いなは稻の莖くされて魚と成といへり。然る時は「いな」とは稻魚なるへし。いにしへは魚を魚と稱せしなり）。洲走、遠州にて。はしりと唱ふ

漁人簀の四方に網を張て是をとるを簀引と云。因て簀走の名有。一說に、此魚河と海との潮境を往來する頃を賞して洲走の名有とぞ。江戸にては六月十五日より洲走と呼。十四日迄を「いな」と云也。九月にいたり泥味なく、脂多くして、いよ〳〵味ひ美也。色又さらし洗ふたるが如し。此時を畿內にて。こさらし江鮒と稱す。泉州堺の名產なり

。なよし。ほら。伊勢ごい、長崎に。まくちと云。勢州及尾張にて。めうぎちと云

「いせごい」とは勢州鳥羽の海濱にて多く是をとり、又鯉に類するをもつて「いせ鯉」と云、關西の稱なり。東國には「ほら」とのみ呼也。又「まくち」とは上古「くちめ」といひし詞の遺りたる也。「めうぎち」とは名吉の音義を用たる也

棘鑑魚　たひ○豐前にて。へいけと稱す。蟠龍子ノ曰、鯛をへいけと云は平魚なるべし。【延喜式】に平ー魚。

今按に、東武にて辨慶鯛といふ物を、肥前唐津などにては「へいけ」と呼、又土佐の海にへうだひと云。其子をへうごと云有。是も平ー魚の轉語なるべし

。櫻鯛（堺ー鑑に櫻ー鯛、泉州堺の名產なるよし見えたり。東ー武にても櫻の花盛の頃此名有）。麥藁鯛、中國四國ともに四

月出る鯛を云。前の魚、津の國にて稱す（攝州西宮社前の海上にとる物を前の魚と呼。東武にて江戸前うなぎと云が如し）。甘鯛、畿内西國東武共に「あまだひ」と呼。出雲にて。こびるといふ。關東にて。奥津鯛と呼（駿州奥津にて多く是をとる。鱗に富士のかたち有と云つたふ）

鳥類魚　くろだひ○東武にて。くろだひと云、畿内及中國九州四國ともに。ちぬだひと呼。　此魚、泉州茅渟浦より多く出るゆへ「ちぬ」と號す。但し「ちぬ」と「彪魚」と大に同して小く別也。然とも今混して名を呼。又小成物を。かいずと稱す。泉州貝津邊にて是をとる、因て名とす。江戸にては芝浦に多くあり

比目魚　かれい、ひらめ○畿内西國ともに。かれいと稱す。江戸にては大なる物を。ひらめ、小なるものを。かれいと呼。然とも類同くして種異也。常陸上總下總の浦々にて大なるを鰈といひ、小なるを平目といふ。江府の魚市に至る時は則ち名を變ず。又ある漁子此魚兩種相偶して洋中を游ぐ、頭をならぶる時は左右の違ひ有物なりといへり。貝原翁はかれいといふばかたわれ魚の略なりといえり

笠子魚　かさご○奥州にて。こがらと云（かさご藻うをのたぐひなり）

伊佐木　いさき○奥州にて。奥鰭といふ

鮎魚女　あいなめ○奥州にて。ねうをといひ又しんじよと云。同國南部にては。あぶらめと云。佐渡にて。しどうと云。駿州にて。べろと云

【本朝食鑑】に形ち粗鮎に似たり。故に名づく。「め」と稱してもあゆの類にはあらず。又【日本紀】【萬葉】等に魚を、なと訓ず。今按に、尾張國又遠州邊の所在にて川魚を水魚と云。又江戸に云納屋も魚屋也。肴と云も酒魚なり。また薩摩國にては魚肆を「なや町」と云も是なり。奥州の方言に「ねうを」と云「しんじよ」といふは、「あいなめ」といふを愛す女と云意にて「寢うを」といひ、又「寢所」と云なるべし。又「べろ」といえるは東國片鄙の小兒舌のことをいふ也。四國にても舌を「べろ」と呼もの稀に有也。されば「あいなめ」と云を「なめる」[1]といえるこゝろにて、駿州には「べろ」と名つくる歟。「なめる」[2]とは關東にて云、畿内にて「ねぶる」と云におなじ

保宇保宇　ほうゝ○佐渡にて。きみうをと云。薩摩にて。ほこの魚と云

(1)(2)なめる

方頭魚　かながしら○參河にて。かなごと云。越後糸魚川にて。いぢみと呼。常陸下總にて。ぎすと云（其かしら角ありてかたし、故にかなかしらといふ）

石總魚　おいかは○筑紫にて。あさぢといひ又あかばゑ又山ぶちばゑなど呼。京都にて。をいかは、攝津にて。あかもとゝ云

京師の俗大堰川を略して「おゐかは」と云又赤もとゝ云は赤斑の略なり。又北國にて「おいかは」と呼魚有。同名異物也

鰌　いさゞ○北國にて。かねたゝきと云。京師にて。だんぎばうといふ。京にて目高・いさゞ共に「だんぎ坊」と云。目高の條下にくはし。又俗に「ちりめんざこ」といふは、此魚の乾たる物也。又駿河にて「かねたゝき」と云は別物也

鰊條魚　どろめ○大坂にて。どろめと云。筑紫にて。しろうをと呼。土佐國にて。どろめざこといふ。　此魚三月海より川水に上るを簗にて是を捕、長三寸、江戸に云白魚より小也。其潔白なる白魚に相同し。氷魚と呼も又是に似たり。近江の湖水、宇治の田上などに産する物也

越後にては小なる物を。こつぺらと呼（こびらめと云の誤にや）佐渡にて大なる物を。さかむかひと云。江戸にて云霜月びらめを、越後の糸魚川にて。あさばとなづく。江戸に云。ほしびらめを、駿河にて。まつかはびらめといふ。一種。このはがれいと云有（至て小なるものなり）泉州にて。岡田がれいと云

鞋底魚　うしのした　一名くつぞこ　關西及東國の海邊にて。うしのしたと稱す。江戸にて。舌びらめと呼。備前には。くちけと云。越前にて。ばゞがれいと云

幾須古　きすご○關西に。きすご、江戸にて。きすと云。伊勢の白子にて。あめの魚と云（雨ふる日多くとる魚也。故に名とす。然とも別也）紀州にて。だうほうと云

阿古　あこ○加賀國にて。はちめと稱す。　此魚播摩攝津國などに稀に有。冬月藻魚の大なる物を、あこと呼て賞翫す。【和漢三才圖會】に見えたり。又あこは赤魚也と云

藻魚　もうを○西國にて。いそめばると云

目張　めばる○陸奥仙臺にて。そいと云又すいともいふ

藝州にてめばるの兒を呼て「なるこ」と云。一種沖めばると云有。其色黑味ひ厚し。病人食ふことなかれとなり

丁斑魚　めだか○東武にてめだか、京にてめゝさこ又。うきんじよ又。だんぎばう、大和にてこめんじやこ、南都にてはめたゝき、大坂東南にてうきた、大坂西北にてこまいじやこ、和泉にてめたばり、同國堺及近江因幡越前にてめゝじやこ、伊勢にてめばや又ねばい、同國白子および美濃にてこばい、尾張にてうきす、遠江にてねんはち又めんばい、相模三浦邊にてびつこ、出雲にてめんばち、同國及越後にてうるめ、伊豫にてうきいを、土佐にてあぶらこ、肥前にてたうを、越中にてかねさ又こめざこ、陸奥にてはりみず、同國南部にてめざこ又めぬけ、出羽最上にてじよんばらこと云。(1)

按るに、京都にて目高の異名を「だんぎ坊」とよぶは凡僧の經論も見ずに唄すを、水に放すと云秀句にて、談義坊といふとぞ。又江戸半大夫節の淨瑠理に、くらき御目のかなしさは、月日のかけも水鳥の（下略す）此文句にも「見ず」を「水」に云かけたり。みずの假名は「す」の字也。水はみづにて「つ」の字也。かな違ひ也。然ともくるしからさるか。守武大人の句に

へちる花を南無阿彌陀佛とゆふ邊かな。守武は伊勢内宮の神官荒木田氏、連歌を好て【新撰筑波集】にもゝし作者也。かつ俳諧の鼻祖なり。右の句は「いふ」を「ゆふ」とせられし也。作例有こと成べし。又此吟を辭世なりと後人おもふはあやまり也。天文十八年八月八日七十七歳にて卒す。辭世

へこしかたもまたゆく末も神路山みねの松風〈

(1) あふらこ

(2) なでふか

(3) まくろ

鮫魚　さめ○播州にてのそといふ。越前にて○つの字と云。その故は、此魚捕て磯へ上れば假名の「つ」の字の形に似たりとて、越前の方言につの字となづくと也。大和にてはふかと云。さめと鱶魚とは大に同しくしてすこしく異也。ふかの類多し。或は白ぶか、うばぶか、かせぶか、鰐ぶか、もだま、ささいわり等有。皆さめの類なり。四國及九州に「さめ」の稱なし。すべて「ふか」と呼。又江戸にて一種。ほうさめと云有。下野國宇都宮邊にては○さがほうとよぶもの也。江戸にて云。ほしさめを、西海にて○のうそうと云。江戸にて。しゆもくさめと云を、西國にて。念佛坊といふ。是土佐の國にて云。かせぶかなり。又土州にて一種。なでぶか(2)といふ有、船端に人立時は、必尾をもてなて落すと也

王鮪　しび○畿内にて。はつと稱す。江戸にて。まぐろとよぶ。江戸にてまぐろのすきみといふものを、畿内にて「はつのみ」と云。又江都の魚店にて。しび。まぐろ。びんなが等の品有といへとも、東國の俗皆「まぐろ」と云、然共至て大なるなし。むかしは江都の魚市にて「まぐろ」を賣買ふこと有しが、近年は來らすとなん。又「びんなが」といへる物はあぶらを去て肉糕となすもの也。又二尺以下の小なるを江戸にてめじかと云。一名。そうだと云。ひらそうだ。丸そうだなと二種有。京都難波の俗。目ぐろといふ。是なり。又二尺已下のものは相模にてよかごといふ。一尺余なるは同國にてめだいしびと云。【本艸】鼻肉作鋪名鹿頭又名鹿肉と有。是目鹿となづくる故有に似たり。一説に目ぢかとは其眼の近きなり。まぐろと云ものゝ小しきなるをいふ。まぐろとはその眼の黑き也。又歌に鮪と詠り。山邊赤人が藤井の浦にしび釣と詠ぜしたぐひ也

(3) まくろ

鰹　ぶり○この魚の小なる物を、江戸にて。わかかなごと云。五畿内及西國四國にて。わかかなと云。又。つばすと云。一尺程なるを、西國にて。目白と云。一尺餘二尺にも至るを、江戸にて。いなだと云。北陸道及奥州にて。ふくらぎといふ。關西にて。はまちと云。漸大になりたるを、江戸にて。わらさとよぶ。是を北陸道にて。らぎといふ。霜月の頃、三四尺五六尺となる。是則「ふり」なり。薩摩にて。そうしと(1)いふ。筑前及上總にて。大うをといふ

鰯魚　かつを○一種。すぢがつをといふ有、皮の上に縱に白き(2)縷三四條有、是を加賀にて。たてまんたらと云。又關西にて。うづわと。小なる物有。又。よごわとよふ有。今按に。うづわ、一名茶袋、又しぶわといふもの有。是等を江戸にて「小(3)がつを」と呼て賞也、然共別類也。よこわと云は「めじか」と云魚の子也

河鰯　ふぐ○京江戸ともに。ふぐとよぶ。西國及び四國にて。ふくとうと云。又江戸にて異名をてつぽうと云。其故はあたると急死すと云意也。又。しぼさいと云有。小しきなる物なり。肥前の唐津にて。ちんぶくとうと云是也。又まふぐといふ魚は、冬の内賞翫すとらふぐと云は春夏ともに喰ふ也

(2) 縷ノ振假名「いと」すぢ一ノ四字無シ

(3) 小かつを

鰯　いはし○をむら女詞也。をほそ同斷。あかいわしといふ物は鹽につけたるを云。肥前の長崎にて。からがきと云。中國にて。やすらと云。紫式部いはしを賞して

へひのもとにはやらせたまふいはしみづ參らね人はあらしとそ思ふ

【玉葉集】に住吉明神の御歌に

〻いよの國うわのこほりの魚までも我こそはなせ世をすくふとて

鰓　ひしこいはしの屬也○相模及西國にて。かたくちいわしと云。又片口と斗もいふ。駿河にて。くだいわしと云。上總にて。小いわし、下總及常陸にて。せぐろとよぶ。今按に、上總の國にて小いはしと稱すといへども、子の字の義にはあらず。又鰯の小きをも「小いはし」といふ。秋をもて氣とす。是にまがふなり。ひしこを云は、小きいはしの如しと云意なるべし。又西國の產物に「銀びしこ」と云有。是はこゝに云鰓にはあらず。鰶といへる魚の子を鹽漬になしたる物也。又鰯の小しき物を製したるをもいふ也。なを蟹の條下を合せて見るべし。又。ごまめと云物有。是はいはしにてはなし。ひしこの干たる物也。相模及越後、奥の津輕にて。干鰯と云。仙臺にて。ひいごと云。加賀にて。かいぶしと云。九州にて。すほし、又。片口とも云。伊賀及伊勢、出雲又奥州の内にて。田つくりと呼。(2) 按に、ごまめとは常の稱號也。春の始に小殿原又田作、なと唱へて祝し侍る。是稻粱を植る物、干鰯、干鰓をもつてす。故に田つくりの名有。又すほしと云るは、簀の上に干を云也

(1) 子の義にはあらず

(2) と呼、△按に

(3) さつば

青魚　かど一名にしん○つくしにて。高麗いわしといひ又。せがい共云。阿部氏の云、此魚あつまる時は沫を吹て水面に浮ぶ。雪の降たるが如し。網をもつて是をとる。腹に子有て滿り。子て數の子と云。和俗鰊の字を用ゝ。東海に出るをもつてなるべし。今按に、津輕にてなまにしと云は干たる魚をにしんといへば生のにしんと云意なるべし。又江戸にて「かどいわし」と云て鰯の中に交りてあるちの也。松前の旅客に問ひ侍しに少しかはる樣におほへぬると答侍りし

鱗魚　このしろ○此魚の小なる物を京都にて。まぶかりと云。中國及九州共に。つなしと云。薩摩にては。ながさきと云。此魚長崎に多し。故になづく。筑前にて。はだらごと云。又土佐の海に。はらかたと云魚有。是は「すぢごのしろ」といふもの也。今按に、鯛童と云魚は、江戸芝浦、品川沖、上總下總の浦々より是を出す。西海にはこれなし。鰶の子にあらず。別種也。駿河にてつなしと呼は小鰭也、此國にて「こはだ」と云物は江戸にて。さつばと云魚なり。このしろ・こはだ・さつばは是皆種類也。或人の云、世間に子生れて死し、又生れては死す事有。其家にては子生るゝ時胞衣と鰶

とを一所に地中に藏れば其子成長す。尤其子一生このしろを食せざらしむ。このしろは子の代なりといひつたへたり。古歌に

〻東路のむろの八嶋にたつ煙誰かこのしろにつなしやくらん

此歌につきては古き物かたり有、普く人の知れる事なれは爰に贅せず

鰻鱺　うなぎ○山城國宇治にて。うぢまろと云。此魚の小なる物を京にて。めゝぞうなぎと云。是はみゝずうなぎの誤也。江戸にて。めそと云。上總にて。かようと云又くわんよゞことも云。常陸にて。がよこと云。信濃にて。すべらと云。土佐にて。はりうなぎと云。今按に、京都にてうなぎを鮓となすは宇治川のうなぎをすぐれたりとす。よつて宇治厩呂と人の名を以てす。江戸にては淺草川深川邊の產を江戸前とよびて賞す。他所より出すを「旅うなぎ」と云。又世俗に、丑寅の年の生れの人は一代の守本尊虛空藏菩薩にて、牛涯うなぎを食ふ事を禁ずと云。祖來翁【なるべし】に、鳩を八幡の使者、猿を山王の使者と云るも、はちまんの「は」、さんわうの「さ」をとりていへるなるべし。鹿を春日といふも、「か」もじなるべしといへり。此書に倣て考るに、丑寅の年の人うなぎくふ事をいむは、いにしへうなぎをは「むなぎ」といひし也。虛空藏の虛の字「むなし」と訓ずれば「むなぎ」をいみしなるべし。「む」は「う」にかよふ也。いにしへ「梅」は「うめ」「馬」は「うま」の假名にて有しが、後に「むめ・むま」と書もおなじことはりなり【萬葉】に吉田連石麻呂と云人のかたち甚やせたるを笑ひて作たる歌　大伴家持

〻いしまろに何ものまうす夏やせによしといふ物ぞむなぎとりめせ

【拾穗抄】に「むなぎ」は「うなぎ」なりと有。又烏を熊野の神使なりと云。熊野は三山なり。烏に深山烏と云有。山にすみて村里にうつらず。されは三山と深山おなじ音なるゆへ、神使なりといひならはしたる物か。識者のいはく、尾州一宮にて鷄卵を食せず。神代卷發端には丶かるとぞ。同津島にては烏を食せず。そさのおの「烏」の字「鳥」に書たる本を見しより也。熱田には筍を食せず。やまとだけにてまします故となん。手を打て笑ふべきにもたへず。さいはゞ天下の神人すべて紙は穢たることにつかふまじきやとあり。是等の說爰にあづからずといへども、筆のゝゐでに記て童蒙

に知らしむ

海鰻　うみうなぎ○畿内にて。海うなぎと云。西國或は伊豆／熱海にて。うみぐちなはと云。播州西宮海邊にて。へんびと云。此魚海邊の穴の中にあり。漁人多く釣こと有。毒ありと云傳て濱に捨つ。蛇に似て黄色に黑文有

黄顙魚　ぎゞ○備前にて。ぎゞ、東國にて。ぎゞう、北國にて。あいかけ、加賀にて。さす、奥州及越後にて。はちうを、越前にて。あかにこ、出羽にて。がばち、上總にて。川ばち、伊勢にて。ども、土佐にて。ぐゞといふ。此魚背の上に刺有て人を螫す。ごき〳〵と鳴く。人これを捕ふ時ははなはだかなしむ聲を出す。今按に、享保十三年戊申、秋、東國所々洪水せしころより此魚うせたり。しかふして後鯰と云魚東國に生ず。うたがふらくはぎゞ鯰に變したる物歟

鰻魚　なまづ○安房國吉濱村わたりにて。なまだといひ、又。にぜんぎやうと云。今按に、此郷に妙本寺と號する日連宗有。此宗派にては大乘法を受持して一切諸經は二瀬の經行なりと誹謗す。爰に淨土宗門の在家ありて鯰を「なまだ」と呼。「なまだ」とは「南無阿みだ」の名號の略語なれば、それに對して日蓮宗の里民は「(1)にぜんぎやう」と呼にてやあらん

(1)にぜんぎやう

杜父魚　かじか○京大坂にて。いしもち、加茂川にて。ごり、嵯峨にて。いまる、伏見にて。川をこぜ、近江にて。むこ、又どうまん又いしぶし又ちゝこ、九州にて。どんぼ、筑前にて。ねんまる、越前にて。かくふつ、出雲にて。ごす、伊賀にて。すなほり、相模及伊豆駿河上總下總陸奥其外國々にて。かじかと云。駿河沼津にては。かじいと云。今按に、此魚種類甚多し、其水土によりて形すこしかはり、大小の品有といへ共、一類別名也と云。江戸にて賞する鯊、これ又品類多し。まはぜ。三年物をいふ。道風の淨瑠理に、はぜ釣ばりに三年物、戀一、通、はこつちのゑて、とあるは「はぜ」におかしき異名あればふくみて書る文なり。又。だぼうはぜ、是は下品也又。しまはぜといふ有。是かじか也。又いし臥といへるは【源語玉鬘卷】に、ちかき川のいし臥などやうの遊逍し給ひて（下略）【河海】「ちかき川とは賀茂川也と有。又下賀茂紀森の茶店にて「ごり」を調和して「ごり汁」と名付て賞也。又加賀越前の土人は「ごり」を鮒となしてたしみ食ふ。これを蛇の鮒といふ。又木曾の谷川などにて諸木の倒たる有て、年を經枝くさりて石鮎に化すといへり。それを土人ごり木といふ。又かくふつといふ物は、北海にて雪花の降るとき腹を上になして水上に浮ぶ魚也【續猿養】詞書有て〈角鰐や腹をならべて降るあられ

鮴魚　かまづか【倭名抄】○京にて。かまづか、鴨川にては。かまきすご又かなくじりと云。其形はぜに似て又きすに似たり。大なる物をかじかと云

吹沙魚　かなびしや○京にて。かなびしや と云。四國にて。じんそくと云。肥前にて。じやうとくといふ。江戸にて。こちじやこと云。湖水及谷川の石の間に住小魚也。形色共に鰯に似て小さし。其大サ一二寸細なる黑點文有。其尾岐あらず

鰌　あぢ○紀州にて。とつかは、土佐にて。とつばこと云。小しきなる物を、西國にて。こびらこ、相州にて。ぢんだんご、加賀にて。さくざねと云。此魚播州室津にて多く捕る。故にむろあぢの名有

文鰧魚　とびうを○中國及九國(1)にて。あごといふ。婦人臨産の月是を帶れは産やすしと見えたり。今又乳のたるゝ藥なりとて婦女は珍重する也

和加佐幾　わかさぎ○駿河にて。すゞめの魚、伯耆にて。しらさぎ、常陸にて。さゝらうを、若狹にて。あまさぎと云。

(1)九國ノ「國」ノ振假名「しう」無シ

(2)鮠ノ振假名「はぜ」無シ

今按に、わかさぎ、又あまさぎ、同物也。若州三方の湖中に多くこれを獵す。又常州櫻川に櫻魚と云有。是江戸にていふ「わかさぎ」也。又俳諧季立の中春の部に「櫻魚」と云有。これは櫻の花盛のころ出る魚を云。なをさくら鯛、柳鮠(2)なと賞するか如し

鰐　しいら○筑紫にて。猫づら、薩摩にて。くまびき、肥前の唐津にて。かなやま又。ひいをと云。土佐にて。とうやくと云。乾て賞翫する時は土州にても、くまびきといふ。江戸にても猫づら又ひいをと云。今按に、この魚海船のかたはらを泳ぐ。船人急に釣針をなけて、忽三ツ四ツ釣事有。俗に九萬疋と書も、是此魚の數多なるをいふなるべし

伊多　いだ○畿内及西國にて。いだ、讃岐にて。かうら、東國にて。さい又まるたと云。此魚上州利根川に多し。一說に「さい」とは犀の泳ぎて走るが如きにたとふ。丸太とは山中より材を山川にうかべ流に任せて下るにたとへたり。今按に「さい」とは「材」なるべし。丸太といへるもおなし心也。其魚の圓なるによるの名なり

鰰　うぐる○信州諏訪の湖水にて。あかうをといふ。相州箱根にて。あかはらといふ。小なる物を「やまめ」といふ

毛呂古　もろこ　一名しまうを○近江及西國にて。あぶらめといふ。土佐にて。もろこ共又。ちつごともいふ。近江坂本に「もろこ川」といふ川有。此魚多し。故に「もろこ」と稱す。一說に粟津に木曾義仲ノ社有。かの靈を祭るの日、社の邊の小川にて土人もろこ魚をとる。必數十斛を獲とあり

石首魚　いしもち○京江戸ともに。いしもちといふ。西國及四國にて。ぐちと云。駿河にて。しろぐちといふ。此魚かしらの中に石有。よつて名とす。又江戸にて「にべいちもち」と云有。別種なり。是にべといふ魚の小なるもの也

鰈鯖　にべ○此魚の小なる物を土佐にて。しらぶと云。大なる物を四國にて。ぬべといふ。又。そぢ共いふ。備前にて。そこにべと云。「にべ」とは魚の腹中に鰾膠あるゆへに名とす

齋魚　ひゞ○常州水戸にて。ふぢかけと云。佐渡にて。嶋まはりといふ

紅鯛魚　たかべ○讃岐にて。あじろといふ。能登にて。とこやといふ

鮠　はゑ○東國にて。はやと云。はゑは蠅を好て食ふ。故になづく。但蠅は關西にて「はへ」關東にて「はい」といふ

太刀魚　たちうを○筑前にて。ながだちと云

惠會　ゑそ○伊勢の白子にて。たいこのぶちと云。土佐國の土人。をばあといふ。漁人のいはく「ゑそ」は蛇の化したるもの也と。又九州にて「をかまがへる」の化したる物也ともいへり。畿内にて五月の頃「水ゑそ」とよびて賞ス。或人ゑそうなぎの二品酢と合して食すれは人を害すといふ。今按に、土佐の國の俗この魚を「おばあ」といふ。是は蛇の姨といふこゝろなるへし

沙嘆　なまこ○大坂にて。とらごといふ。筑紫にて正月は。たはらごと云。唐津にては正月十五日まへは。はつだはらと云。それ過て正月の中は。たはらと云。【廣大和本艸】に、沙嘆、和名タハラゴ、今京都の魚舗に「きんこ」といふ物なりと見へたり。今按に、正月朔旦海鼠を「たはらご」と賞して祝す。是米穀の義によりて也。「ごまめ」を「田つくり」と稱するも意同し

海鵜魚　えい○上方にて。えぎれと云。江戸にて。あかえいと云。今按に、京にて。えぎれといへるは、江戸にて赤えいのたちうりといふに同し。えいに種類有。武之品川・芝浦にて。まえい。よこさえい。がんぎえいなどいふ。「まえい」は上品なり。又「よこさえい」は菱形にして色白し、故に「まえい」の血をぬりて裁賣となす。「がんぎえい」は下品也。其形丸く、悪臭有。また眞鰈の子いまだ腹に在時は刺を中につゝみて、たとはゞ卷葉の如くにて有、又「よこさえい」の子はあみがさの如く、二ッ折になりて刺を中に隱す物なり

海鰕　ゑび○關西にて。いせゑび、關東にて。かまくらゑびと云。又年の始に、かざり海老とする物は、關東にても「いせゑび」也。西國にては其海の產なれ共「いせゑび」と呼。又江戸にて小なる物を「芝ゑび」といふ。大坂にて。備前ゑびといふ

澪鰯　うみじが　和名○筑紫にて。うじこ、伊豆大嶋にて。海楊枝と云

水龜　いしがめ○西國にて。こうづといふ

鼈　すほん　これかはかめ也。俗胴體と云○畿内にて。どんがめ又すつぽんとも云。東近江にて。どろそ、周防にて。まがめ、伊勢にて。どち、肥州にて。とち、加賀及能登越中越後にて。がめと云。四國にて。こがめ、江戸にて。すつぽんと云。すべて東國「すつぽん」と云、又「かつは」と云所もまゝ有

蝦魁　がさめ○畿内にて。がさみといふを、江戸にて。をゝがに又海かにと云。又西國にて「かさみ」と云は甲菱形にして甲のまはりのこぎりばに似たり。一種蟛蜞あり。江戸にて。こめつきがにと云。西國及四國にて。田うちがにと云。古歌に「いなつきがに」とよめるは是なり。一種豆蟹又蜘蛛蟹と俗に云。備前小嶋にて。いぞ〳〵といふ。今按に、豆蟹小にして形丸し。又其かたち蜘に似たり。蛤好ゞで是を喰ふ。又蟹の小なるを「蜘がに」と呼。蜘の小なるを「さゝがに」と呼こそをかしけれ。參州にて。岩蟹と云。鹽辛とす。名產也。又畿内にて「かにびしこ」と云あり。攝州福島邊より出す蟹の鹽辛也。「かにびしこ」と云は、蟹の鰓潰と云へきを略して「かにひしこ」と呼といへり。又「ひしこ」といへるは醢の誤なりと有。さもあらんか。又薩州指宿の濱に藻蟹とて小き蟹を產す。寸許にして圓也。惣身紅色、此蟹鹽辛に製して其色を變ぜず。甲及八足やはらかにして氣味香く宜に上品なる物也。又云藻蟹は、藻或はひじきなどに住物也

甲蟹　かぶとかに○筑紫にて。うんきうと云。薩摩にて。ばくちかにといふ。安房にて。いそほうづき共云。九州の海に有。其甲かぶとに似たり。汐干の頃多し。又大汐にた

(1) はつたは
(2) なといふ
(3) 鯵蝦
(4) 鰓
(5) 指宿
(6) 變せず
(7) 香く
(5) 藻蟹ノ「藻」ノ振假名「も」ノ字無シ
(1) どんかめ
(2) 蟛蜞
(3) 蜘かに
(4) 醢
(5) 藻蟹
(6) 變ぜず
(7) 香く

(1) 磯
(2) 海ほふっき
(3) 生つけノ「生」ノ振假名「うみ」ノ二字無シ
(4) 長田　秦
(5) だいらき

どよひて(1)磯に寄を、兒童とらへて繩をつけ、たはふれ、翫と。す。又「海ほふづき(2)」は「うんきう」の卵也と云。岩或は流木なとに卵を生つけ置(3)を取りて「うみほうつき」とよびて、小女口にふくみ鳴らす物也。其色黄なるを、梅酢をもて是を染、赤色となす也。江戸へは安房國より出ス

鬼蟹　をにがに○攝津にて。嶋むらがにといふ。兵庫及播州にて。武文かにと云。讃州にて。平家蟹と云。加賀越前にて。長田(4)かにと云。これ元弘の亂に秦(4)の武文、攝州兵庫の海に死す。享祿四年細川高國と三好と攝州に戰ふ。細川の家臣島村何某敵二人を挾んで尼崎浦に沒す。故にこれ等の說を後人附會する所也といふ

榮螺　さゞえ○相州三浦三崎邊にて。つほつかいと云。さゞえのふたを同所にて。とうもいちと云。是は童部の戲翫に、穴一といへる事をすなり。浦里にてあれは錢のかはりに用るもの歟。なを先に出す

鰒魚　あはび○上總にて。かい。つけと云。是は鮑の蓋なくして、身は貝につきて有物なれは、貝つけといふか。貝つきなるへし。江戸にて一名。なまがい共云。又あがりたる鮑をば。すいけんと云。泉州境にて此貝の殼を。あま貝と云。これは海士のとる貝なれは、海士貝と云か。又鮑の小なる物を「とこぶし」と云。土佐にて「ながれこ」と云。今按に、「とこふし」は鮑の子にはあらず、種類也。又鮑のわたを西國にて「角」と云。又あわひの貝の片おもひと歌に詠せしは【萬葉集】に

へいせのあまのあさなゆふなにかつくてふあはひの貝のかたもひにして

蛤蜊　はまぐり○上總にて。ぜんなと云。同國にて蛤の大なる物を「小だま」と云、小なるを「大玉」と云（是は雄鷹を「せう」といひ、雌鷹をだいといふ詞に似たり。意は別也）

淺利貝　あさり貝○勢州にて。きしめ貝と云

朗光　さるほ○勢州にて。つめきり貝と云。筑紫にて。馬の爪貝といふ。土佐にて。たぶかい又ちがい共云

蜆　しゞみ○畿内にて。ぜゞかいと云。古歌には堅田の蜆を詠す。今は堅田には稀にして勢田に多し。せたは瞻所に近き故「ぜゞ貝」といふと也

鹽吹貝　しほふきかい○伊勢にて。とんび貝と云。總州にて。つぶと云

多伊良木　たいらぎ(5)○大坂にて。ゑほし貝と云

田螺　たにし○畿内及西國東武其外國々にて。たにしと云。土佐國にては一名田貝と云。北國及房總又駿河相摸伊勢路にて。田づほといふ。又「つぶ」と斗も云【和名】に【拾遺本艸】を引て。田つびと書り

寄居蟲　がうな一名やどかり○伊豆及駿河にて。いそものと云。上總にて。がなづうといふ。肥前にて。ほうさい蟹といふ【和名】かみな

蟶　まて○大坂にて。かみそり貝と云。上總これにをなし

細螺　きさご○中國にて。いしやらがいといふ。伊勢にて。ごながらと云。肥の唐津にて。こぶらといふ

石蜐　かめのて○つくしにて。しると云。武之品川邊にて。ひとでと云。上總にて「たこのゑんざ」と云（しるとは其形椎の實の上皮のゑみたるに似たる故名づく）

海馬　かいば○佐渡にて。たつのをろしごと呼。薩州にて。龍の駒と云。畿内にて。うみむまとよぶ。是婦人安產の守とす

和尙魚　をしやううを○西海にて。海坊子と云。下總銚子浦にて。正覺坊といふ。漁人の云、むかし僧有。此江に溺死す。其幽魂こゝに止りてたま〳〵顯容泥龜のごとくにて、四ッの手足指わからず。頭は猫の如し。これを捕得る時は漁人あはれみて酒を飲せて命をたすく。【三才圖會】云東洋大海中有和尙魚狀如龜其身紅赤色云

蝸牛　かたつぶり○五畿内にて。でんゝむし、播州邊九州四國にて。でのむし、周防にて。まいまい、駿河沼津邊にて。かさばちまい〳〵、相摸にて。でんぼうらく、江戸にて。まい〳〵つぶり、同隅田川邊にて。やまだにし、常陸にて。まいほろ、下野にて。をゝほろ、奥仙臺にて。へびのてまくらといふ。今按に、かたつぶりは必雨ふらんとする夜など鳴もの也。貝よりかしら指出して打ふりかた〳〵と聲を發す。いかにも高きこゑ也。かた〳〵と鳴て頭をふるものなれば「かたふり」といへる意にて「かたつぶり」となづけたるものか。「つ」は助字なるへし。予隅田川の邊に寓居せしころかれを見て句有。又晉其角か

へ文七にふまるな庭のかたつぶり　とせし句は寂蓮法師の歌の、上の五もじをかへて俳諧の句となしたる也

へ牛の子にふまるな庭のかたつぶり角有とても身をはたのまし

(1)家くちなは

蛞蝓　なめくじり○常陸にてはだかまいほろ、越後にて山なまこと云。山中には大五六寸許のもの有と也。貝原翁曰、なめくじり夏月屋上にはひのぼりて蝶蛤に變ずる有。然ともこと〳〵く不然

蛇　へび○關西及西國にくちなは、關東にへび、薩摩にて女の詞にたるらむしと云。(1)家ぐちなはと云るは屋上にすみて鼠を追ひ、鳥の雛を捕もの也。是黄頷蛇也。近江にてさとまはりと云。播磨にてをなぶそといふ。津の國にてをなびそ又ねづみとり と云。筑前にてやじらみと云。一種東國にて山かゞちと云を、近江にてしまへびと云。又一種巧蛇和名をゝへび、東國にてあをだいしやうと云を、近江にてあをそと云。又一種畿内及東武にてからすへびと云を、安房にてすぐろへびと云。筑前にてうしぐちなはと云

蝮蛇　まむし○西國にて「ひらぐち」と呼。筑前にてはめと云。土佐にてはみ又くつはみと云。上總房州にてくちはみと云。是和名はみ也。又一種俗にひばかりと云有。土佐にて日みずと云。小〻しく錦色なるもの也。人是にさゝるゝ時は、日を見る間なく死すと云心にて「日みず」と云と也。漢名蝮尾蛇これなり

蝍蛇　うはゞみ○出雲にてじやばみと云。北國にてをかばみと云

蜥蜴　とかけ○畿内にてとかけ、東國にてかなへび又かまぎつてう、相摸にてかまきり、西國にてとかぎり、大和にてとかき、江戸にてはとかけと「け」の字を濁りてよぶ。一種青とかけと云有。背青みどりにして光〻有。縱斑の文有。腹白く口大〻也。是毒虫なり

蜂　はち○仙臺にてすがりと云

馬蜂　くまばち○仙臺にておほかみばちと云。越前にてあんどん蜂と云

蠟蝟　じかばち○畿内にてこしほそと云。仙臺にて土すがりと云。常陸にてかそりと云。信州にてぢすがりと云。東武にてじがばちと云。【日本紀】螺蠃又【中庸】蒲盧の說古註にも見えたり。【東雅】に【本朝式】を引て、すがるの太刀といふは則今の細太刀と云物也。又「さそり」と云も、細きことなり。常陸にて「かそり」といふも「さそり」也。彼國に賀蘇閥と云閥有。昔此國にさそりばち多きによりて此名有と見えたり

蠶　かいこ○東國にておこと云。越後にてうすまと云。同國長岡にてはぼこと云。信濃にてぼゝうと云。奥州津輕にて大なるものをとうどこと云。小き物をきんこと云。出羽にてとゝこと云。房州にてひめこと云

今按に、丹波國桑田郡大原社は蠶飼するもの〻信仰する神なり。毎年五月廿八日おばらさしとて諸人群參す。三月廿三日を春志と云。參詣のもの其社地の小石を猫と名付て借て下向す。是は蠶に鼠のつかぬ呪なるべし。九月廿三日をは秋ざしと云て、一〻とせに三たび詣事有。又極月晦日の夜、家の大黑柱に灯をともす家有。これ鼠に媚る也。蠶を養ふ人の、ねずみを怖るゝより起りたるなるべし。また墓もかひこにつくものとぞ、歌に

へ朝かすみかひやか下に鳴蛙こゑたにきかはわれこひめやも

一說に、蓍の草を箒にして蠶飼の棚を、初子の日に、十四五の小女午の年なるに掃ずれば、蠶の糸綿成就すると云。【萬葉】に大伴家持、はつ寮の初子のけふの玉はゝきと詠せしは此義也。又東國にて繭玉とて正月十四日に餌を製し、柳の枝或は小竹の枝などに付て、繭にかたどり祝ふこと有。又蠶は春より夏にわたり、又夏の蠶は秋に至て成ものなれは、西國にては其頃しもまゆ玉をつくりていはふ事となん。又蠶の蝶に化す頃、西國にてひるろうと云。上野及信濃陸奥にてひるといふ。伊勢にてひいろと云。又かひこは子を牛付て子孫絶えず、めで度物なれば、婚禮にめてふ、をてふを用る事、禮家の大事とす。今は常の蝶と心得る人も有とかや。又めてふ・をてふも實は蝶鳥也といへり

蝶　てふ○相摸及下野陸奥にてふまと云。津輕にてかゝべともてこなとも云。出羽秋田にてへらこと云。越後にてふまべつとうと云。信濃にてあまびらと云。一種鳳蝶、其形大にして黑色羽の緣に文有もの也。上總にてぢごくてふ〳〵と云。下野鹿沼邊にてぢごくでふまと云。美濃をよび近江にてかみなりてふ〳〵と云。薩摩にて山でふ〳〵とと云。今按に、蝶種類多し、其あらましをこゝに出す。蝶和名かはびらこ也。羽州にてへらこと云。野州にては所によりて蝶々ばこと云。これらの詞は「かはびらこ」の略にして「ひらこ」又「へらこ」と轉し、又「へらこ」轉して「ばこ」となりたる物ならん。又胡蝶と云。胡〻字は其髮を賞せし名也。江戸にては「てふ〳〵」といふ。一說に蝴

は「てふ」也。蝶もとより「てふ」也。よつて蝶々とかさねて呼ともいへり

蜻蛉　とんぼう○奥州仙臺南部にて。あけづと云。津輕にて。だんぶりと云。常州及上州野州にて。けんざと云。西國にて。ゑんばと云。一種紺鑾幾内にて。紺鑾といふ有。東武にて。かねとんぼと云。肥前にて。かうやひじりと云。又一種東武にて。赤卒と云。和名あかゑむば也。幾内にて。しやうれうやんまと云。西國にて。しやうれうゑんばと云。常陸上野下野邊にて。いなけんざと云。越後にて。こしやうとんぼ又。ちごとんぼと云。奥州にて。なんばあけづと云。會津にては。たのかみとんぼと云。又一種江戸にて。しほとんぼと云有。奥州にて。しもがらあけづと云。肥前にて。しほからゑんばと云。又大なる物を。馬大頭と云。上總にて。をんじやうといふ。越後にて。山とんぼと云。江戸にて至ッて大なるを。鬼やんまといふ。土佐にて。うしやんまと云是也。【東雅】曰、蜻蛉はいにしへ「あきつ」と云。後「かけろふ」と云、即今云とんばう也。東國の方言に「えんば」と云。赤卒を「いなけんざ」などもいふなり。あきつとは秋に出て、其類の衆多なれば也。秋津と云「つ」は助字也。「いなげんざ」といふも、稻熟する時に有を云也。「けざ」とは「ゑんば」の轉語也。童部の「やんま」といふも「ゑんば」の轉ぜし也。「ゑんば」は即「ゑば」なり。なを「八重ば」といふが如し。よのつねの虫は多くは羽二ッ有を、此虫の羽四ッあれは、かさなれる羽といふ意也。又きはめて細く小ッなる草むらの間に、其羽をかさね植て止まるものを即今「かけろふ」といふ也。此もの誠にありともなし共さだかに見えぬもの也。【南留別志】に、蜻蛉を「とんぼう」といふは吾邦の名を秋津洲といふ故に、東方といふこと也云々

蛸螺　つくつくばうし○上野にて。ほつてうと云。近江にて。つくしこひしと云。今按に、俊頼朝臣「うつくしよしと蟬の鳴らん」と詠し玉ひしは「つくつくばうし」にやあらん【和名】くつつくぼうし

茅蜩　ひぐらし○上總にて。くつはぜみと云、又。かなくと云

蟋蟀　こほろぎ○南都にて。きりきりす、又。こころこころしと云。江戸にて。こほろぎと云。武藏府中邊及信濃奥州南部にて。きりきりすと云。越後高田邊にて。つゞりさせと云。美作にて。きりごといふ。白石翁曰、是古に云きりきりすもいふ。又古こほろぎといひしは、今いふ「いとゞ」也。又古「いねつきこまろ」といひしは、今云「いなご」也。また古「いなこまろ」といひしは、今云「はたたをりめ」といひしは、今云「きりきりす」也。又古「はたをりめ」也。小兒籠にやしなふもの也

蠅虎　いとゞ○京にて。くろゝ、伊勢及四國にて。かまご、尾張にて。かまぎりす、遠江にて。かんなご、西國にてくろつゞ。又いひご、近江にて。くろと云。これ古「こほろぎ」といひし物也。今いふ「こほろぎ」の種類にして小なる物也。

蝨　のあたりにすむ

莎鷄　はたおりむし○伊勢にて。やまぎすと云。近江にて。うりすと云。幾内にて小兒。きりきりすと云。東國にて。きりきりす又。ぎつすと云。又ぎつちよなど云。其こゑの「ぎい」と鳴くははたおるまねきの音、ちよんと鳴くは鐵の音に似たりとて、いにしへ「はたおりめ」とよびしも今「きりきりす」と名の變したる也

螽蟖　はたはた○江戸にて。がち又。ばつた又。しやうれうばつたと云。上野にて。ばたといふ。信州にて。ほつたこと云。駿河にて。がたきと云。伊勢にて。ねぎどのと云。奥州仙臺にて。はつたぎと云。津輕にて。とらほうと云。出雲にて。ほとけの馬と云。長崎にて。たなばたと云

紡虫　くだまき○一名いとくり　江戸にて。むまをひと云。近江にて。すいとゝいふ。土佐にて。くだまき又。くだむしと云

蟷螂　かまきり　一名いぼじり○江戸にて。かまぎつてう、江戸田舍にて。はいとりむし、信濃にて。かわみそ、相模にて。いぼしり又いぼくひ、奥州にて。いぼ虫、に津輕て。いぼさし、肥前にて。かまきりてうらいと云。【本草】時珍曰、今人病疣者往々捕蟷螂食之云云

蝦蟆　かはづかへる○仙臺にて。びつきと云。西國にて。びきと云。唐津にて。たんなんびきと云。土佐にて。ひき又おんびき又しやくたらうなどゝ云。又一種小ッく青色にして木竹の枝に棲ものを、關東及幾内にて。土鴨と云。九州にて。ほとけびき又あまびきといふ。唐津にては。あをびきと云。今按に、但馬國に一種。河鹿とよぶ有。谷川の流にすみて、濁る水にはすまぬもの也。其聲鹿に似たり、故に河鹿と呼。魚に同名有、別物也。常の蛙の群る中へ放す時は、則常の蛙聲をとゞむとなり。肥州にてはこれを「かはづ」と呼。常の蛙をば「かへる」と呼也。古歌に「蛙なくよしのゝ川の瀧

の上に」とよみ、又「みわ川の清き瀬」など詠る類、是皆山蛙也。常の蛙は聲かまびすしく、山蛙は聲清く、寂しきものにて、鹿の聲ともきこえ、また鳥の鳴くともきこゆる物なりとぞ。【無名抄】に井堤の蛙のおもしろきよしを誌す。是山蛙也。近年江戸にもとめよせたりと聞り。余いまだ不知

蟾蜍　ひきがへる○五畿内及參遠又は越路なとにて。ふくがへるといふ。伊賀伊勢にて。ひきご(1)、西國にて。わくどう又。どつくう又わくひき又くつわびき又鬼わくどう又牛わくどうなといふ。土佐にて。くつひき又。やどもりなどいふ。奥州にて。ひきだ又びつき又だいてんばいなといふ。出羽秋田にて。もつけと云。房總にて。あんがう又をかまがへる又ふくあんごうと云。武ノ八王子にて。山あんかうと云。上野にて。大ひき又小なるを。べつとうと云。江戸にて。蟇といふ

(1) ひきこ

蝦蟇　むかで○上總にて。はがちと云。【日本紀】に出

馬陵　をさむし○關西にて。をさむし、關東にて。やすで、肥前にて。ぐいらうと云

鼓蟲　まい〳〵むし○江戸にて。水すまし、同近在にて。さをとめ。京にて。うづむし、泉州堺にて。ごまいむし、大坂及西國にて。かいもちかき、大和及近江越前にて。まいい〳〵、東近江にて。ごまゝいり、四國にて。いたこむし又。しろかきむし、上野にて。ごきまわし、信濃にて。すめ、加賀にて。さをとめ又しけ〳〵、伊勢にて。たまる、上總にて。みづぐるま、美作にて。みこのまひ、薩及肥前にて。ごきあらいむしなと云。此むし形丸く眞黑にして小し。水面にうかびめぐりてうづまくが如し

水黽　てふま○畿内にて。みづすまし又かつをむし、江戸にて。てふま、西國にてしほうり又あめだか又あめかた又じやうせんかようなどゝ云。近江にて。しほんしほ、遠江にて。あめかす、越後にて。しほのみ、信濃にて。あしたか、土佐にて。しほたき、薩摩にて。あめんどう、上總にて。みづぐるま又かはごみ、武州にて。かはぐも、これは大なる蚊に似て足高く水上をはしる虫也

飛蛾　こがねむし○つくしにて。ぶどうと云。肥州にて。かねぶう〳〵と云。此むし夏の夜、油灯に入て灯を消す事あり

兜蟲　かぶとむし○江戸にて。かぶとむしと云。伊勢にて。やどをかと云。大和にて。つのむしと云。此虫は皂莢の樹に住むし也。羽有て飛ぶ。雄は角有、雌は角なし。但「さいかし」は關東にて「さいかち」といふ樹也

蛹蟲　あぶらむし○伊勢にて。ごきくらひむしと云。薩摩にて。あまめと云。肥州にて。ごきかぶらうと云

蠶蟲　けむし　一名かはむし○京にて。ほうじやうむし、出雲にて其色黃成を。はけむし、其色黑を。とけむしと云。奥の津輕にて。がいだかと云。今按に、泉州堺にて六月大暑の頃、人家の屋根の裏に毛虫生ず。此虫の名を。じこうほうと云。毒虫也。家々にて「じこうがり」とて笠深く着、顏を包、雨具などに身をまとひて、竹竿の先に鵜をぬりてかのむしをとる事有。又武州の内にて毛蟲の異名。信濃太郎といふ所多し。其心は六月信濃の方に出る雲を「しなの太郎」と云。此虫の黑き形、其雲に似たる故に名つくとぞ

蟑蛄　けら○京にて。しやうらいむしと云。【荀子】に鼫鼠の五技を註して曰、能飛べ共屋上に上る事あたはず。よくのぼれ共木をきはむる事あたはず。よくをよけとも谷をわたる事あたはず。能く穴をうがてども身をおほふ事あたはず。よく走れども人に先だつことあたはず。是を鼫鼠才と云て、實なき人のたとへ也。俗に石臼藝といふも同し心か。又諺にむしけらなどいふは「けら」をのみいひし語の事にはあらず。すべて虫類をいふなり

物類稱呼二終

物類稱呼卷之三

生植

米　こめよね　○遠江國天龍の川上にて。ほさつと稱す（此所にては、米といはずしてほさつとのみとなふ）按に、諸國より大峰或は羽黑山なとへ詣るもの、一七日齋す。其内はほさつと稱して米とは呼ずとなん。西國又は朝鮮の方言にも「穀」を菩薩と云よし見えぬ。【東雅】【雜林類事】を引て、白米を漢菩薩といひ、粟を田菩薩といふを記せりと有。又俗間に糠味噌といふは、糠と鹽とを和して制れるを名づけて「さゝぢん」と云。是は佛經を書寫する早書の法に、菩薩の二字の艸冠のみをとりて芽としるす事有。されば さゝとはほさつの義にて、是も又米を「ほさつ」といふ事によれる也。【秘藏記】云、天竺にて米粒を舍利とす、佛舍利も又米粒に似たり、故舍利といふと云。是三國同日の談なり。又早書の時のならひに、芽菩薩、点菩提とて芽(1)とよむ、又醒聞、亘緣覺、或は彌陀を汐と書たぐひ、是皆經文の早書の合文也

〃上もなき大佛もちの本來をさとれは米のほさつなりけり

(1) 芽　ほさつ

粉　ひつぢ（いねかりたる跡に白生す）○尾州にて。ひうちと云（是は轉語なり）佐渡にて。まゝばえといふ。伊勢白子にて。二ばんごと云。越前にて。ひとてといふ

蜀黍　たうきび○東國にて。もろこしと云。中國にて。きみ、伊豫にて。たかきび、加賀にて。ほきび、越後にて。せいたかきび、奥州津輕にて。たちぎみ、畿内にて。たうきびと云

玉蜀黍　なんばんきび○畿内にて。なんばんきび又菓子きびと云。伊勢にて。はちぼく、西國及常陸、或は越前にて。たうきびと云。東國にて。たうもろこし、遠州にて。なんばんたうのきびと云。奥州より越後邊にて。まめきびとも又くはしきびともいふ。奥の南部にて。きみといふ（此所にては常の黍をはもろこしといふ）備前にて。さつまきび、因幡にて。たかきびといふ

紅豆　さゝげ○九州及上州信州總州にて。ふらうと云。關西にて。十八さゝげと云を、關東にて。十六さゝぎといふ

案に、關東にて大角豆の短く生るものを。みづらと呼。西國にては。ふたなりといふ。【古事記】美豆羅(1)【和名】

(1) たはれたる

鬟【萬葉】髮臥、註曰、童裝束の時は總角(1)とて「みづらゆふ」と有、今「みづらさゝけ」といふものゝたばねたるも、童子の髮に似たり。これによる歟

綠豆　ぶんどう○東國にて。やへなりとよび又。とうろく共よぶ。畿内にて。ぶんどうといふ。遠江にて。とうごと云。備前にて。さなりといふ。伊勢にて。かつもりといふ。尾張にて云ぶんどうあづき又十六寸なといふは別種也

豌豆　ゑんどう○畿内にて。のらまめと云。東國にて。ゑんどうと云。伊勢にて。ぶんどうと云。上總にて。ゑんづといふ

萊菔　だいこん○はだの大根。相州波多野ノ名産也。江戸にて。はだなと云是也（これ轉語也）京にて。ながね大根と云。大坂天滿にて。ほそね大根といふ。又宮の前の大根と云。（河州守口にて是をもつて粕漬とす）西國にて。小大根と云。（はだの大根は小大根よりはすこし大也）又畿内にて。なかぬき大こんといふを、江戸にて。をろぬき大こんと云

菘　な○京にて。みづな又。はたけなといふを、近江にて。うきな又ひやうずな と云。鄙にて。京菜といふ。江戸にても。水菜といふ有（京都の水菜よりは葉黑すみて厚く廣し。京の水菜に及はす。葛西菜又小松川本所牛島邊の冬菜におゐては京大坂にもなし。風味よくしかも一年の内絶る事なし。まことに名産也）又關西にていふ。間引菜と云を、江戸にて。つまみなといふ。西國にて。をろぬき菜と云（江戸田舍にて、菜にても大根にてもおろぬくと云といへとも名付る時はつまみ菜と云。もみ大根といふ）○關西にて。蕪菁と云を、東國にて。かぶなといひ、根をは「かぶ」と云

韮　にら○上總にて。ふたもじと云。是は葱をひともじと呼故に、にらをふたもじと云

冬葱　ねぎ○關西にて。ねぶかと云。近江にて。ひともじと云（ひともじは通稱なれ共、常に用ゆる所をさしていふ）關東にて。ねぎといふ。「ねぶか」とは根ぶかく土に入こゝろ、胡葱は淺き葱の意、根深に對したるの名なるべし。「つ」は助字なり。和名「き」といふ。故に一、文字と云。分葱はわかちとる義、刈葱は刈とる義とぞ。又ひともじ(2)を詠ぜし歌に

〃引見れは根は白糸のうつほ草ひともしなれと數の多さよ

(2) ひともし

野蒜　のびる○加賀にて。ねんぶりと云

蒜　ひる○關東にてひるといふ。關西にてろくたうと云。筑紫にてにんにくといふ

芋　いも○駿河及美濃越後高田ノ所在、又常陸にてほゞと云○唐芋を遠州にて女芋と云○蓮芋　武州品川にて八ッがしらと云。又栗芋といふ所をゝし○芋ノ蕊　京にていもじといふ。東國にてずいきと云（これは諸國の通語なり）美濃尾張にてだつと云。奥州仙臺にてからどりと云【土佐日記】「いもしあらめも齒がためもなきかうやうの國也と云云「いもし」は「いも」にて「し」は助字成共云

佛掌薯　つくねいも○東國にてつくねいも　又つくいも　又山のいも　又やまとなどゝ稱す。關西にても山のいもといひ　又一名うぢいもといふ。奥州仙臺にてはだいしいもと云。津輕にては唐いもと云。土佐にて手いもと云。上野にてみねいもといふ

今按に、山のいもと呼所をゝし。然ともやまのいもは薯蕷にて、東國に長いもといふ是なり。又藥物の山藥は自然薯蕷を用ゆ。【南郭遺契】【負暄雜錄】引、山藥本名薯蕷避唐代祖諱改名薯藥避宋英宗諱曙途名山藥云云。又「つくねいも」を「山のいも」といふは、其形山のごとく又峰のごとし、或石或人の手にも似たり、故にかく名つくるなるべし

黃獨　けいも○畿内にてけいもと云。東國にてかしゆうと云（藥種の何首烏にあらす同名にして異なり）駿遠にてぜつぶといふ。相模にてぜんぶと云。仙臺にてべんけい芋といふ

零餘子　ぬかご○相州にてくろめと云。常陸にていもしが子ととといふ。肥前唐津にてばんごといふ。　常陸の國にていふ「いもしがこ」は「いもがこ」にて「し」は助字也。平忠盛の「いもが子ははふほどにこそなりにけれ」とありしも、此事とかや。故事こゝに略す

甘藷　りうきういも○畿内にてりうきういもと云。東國にてさつまいもといふ。肥前にてからいもといふ

享保年中薩州より來る。味ひ美にして其性よろし。又長崎にりうきういもてうせんいもと稱する物有。是は別種にして薯蕷なり

薯　なづな○（おとこなつな・をゝなつな・をなつな等の名有）○花さく頃ぼちぐさと云。江戸にてべん〳〵草、尾張にてぢゞのきんちやく・ばゞのきんちやくと云。奥之津輕にてすゞめのだらことといふ。是薺の實也。形きんちやくの如く、又三線のばちに似たり。津輕にては巾着の事を「だらこ」といふ。故に名とす。

東國の俗、四月八日毎に此草をとりて行灯に釣りて、夏の虫の油灯に入らぬ兇ひとす

葵蓼　はこべらはこべ○加賀及東尾張にてあさしらけといふ（西尾張にては、はこべといふ）丹波邊にてはひんずりと云

鼠麴草　はゝこぐさ○遠江國にてちゝぐさ、下野宇都宮にてねばりもちと云。信濃にてかはちぐことといふ。尾州にてとうごと云。上總にてかうじばなと云

世俗三月三日此草を用ひて餅を制し、母子餅となづく。これを蓬にかへて「よもぎ餅」と云。また「草餅」と云。事實は【文德實錄】に見えたり。又五形蒿と名づく。人日七種の其一ッなり

火蝦菜　さんごじゆな○播州にてあかぢさと云。江戸にてたうぢさといふ

蠶豆　そらまめ○東國にてそらまめといふ。西國にてたうまめ。出雲にてなつまめ。尾張にてのらまめ（同名有。別種也。是は空豆の轉語にや）伊豆駿河にて五月まめ、相摸にてふゆまめ、下總にてゆきわりまめ、伊勢及遠江にてがんまめ、中國にてたんぢくまめと云（空豆とは其實の空に向て生る故になつくとかや）

刀豆　なたまめ○九州及四國にてたちはきといふ

眉兒豆　ゐんげんまめ○京にてゐんげんまめといふ。江戸にてふぢまめと云。西國にてなんきんまめと云。上總にてさいまめと云。伊勢白子にてせんごくまめといふ。【農政全書】眉兒豆これ扁豆の類と有

藜豆　ゐんげんさゝげ○近江にてはつしやうまめと云。關西にてふぢまめといふ。西國にてうせんさゝげと云。勢州白子にてなたまめといふ（同名有。混すへからず）伊勢駿河にてにどなりと云。奥之南部にてさゝげと云（此所にていふ十六さゝげは別也）下總佐倉にてせんだいさゝげといふ。東上總にて二度十六といふ

莧　ひゆ○東國にてひやうと云。奥津輕にてひやうあかざといふ。加賀にてはびやうと云○馬齒莧相摸にていぬひやうと云○加賀にてずんべらびやうと云を、江戸にてすべりひやうと云

(1) 名二薯蕷一

萱艸　くはんさう○信州にて。とつてこうと云。肥・唐津にて。くはんすと云

藤高　よめがはぎよめな○京江戸共に。よめなといふ。畿内の女言に。おはぎといふ。近江にて。はけといふ

今按に、おはぎといふは薺といふ說は非也【源順和名抄】薺和名奈都那又薺蒿和名於八木　如此出せり。薺蒿の二字「なづなよもぎ」と訓故に「なづな」とす。文字になづます、其いふ所につきて正すべきか。【葛葉】宇波疑又兎牙子と詠せり。後「う」の字轉して「お」となりたるもの歟。其例多し。女詞に「御」の字を冠らしめて「おはぎ」といふにはあらさるべし

獨活　うど○西國にて。しかといふ。西國にては土中に有を。獨活といひ、二三寸地上に生じたるを。うどといふ。尺以上になりたる物を。しかと呼。阿部氏云、松前千砂野の濱より眞の獨活を出す。土人これを。さいきと云。京嵐山にも有。ししうど又いぬうどといふ

迷蔬　ぜんまい○上總にて。ぜんごといふ（別種に前胡といふ有、上總にては「ぜんまい」をいふ）

番椒　たうがらし○京にて。かうらいごせうと云。太閤秀吉公朝鮮を伐ち給ふ時種を取來る。故に此名有。西國及奥の仙臺にて。こせうといふ（東國にて眞の胡椒を「ゑのみこせう」といふ）出羽にて。とこほしといふ。但奥羽のうちにても「なんばん」と稱する所もあり。上總及勝遠にて。なんばんといふ。越前にて。まづものこなしといふ（是は江戸にて番匠の隱語に「かけや」といふもおなし心なり）

萵苣　しゆんぎく○近江彦根にて。ろうまといふ。京大坂にて。かうらいぎく又きくなともいふ。關東にて。しゆんぎくといふ

土筆　つく〳〵し○東國にて。つくしともいふ（これ略語なり）作州にて。ほうしといふ

〽佐保姫の筆かとそみるつく〳〵し雪かきわくる春のけしきを　爲家卿

冬瓜　かもうりとうぐは○畿内及中國北陸道或は上總にて。かもうりといふ。東國にて。とうぐはといふ

東國には「とうぐは」を「とうがん」とはねてよび、又「大こん」をば、「大こ」といふこそをかしけれ。それにつきて攝州伊丹にては古酒を。こうしう又旦那を。だんなん、大坂にて朝夷奈を。あさいなん、京にて坊を。ぼん、畿内にて牛房を。ごんぼ、又にんじんを。にじ、播磨にて粟の穗を。粟のほう、又るんらうを。るんろ、伊勢にて米一斗を。いつとう、二斗。などゝいへるたぐひ、諸國かぞふるにいとまあらず

南瓜　ぼうふら○西國にて。ぼうふら、備前にて。さつまゆふがほ、津國にて。なんきん、東上總にて。とうぐはん、大坂にて。なんきんうり又ぼうぶら、江戸にて先年は。ぼうふらといひ、今はかぼちやと云

越瓜　しろうり○京にて。あさうりといふ。一種筑紫にて。つけうりといふ有。江戸にて。はなまるといふ

菜瓜　なうり○京にて。あをうり、大坂にて。なうり、大和にて。はなんぼ、江戸にて。まるづけ、相模にて。かたうりといふ（東國にあを瓜と稱する有。別種也）

絲瓜　へちま○信濃にて。とうりと云。薩州にて。ながうりと云。「とうり」は糸瓜の上略なるへし。　或人の曰、「へちま」といふ名は「とうり」より出たり。其故は「とうり」の「と」の字はいろはの「へ」の字と「ち」の字の間なれは「へち」の間、といふ意にて「へちま」となつくるとぞ。又諺に「へちまのかはのだんぶくろ」といふ事有。是は此「へちま」にはあらず。へちくわんが馬の革一駄袋といふ事也。「へちくはん」は茶人にて茶器を革袋に入、馬につけて遊行せしとなり。侍の隱遁したるにて粟田口に住めり。利久いまた與四郎といひし頃、或日粟田くちの庵を尋ける。庵主はもとより道化ものと聞及ひ、與四郎をほしひたゝれにて云入けれは、あるじむかひに出、一禮して引込み、數寄屋にしめを張り、あたら敷ひさけに鹽水を入て、箒の葉にて與四郎をあたまくだし清め、三寶にかはらけ、洗米をそなへ、神の影向と名づけ、茶をふるまひかへしたりとなん。よにをかしき物なりけり

甜瓜　まくはうり○西國にて。あじうり、奥の仙臺にて。でうり、佐渡にて。ちんめうと云。○又江戸にて云。ぎんまくはを、備前にて。せんしかと云。奥の津輕又松前にて。しまうり。南部にては。きんくはといふ。眞桑瓜は美濃國眞桑村の產を上品とす。故に名づくとぞ。又越前にて。ねづみ眞瓜といふ。味ひ甘美なり。吐方に用る所の瓜蔕是なり。其味ひ甚苦し。餘國の產は吐方に用ひて功なし

西瓜　すいくわ○大坂にて。さいうりといふ

錦荔枝　つるれいし○長崎にて。にがごうりといふ。是

は苦瓜の轉語なるべし

磐梨　いばなし○京及近江にて。いばなしといふ。北國にて。すないちごといふ。其葉平地木にして、高サ五六寸、三月實を結ぶ。大豆の如くにて圓し。外の色青く、内は紫黑色、味ひ酸く甘し。京畿の小兒好んで食ふ。漢名未詳

栝蔞　からす瓜○伊勢及紀伊熊野邊にて。うりねと云。越前にて。くそうりといふ。土佐にて。ぐどうじと云（其根を同國にてこびと云）肥前にて。ごうりといふ（和産二三種有、其核玉づさの如くなるものは王瓜なり）

桔梗　きゝやう○信州上田にて。くはんさうと云。【古今和歌集】物名の歌に

〈秋ちかう野はなりにけり白露のをける草葉の色かはり行

防風　ぼうふう○畿内及藝州信州にて。山にんじんといふ（是和名也）

按に、今野菜となす物は濱防風なり。江戸の市にあるものの相州鎌倉よりをゝく是を出す。莖葉ふとくして胡蘿蔔に似たる物、眞の防風なり

澤瀉　おもだか○北國にて。なゝとゝ云。畿内にて。さじおもだかと稱す。是藥草なり。一種慈姑に似て花さく物をも「おもだか」といふ。同名異物なり

麥門冬　ぜうがひけ○關西及四國共に。ぜうがひけと云。東國にて。りうのひけと云。奥州にて。たつのひけと云。尾州にて。蛇のひけといふ

石蒜　しびとばな○伊勢にて。せそび、中國及武州にて。しびとはな又ひがんばな又きつねのかみそり、上總或は美作にて。いうれいばな又ひがんはな、越後信濃にて。やくびうばな、京にて。かみそりばな、大和にて。したこじけ、出雲にて。きつねばな、尾州にて。したまがり、駿河にて。かはかんじ、西國にて。すてごばな、肥ノ唐津にて。どくずみた、土佐にて。しれい又しびと花又すゞかけと云又。まんじゆしやけと云有。種類なり

酸摸　すいば○畿内にて。すいどうと云。江戸にて。すかんぼと云。西國にて。すいばといふ。上野にて。すいこきといふ。加賀にて。すいことといふ。【多識】酸摸　すし又すいとう草と有、是也

酢漿草　かたばみ　一名すいもの(2)ぐさ○京にて。とんぼぐ(3)さ、泉州堺にて。すもゝ、筑紫にて。こがねばな(4)、出雲にて。すいぐさ、相摸にて。はすぐさ、江戸にて。すぐさ、奥ノ津輕にて。すかんこ、尾張にて。すいもの草と云

白前　しらはぎ○江戸にて。しらはぎと云。これ古名なり。駿河にて。しかみぐさと云。加賀にて。かもめぐさと云。伊勢にて。ひよい〳〵草と云。　按に、葉は萩に似て小白花咲り。唐種にろくゑんさうと云有。上品なる物也

大蓼　せんにんさう○九州及東國にて。ふつくさと云。尾州にて。くつぐさといふ。武州隅田川邊にて。馬の齒かけ草といふ

立葵　たちあふひ○武州にて。たちあふひと云。勢州にて。やうらうぐさと云。阿波にて。ゑれぐさといふ。漢名未詳

莨菪　ほめきぐさ○江戸にて。なゝつぎゝやうと云。肥後にて。はしりどころといふ。【廣大和本艸】葉、商陸に似て小也。根、野老に似たり。あやまつてこれを食へば狂走して止ず。故に「はしりどころ」といふと云々

鼓子花　ひるがほ○陸奥及上野下野越後にて。あめふりばなと云。越前にて。こうづるといふ。相州海邊にて。へびあさがほといふ

縫擂蜂　もぢずりぐさ　一名ねぢはな○筑前にて。しんこばなと云。　今按に、果子の類に眞稿といふ物有。團子に似て制少し異なり。もぢずりの花ノ形かの「しんこ」に似たり。故にねぢはな・しんこばななどいふか。尾州にて繰の眞木の兩の端のろくろを「しんこ」といふもおなじ意なるべし。又饂飩の類を果子といふ事は【說郛】見えたり。點心ともいふ。【勢陽雜記】勢州呑海院は絶景の地にて駿河の富士も見ゆる。此所にて一休和尚發句に

〈海をのむ茶の子か雪の富士の餅

白頭翁　ちごばな　一名しやぐま○京都にて。うないこ又ぜがいさう（善界の譌に、大唐の天狗の首領善界坊と有。其髮に似たりと也）大坂にて。ひめばな、江戸にて。おきなぐさ（是和名なり）、畿内にて。ちごはな、美濃にて。がくさう、加賀にて。けしゝまないた、甲斐にて。けいせいさう、木曾にて。かぶろ、越中にて。おにごろ又。てんぐのもとゞり、仙臺にて。ちゝんこ、下野にて。ちゝこ又。かはらちご、筑前にて。ねこぐさ。ぜがいさう、飛騨にて。ものぐろひ又。かつしき、四國にて。尉(2)どのと云

兎絲　ねなしかづら○東國にて。さうめんぐさと云。筑前にて。うしのさうめんと云。案に、下野の國日光山さうめ

(1) 繰ノ振假名「くり」無シ
(2) 尉ノ振假名「ぜう」無シ

(1)ちやうてまり

ん谷の水中に此草をゝし。東武には隅田川に有

三稜　みつかど○伊勢にて。さぎのしりさしと云。東武にては井ノ頭の池邊に多くあり（三稜種類あり）

玉樓春　いはくちなし○武州にて。たまてばこと云

石逍遙　まんねんかづら○北國にて。せんだんかづらといふ

連錢草　れんぜんさう○江戸にて。かんとり草と云。駿河にて。かたいかりと云。加賀にて。ねぜりと云。此草地に付て生す。氣味芹の臭有。鉄猫兒の形に似て花半分有によりて名づけて「かたいかり」といふ。花又蓮の香有。故に半邊蓮の名有なるべし。是【廣大和本艸】の說なり。松岡氏曰、唐土の書に半邊蓮と云草有。是日本にて繪に書る唐草と云物也とぞ。案に「かんとり草」は古說連錢草と云。但二種有。蔓生なる物こゝに云「かんとり草」痟疾の藥也。其名によりて小兒喰初の器物に此草を畫く、今の唐草の初也と云

未詳　又一種牆生なるもの「鹿蹄草」和名まらはらしと云。又。積雪草又けんのしやうこなと云。武江本所三圍稻荷社の側に多く有

烏鳳花　しやちく○常陸にて。とんほはぎといふ

蓬筑草　七だんくわ○甲州にて。ちやう(1)でまりといふ。花の色みどりにして四一出一、房に數百花つく。葉莖ねばりて衣に付、はなれがたし

鹿蹄草　すゞらん○大和にて。まきをもてと云。江戸にて。べつかうさうといふ。鹿蹄草未詳江戸には四谷大宮八幡社地に見えたり。同名別種あり

羊乳　つるにんじん○江戸にて。つりがねかづらといふ。木曾山中にてちうぶと呼

漏羊藿　いかりぐさ○江戸にて。くもきりと云

薄荷　はつか和名めくさ○西國にて。めはりぐさといふ（ひきをこしといふは山薄荷なり）

沙參　しやじん和名つりかねにんじん○山城山科にて。びしやゝと云。越中にて。しやぐしやといふ。但馬にて。きゝやうもどきとよぶ。筑紫にて。してんばと云。南部にて。やまだいこんと云。上總にて。へびぢやわんといふ

大戟　のうるし○山城伏見にて。きつねのちゝと云。江戸にて。たかとうだいと云

澤　とうだいぐさ一名すゞふりばな○備前にて。みこのすゞと云

(2)ぬすびとのあし

暘跖艸　あをばな（つきくさ・つゆくさ・うつしばな）○畿内にて。あをばな又つゆくさと云。江戸にて。つゆくさと云。上總にて。はたをりぐさと云。尾張にて。ほうしばなといふ。加賀にて。こうやめんといふ。近江にて。こんやたらうと云。讃岐にて。かまづかと云。土佐にて。かまづか又ほたるぐさといふ。　白石翁の云、よろづのはなは朝日影にあたりてこそ咲に、此花は月影にあたりてさけば「月草」とも云。今按に【新古今集】かすが野の若紫のすり衣と詠る。此すり衣は紫草にて摺たる衣にて、女を紫にたとへたる也。惣して摺衣は地に直に草を摺付るもの也。今のもみぢずりの如し。摺衣四色有。委に略す。又俗に藍紙といふもの月草にて制したる物といふ

菝葜根　かやつりぐさ○近江にて。とんほぐさと云。常陸にて。ますぐさと云。安房にて。ますけと云。一名連錢草、又積雪草を連錢草といふは、其葉錢に似たる故なつく。同名別種也

蕺菜　じうやくしぶき○江戸にて。どくだみといふ。武藏にて。ぢうごくそばといふ。上野にて。どく草といふ。駿河沼津にて。しびとばな(1)と云。越前にて。どくなべといふ

升麻　とりあしあはもり○京にて。あはほと云。下野陸奥にて。もくだと云（同國にて葉を「くさちや」又「にがちや」と云）

遠志　をんじ○京にて。ひめはぎと云。西國にて。野茶と云

天麻　ぬすびとのあし(2)○仙臺にて。ぬすびとのあし和名也下野にて。のづちと云

龜牙　だいこんな○江戸にて。たんごなと云。備前にて。だいこんさうと云。其葉菘に似て、實はさやをむすぶ物也。一種狼牙をも大根草と云。未詳

兎葵　いはぶき○越中にて。はこべらと云。加賀にて。はこべといふ。是は正月七日七種のうちの「はこべら」にはあらず

景天　いきくさはちまんさう○京にて。べんけいさうと云。筑紫にて。ちとめといふ。江戸にて。いちやくさうと云

今按に、景天其葉厚く薄白。花一所に集り咲て白く、口紅有てうるはしき小花ひらく。莖を伐て糸をもて釣て置にしほみかはきて後雷の鳴る時必色を增す草なり。故につよきといふ意にて「辨慶草」と名つくる歟。又一種鋸葉な

る物有。是はきりんさう也。又東國にて冬の日老人巨燵をはなれかぬるを「こたつべんけい」といふ。其意は巨燵にのみつよきといふ事也。又關西にて「なみだ辨慶」又は「泣辨慶」なといふは、人に負事きらひにて泣勝といふ意なるべし。又關東にて卷藁を尺余に制り、繩を以て中にさけて、炙たる魚の串と共に貫置物有、名づけて「辨慶」とよぶ。是は彼の辨慶か七ツ道具といふ差物に似たりとて名づくる歟

(1) なみだノ振假名「み」ノ字無シ
(2) 貫ノ振假名「つがぬ」トアリ
(3) 等ノ振假名「あさじ」トアリ

獨頭蒜　ほくり○畿内にてほくりといふ。播磨にてほくろと云。四國にてゑくり、東國にてはくりと云又ほつくりと云。ほくりは略闊に似て愛しつべき花也。奴僕其根をとりて戰をそくふもの也。關西にて「そくふ」と云は、東國にて「こそくる」と云詞なり。「そくふ」とは「そくい粘」そくひ板」などいふか如し

著　あさゞ一名すつほんのかゞみ○近江の大津にてちやんきんと云。尾張にてとちのかゞみといふ（同國にて泥龜を「とち」といふ）甲斐にてくちじやけ、伊勢にてどんがめぐさ、同國白子にていけのおもだか、駿河にてなぎ。加賀にていもなぎ、周防にてえんかういもばといふ（當國にて「えんかう」といふは「かはたらう」のこと也）肥後にてかはいも、備前にてすつぽんもく、江戸の四方にてかへるゑんざ又かはと又ぜにもく又じやんもく又かつぱのだまし、などゝいふ。下野にてくさあふひ。常陸にてどぶばす、仙臺にてだぶなぎ、越後及越中加賀にてがめはな（此國にては泥龜を「がめ」といふ）

今按に、著は菩萊の類、夏に至りて黄色の花ひらく。一種白花なるもの有。睡蓮といふ。京都に「ひつじぐさ」と云、是なり。未刻よりつぼむゆへに名とす。又浮草は、惣名也。萍といひ、蘋といふ種類をゝし。葉の裏に水沫有ものは蘋、水沫なきは著なり。又田字艸といふものは則萍にて別種なり。著は荇に同し。【詩周南】參ー差荇菜又あさゞと詠る歌

夫木
おもふことそこ深からぬ浮寢より心あさゞのさてそ生ける

浮蕾　なぎ○畿内にてさはぎゝやう又水あふひといふ。東國にては水あふひと云（澤桔梗の名はなし）中國及九州にてあぎなしといふ。大和及尾張にて水なぎと云。俗に水葱と書く。花を澤ぎゝやうといふ。夏秋ひらく。其色桔梗の如し

石龍芮　たがらし○京江戸共にたがらし又たぜりと云。西國にてうしぜり又うばぜり又ひきのかさと云。上總にてかへるのきつけと云。下總にたゝらびといふ（但「たがらし」と稱する物二種有）

(1) うしぜり
(2) かぶな

眼子菜　ひるむしろ○畿内及北越にてひるむしろと云。關東にてひるもといふ。信州にてびりことといふ。奥の津輕にてびり物といふ。田夫とりて喉の腫にはるもの也。【救荒本艸】にさゝもと有、實に笹の葉に似たり

菰　こも（海草に「こも」といふ有。よつて「まこも」と云。端午にちまきをまくにこもを以てす）○陸奥にてかつみと云

古今
みちのくのあさかの沼のはなかつみかつ見る人に戀やわたらん

燕子花　かきつばた○常陸にてかほばなと云（これは「かほよばな」の略語也）

かきつはたを坂東にて筆花といふをきゝて
ふではなといふことはりをきくからに一首はかうそかきつはた哉　信海

牛面艸　たそば○賀州にてかへる草といふ。江戸にて牛のひたいといふ

綿蕊兒　つるほ○山城にてつるほといふ。筑紫にてずいべら又たんぱんぐはると云。江戸にてうしのふし又牛うらうと云。田野に多く春宿根より生ず。夏に至て藤色の穗の如くなる花さく。翁ぐさの花に似たり。高さ四五寸、根は水仙の如し

蘿摩　ちゝくさ○京にてちぐさ又らまさう。江戸にてちゝぐさ又らまさうともいふ。上總にてやいとばな（花灸に似たり）つくしにてがぶなといふ。土佐にてがゞいもといふ。蘿摩は腎を益し、精を補ふもの也。葉の形細長く厚く兩對して。をもてにうす白く筋有。好事の人は茶のかはりとなし、又其根を炙て食す。苦甘し。葉莖ともに日にほして焚ば惡臭を消す。實は細長く三四寸ばかり有。へちまに似たり。名づけて「雀瓢」といふ。秋の末熟し、枯て二ツにわれ、中より綿の如くなるもの出。是を東武藥店にて和のばんやと云

羊蹄　し俗にしのね○近江及西國にてぎしぎしと云。出雲にてしんさいと云。江戸にて大黄と云。　松岡氏ノ曰

藥家穿眼と稱する物、眞の大黄也。片と稱するは眞にあらす。則羊蹄なりとぞ

蘭菊　らんぎく○京にてらんぎくと云。西國にて山かうじゆといふ。是は香薷の類にあらす。漢名未詳

聚八仙　かいば○筑紫にてやぶでまりといふ

車前　おほばこ○甲州にてみちばうきといふ。房總にてほゝづきばと云。野州及奥州にてかへるばといふ

海金砂　うにくさ○京にてかにくさ又かんつると云。近江及美濃、或は上野にてたゝきぐさ又いとかづらと云。西國にて、はなかづら又さみせんかづらといふ

菫　すみれ○畿内及近江加賀能登又東海道筋すべてすまふとりぐさと云。江戸にてすみれと云。上野にてすまふばな、仙臺にてかぎばなと云。大和の奈良小兒。治郎坊太郎坊と云。西國にてとのゝ馬と云。

菫一名こまひき草といふ。漢名剪刀草、花紫白二色有。共に莖のかたはらに鉤の形あり。兩花まじへ相ひきて小兒のたはふれとす。故に「すまふとりくさ」の名有。又東武にて「すまふとり草」と稱する別種有。江戸鄙にて「はぐさ」とよぶ草の、穗に出たるを云。漢名不知。尾州にてやつまたといふ、是也。貞砂が「足を空なるすまふとり草」と聞えし附句もむかしがたりとなりぬ

碎米菜　けんけ○畿内にてけんけばなと云。江戸にて(1)れんけはなといふ。筑前にて寶幢花といふ。今按に、いにしへにいふすみれ草是なり。今「けんけばな」といふ。葉は柳の葉に似て花紫色、形遲花のごとし。歌人今古詠賞して「すみれ草」といふ。又正月七日、七種の菜羹のうち、佛の坐と云說非なり。又菫すみれ論物也。こゝに略す。

錢藤　こふぢ○大和及伯耆にてときしらずといふ

燕麥　かるかや　一名しもぐさ○奥州にてしほがまがやと云。是【本艸】謂燕麥の事にて、和歌に詠する所の刈萱にはあらす。かやは草の惣名か【日本紀】萱姫惣て草の始て生するの名とす。尙異說有。　又木ノ艸に從ひ艸ノ木に從ふの文字をゝし。たとへば桔梗、山茶萸の類にて、草木の稱も相通して難なし。【丹鉛錄】【靑史古禮云】男子生而射天地四方其文云、東方之弧以梧梧者東方之艸、春木也、南方之弧以柳、柳者南方之艸、夏木也、中央之弧以桑、桑者中央之木也、西方之弧以棘、棘者西方之草也、秋木也、北方之弧以棗、棗者北方之艸、冬木也、是又可稱草也云云

(1)れんけばな

(2)弧ノ振假名「ゆみ」ノ二字無シ

天南星　をほそひ○京都江戸ともにむさしあぶみと云

靈吾　つは○江戸にてつはぶきと云。大和にてたからこと云

續斷　をとりばな○江戸にてをどりこ草といふ。信州にてへほくさと云。【本艸會志】續斷をどりこぐさ、又こもそう草と云と有

卷柏　いはひば○伊勢にていはまつと云。武州秩父にてへんぐのもとゞりと云。和名いはぐみ、又いはごけと有は、今云「いはひば」也

有通　ありどほし　一名とりとまらず○駿河にてねずみばなと云。江戸にてありどほしと云。九月實生りて翌年まで持ゆへ「ありどほし」といふ

紫羅傘　いちはつ○伊豆及駿河にてひでり草、又萬年草といふ

水仙　すいせん○房州にてきんだいと云。一重なる物を金盞銀臺といひ、千葉なるを玉璃玲と云

夢奠　いぬゑび○京にていぬゑび、西國にてがらみ、東國にてむまのぶす、相摸にてゑびぞろ、上野にて山ゑび、上總にてゑびと云(がまごよみ又ゑびづるなとも云。則、野葡萄也)

西番連　とけいさう○長崎にてほろんかづらといふ。時計草は享保年中始てわたる。西番連となづけて來るよし【笠翁畫傳】出

蕙苡　ずゝだま○東國にてずゞごと云。上總にてはちこくといふ

日向葵　ひうがあふひ(1)　丈菊○江戸にてひまはりと云。大和及加賀にてひぐるまと云

裝金牛　からたちばな○京にてからたちばなと云。關東西國共にやぶがうじと云

鳳尾生　はこねうつぎ○武州にてをらんださうと云。加賀にてくろはぎといふ。甲州にてよめがはしと云

海仙花　さつきばな○仙臺にてけたのきといふ。常陸にて山うつぎと云。紀州にてみやまがすみと云。駿州にてあかてうじといふ。越中にてたいほうのきと云。けたのきとは、民俗海蔘の桁にする故に名つくといふ

南天燭　なんてん○上總にてらんてんといふ。【南留別

(1)ひうがあふひ

志】〃【八種畫譜】蘭天竹と云り。からもやまとも「ら」と「な」とは通ふなるべしと有

玉紫　たまむらさき○京にて。むらさきしきみといふ。筑紫にて。こむらさきと云

茶蘼　ときんいばら○畿内にて。ごやをぎと云。江戸にて。ときんばら又。ほたんばなといふ。西國にて。きくいばらと云

案に、花は白牡丹に似て小なる物なり。故にほたんばなといふ歟。又とびろくといへる酒は此花の色に似たりとて、或は酴醾濾或は酴醾綠等の說有。松岡氏「とぶろく」は濁醪の轉語かといへり。【文選】に濁醪「にごりさけ」と訓す。關西にては「どぶろく」と云。關東にては「どぶろく」とも「にごりさけ」共いふ。松岡氏の說によるべきか

郁子　むべ○奥州南部にて。木まんちうと云。　或說に、是は【本艸】に載る木蓮の實也。秋に至りて熟し、味ひ甘し。小兒好んで食ふ。江州高嶋郡奥ノ島横兵衞といふもの、毎年十一月朔日、　禁中ニ献ス。　文武天皇のころより今に絶ずといふ。土人此葉を採り煎して癰腫を洗ふ、能崩れずして平癒すといふと見えたり。

天仙花　さるのしり○勢州にて。かきのほゝづきと云。駿州にて。さるがきといふ。或說に此樹花なくして實を結ぶ。うどんけとするも、天仙花をさす也と有。今按に「うどんけ」と稱するは、稀に花さく木をすべて呼にやあらん。無花果【本艸釋名】に「うどんけ」と有。又芭蕉の花をもいふ也。又天仙花未詳

合子草　よめのごき○京にて。ひめうりと云。西國にて。よめのごきと云。東國にて。すゞめのうりといふ。安房にて。きんぶんしきといふ

堅香子　かたかご（かたかご　古名也。今「かたくり」と云）○奥州南部にて。かたくりと云。江戸にて。かたくり又うばゆり又ぶんだいゆり(1)と云。京にて。はつゆりと云。野州日光山にて。ごんべいるといふ。　松井氏ノ曰、奥州南部に「かたくり」と云草有。其形百合に似たり。花も「ゆり」に似て正月頃紫色の花さく。其根をとりて葛の如く水飛して、ねり餅となして食ふ。【萬葉】及【新撰六帖】に詠ずる所の「堅香子」といふ物なりとぞ

万葉〃ものゝふのやそのいもらかくみまかふ寺井のゝへのかたかこの花

六帖〃ものゝふのやそをとめらかふみまとむ寺井のゝへのかたかしの花

辛夷　こぶし○奥ノ南部にて。ひきざくらといふ（一名木筆又迎春花といふ）

笑靨花　こゞめさくら○江戸にて。こゞめさくらと云。加賀にて。こめやなぎ、畿内及四國にて。こゞめばな又すゞかけ又ゆきやなぎと云

真曲集〃それはきぬこれは木の根にこほれけり粉米の花の風にくたけて

雪毬花　こでまり○奥州津輕にて。しつがけといふ

八手木　やつでのき○上總にて。うしあふぎと云。（八手木は和品也）

蓴艸　しきみ○遠江にて。かうしば又かうのきと云。因幡にて。はなの木と云。江戸にてしきみの名は勿論たゞ花とばかりもよぶ也。是は「たてばな」の上略なるへし。貝原翁のいはく、樒とはあしき實といふこゝろ也。或人しきみの實毒にあらずといへり。余考るに毒有。誤て食ふべからず。又六月廿四日京師の男女愛宕に詣て樒を求めて下向する事あり。しきみが原名所なり。曾根好忠の歌に

〃あたこ山しきみか原に雪つもり花つむ人の跡たにもなし

木槿　むくげ○東國にて。はちすと云。京江戸共に。むくけと云。常陸及上總下總にて。きばち又。もつきといふ（もつきんの下略也）九州にて。ほてんくわと云。奥州にて。かきつばき又きばちと云。南部にては。きばちすと云（これ和名なり）【萬葉】に〃あさかほは朝露をふてさくといへと夕かけにこそ咲まさりけれ。と詠せし朝顏は槿花ならんか。【和名鈔】に牽牛花「あさかほ」と訓す。【古今物ノ名】けにごしと詠るは、今云あさがほなり。同名異物也

曼陀羅花　まんだらけ○江戸にて。てうせんあさがほと云。總州にて。木あさがほと云。還江にて。てうせんたばこといふ

五味　さねかづら○大坂にて。びじんさうといふ。東國にて。びなんかづらと云。出雲にて。とろゝかづらと云。伊勢白子にて。くつばと云。土佐にて。ふのりかづらといふ。又さねかづらの實、則藥物の五味子也。相州底倉邊にて。五九の伊と云

羅藝　さるとりうばら　さるとりの花○近江及讃岐にて。からたちと云。伊勢にて。かんたちと云。備後にて。ぼらくひと云，佐渡にて。ないばらと云。筑紫にて。かめいばらといふ。上總にて。かごばらといふ。越後にて。さるかきばらといふ

俗に倭山歸來とする物是なり。西國にて異名。五郎四郎柴と云。この葉をもつて小麥餅を包む。其餅を五郎四郎といふ故に此名あり

〽夕かほに鏡みせはや五郎四郎　支考

山茶科　れうぶ（はたつもり・はたつもり、ともに古名なり）○畿内及美濃尾張にて。りやうぶといふ。遠州にて。ぎやうぶといふ。播磨にて。れうほといふ

今按に、【救荒本艸】に山茶科、和名リヤウブとある是也。山民葉を採りて蒸て食のたすけとなす物也

〽里人や若葉つむらんはたつもりみやまも今は春めきにけり

柾　まさき○武州にて。まさきといひ又玉つばきと云。上總にて。したはれと云。西國にて。くろぎと云（薪のくろきにはあらす）　案に、西國にて「玉つばき」と稱する物は柾にてはなし。自玉椿にて別種也。【後拾遺】に式部大輔資業の歌に

〽君か代は白玉椿やちよとも何にかそへんかきりなけれは

とよめる是なり

合歡木　ねふりのき(1)○京にて。ねふりのき。中國及四國にて。ねぶのき、西國にて。かうくわんぼく、近江及越後にて。かうかのき、關東にて。ねぶたの木と云。周防にて。ひぐらし、美作にて。かうかいと云。【萬葉】に ねぶ又かをか共詠り

吉利子樹　うぐひすのき○江戸にて。うぐひすと云。京にて。うすの木と云。伊賀にて。こしきぐみ(2)と云。奥ゝ津輕にて。しだみといふ。　木は二三尺に及ぶ小木にて正月小花ひらく。三四月實熟す。赤くして中くほみ形臼に似たり。小兒好んで食ふ。葉はつゝじの如し。秋に至て紅葉す。立花の下草につかふ物也。【救荒本草】に一名急麝子。和名ウグヒと見えたり

蚊子木　ひよん○西國にて。さるびやうと云。土佐にて。さるぶゑといふ。尾州にて。きひよんと云。　今按に、土佐の國にて此木を「ゆしの木」と云。又俗に「ゆすの木」ともいふ。其木より生ふる虫の巣也。中より出るむしを尾州にて「いんのこ」といふ。此國にてひよんといふ時は瓢の義にてひさご也。又駿州にては祭禮の笛にして吹在所有。又胡椒壺とし、或は瓢簞にかゆるゆへに「ひよん」とよぶとなり

樣實　どんぐり○信州にて。ぢだんぐりと云。又どんぐりの蔕を江戸にて。よめのごきといふ。伊勢にて。こめのごきといふ。越後にて。ならがまと云。上野にて。よめのごうしと云。　今按に、「はゝそ」と云「つるばみ」といふは古名なり。今。くぬぎ(1)又。こなら又。いしならなどいふ。西國にては。ならこうといふ。東國にて。こならと云。越前にて。ほうさといふ。どんぐりは則くぬぎ(2)の實なり。池田炭は此木をもつてやく。攝州一倉といふ所にてやくといへとも池田炭と稱す

(1) ねぶりのき
(2) こじきぐみ
(1) くぬぎ
(2) くぬぎ

小梅　こむめ○江戸にて。こむめといふ。關西及近江にて。庭むめと云（これ梅の品類なり）

八朔梅　はつさくばい○關東の稱號なり。西國にて。かんかうばいといふ

寒紅梅　かんかうばい○關東にて稱し呼。西國にては。滝香山といふ

水楊　かはやなぎ○京都にて。ゑのころやなぎと云。江戸にて。さるやなぎといふ

白楊　はこやなぎ○京師の稱也。筑紫にて。いぬやなぎといふ。　牙枝にけづり、又扇の箱となす木也

接骨木　にはとこ○上總にて。くさじきといふ。上野にて。はなの木と云。南部にて。こぶの木といふ

楠木　ぬるでのき○尾張及上總にて。ののでの木と云。上野及信濃にて。をつかどのきと云。陸奥及越前相模にて。かつの木と云（是は勝軍木といふによるの名なるへし。なを說有）奥ゝ津輕にて。ごまぎと云（天台・眞言宗等の僧徒護摩を修行するに此木を用ゆ。故に名つく）

楠　たふのき和名たものき○山城にて。たつの木といふ。長門にて。こがいのきと云。西國にて。つゞの木と云。伊豫にて。はながと云。土佐にて。あぶらぬすびとのきといふ。又。あさだの木とも云。上總にてしほだまといふ。伊豆にて。くろだまと云

案に、木立葉の形略肉桂に似たり。たゝ肉桂には葉に筋

有。此木には筋なし。故にやぶ肉桂とも云

山椒　さんせう○薫もなく、味も辛くなき物を、丹波にて。ひんせうと云

枸橘　からたち○西國にて。げず(1)といふ

樗　あづさ○山城にて。あかめがしはと云。攝州にて。ごさいばといふ

「ごさいば」といふは、朝廷の御祭禮に用らるゝ和名なり。中華にはこの木に書を刻み、又弓をつくる。故に梓弓ノ名有。一名木王

(1) げず

(2) 赤人か

椿　はりのき○東國にて。はんのきと云。奥ノ南部にて。やぢはといふ　○はんの木の實を、尾張にて。山だんごと云（染色につかふものなり）

枸骨　ひゝらぎ○上總にて。ねづみさしと云

釣樟　くろもじ○越前にて。ねそと云。信濃にて。ぢしやといふ

今按に、釣樟、花は黄色にして、實は黑し。香氣有。花はつほみたる儘にて散る。故に信州にて童謡に「つほやぢしやどの咲かで散る」といふ。「つほや」とは「可愛や」といふ事なり。再案に、越前國にて「くろもじ」の事を「ねそ」と名つくる說非也。「ねそ」とは一木をさしていふにはあらず。くろもじの條にても、又外の木のずはへにても山人伐てとり、たとへは橇の輪、或は薪炭俵或は垣など結ぶにも、繩の如く用ゆる物を、惣名「ねそ」と云。これは「ねりそ」の略語也。古歌にも

〃秋の野に萩かるおのこなはをなみねるやねりそのくだけてそおもふ

とよめり。なはをなみとは、繩なきといへる心也。山邊赤人(2)が、わかの浦にしほみちくれはかたをなみと詠せしも、潟なきと云事にして、片男浪にはあらずと也

李　すもゝ○笑作にて。すむめといふ

柚　ゆ○畿内にて。ゆと云。東國にて。ゆずと云。中國にて。香橙といふ

笋　たけのこ○上總及房州にて。たんこと云

柴　しば○關西及中國陸奥邊にて。しばといふ（柴は物名なり）東國にて。そだといふ（美濃尾張にてはくぬ木にかきりて「そだ」といふ）加賀にて。ほゝと云。越前にて。ほせと云。上野にて。ほやといふ。丹波但馬邊にて。おどろと云。紀州にて。よどろと云（荊棘の轉語か）伊勢にては、葉の付たるを柴といひ、葉なきを。こがらけと云○又木の小枝なる物を關西にて。ほせきれと云。伊勢にて。つまをりと云。坂東にて。かなぎと云【中臣祓】天津金木【文選】以延撞鍾。註小木ノ枝也云云　○畿内にて。わりきと云を、東國にて。まきといふ。能登及加賀陸奥にて。ばいぎと云又ながし木といふ。越中にて。もへしま五郎といふ

(1) 根ごじ

(2) 定源ノ振假名「じやうけん」トアリ

榾　ほた○關西にて。ほたと云。尾張及出雲邊にて。きりかぶと云。伊勢にて。根(1)こじと云。安房にて。ねつかと云。上下總にて。木下といふ。土佐にて。かくいといふ（かぶぐる又はかれぐるの略か）武藏にて。ねつこと云。　按にねつことは根木也。根骨にはあらざる歟

〃川中の根木によころぶすゝみ哉

とありし根木も伐株の事にや。又「よころふ」は横轉なるべし

蕈茸　たけきのこ○中國及九州にて。なばといふ。北國又は美濃尾張にて。こけと云。上野下野にて。もたせと云。佐渡にて。みゝといふ○初茸を美濃三河尾張にて。あをはちと云。北國にて。松みゝと云。奥の南部及近江邊にて。あいずりと云。因幡にて。あいたけと云。中國九州ともに。松なばといふ○紅茸を九州にて。じこうばうと云　○檜茸を相州塔の澤にて。定源坊(2)と云○鼠茸を江東にて。なめすゝきと云。筑紫にて。水たゝきといふ

松毬　まつかさ　まつふぐり○畿内近邊にて。ちゝりといふ

〃紫のふどしに似たり藤のはな松のふぐりを咲てつゝめば　貞德

物類稱呼　卷之三　終

物類稱呼卷之四

器用

注連　しめ○肥前の長崎にて。かんじやうと云。中國にもかく稱する所多し

屋臺　やたい○東國にて。やたいと云。大坂及西國にて。だんじりと云。土佐にて。はなだいと云。江戸の祭禮には、一萬度大麻の形を制て萬度と云。又はなをかざる故花だしとも云。又だしと云物有。祇園祭の鉾のたぐひなり

今按に、かんじやうとは勸請といふことにや。神をいはひまつる心だてなるべし。又神繩(1)なり共云

紙手　かうで○江戸にて。をしかみと云。大坂及泉州堺にて。かうでと云。中國及土佐にて。こうじやうと云。今按に、をしかみは、上に口有と云意にて、口上と名付るにや。又土佐にては「幸定」と書よし也

稻扱　いなこき○京江戸共に。いねこきと云。畿内にて。ごけたをしと異名。越後にて。ごけなかせと云。上野信濃にて。せんだごきと云。下野佐野にて。からはしと云。奥の津輕にて。せんこきと云。遠江にて。かなこばし、江戸田舍にて。かなごきと云。西國にて。せんばごきと云。今按に、畿内にて後家たをしと異名せしは、昔は篠竹を三寸斗に切て、鳥の觜の如く制て、掌の中にをさめて、いねをこきし也。近世鐵をもて制たる便利なる物有て孀婆の業を失ひしに似たり。よつて名とす。此說『和漢三才圖會』に見えたり

連枷　からさほ（穀をうつの具也）○京にて。まひぎねと云。東國にて。ぐるりと云。越後にて。ふりばいと云。中國及四國にて。からさほと云。肥後にて。ぶりこと云

碓　からうす○江戸にて云。からうすは、是畿内にて云。ふみうす也。江戸の鄙にて云。ぢがらうす也。今略して「ぢがら」と云。又穀する臼に農家にて云「からうす」「すりうす」の二品有。爰に略す

枴　あふこ○（物をになふ木なり。兩はしとがりたるをいふ）○中國及西國にて。あふこと云。長崎にて。らことといふ。四國にて。さすといふ　○江戸にて。てんびんぼう（物をになふ木にて兩の端丸く、あふこと形少しかはれり）京にて。たごのぼうと云。越後にて。かたけぼうと云。奥の仙臺にて。かつぎぼうと云。遠州にて。になひぼうと云。大坂及堺或は四國にて。あふこと云。九州にて。ろくしやくぼうと云。肥後にて。もつこぼうと云。古今俳諧歌に

〽人こふることをおもにになひもてあふこなきこそわびしかりけれ

是は「あふこ」を「逢期」とよみし歌也

篩　ふるひ○常陸にて。ほうろぎと云

案山子　かゝし（わら人形なり）○西國にて。鳥をどし、加賀にて。がんをどし、肥前にて。そふづと云（關西より北越邊「かゞし」といふ。關東にて「かゝし」とすみていふ）又添水(1)を、肥前にて。うさぎつゞみ。河内にてそふづがらうす、上野にて。みづなるこ、信濃にて。しかつゞみ、加賀にて。はじきといふ。貞德翁の云、そふづは田へ水を添る具にて、板にて拵たる物也。「そふ」は添也。「づ」は水也。季吟翁の云、「そふづ」は水邊にしかけて、水の力を添て音を出す鹿をどしなり。續古今

〽山田もる僧都の身こそかなしけれ秋果ぬれは問ふ人もなし　玄賓

今按に、加賀にて。はじきと云は【藝文類聚】にいはゆる彈歌。其制異なるやうにおもはるゝ也。又備中國湯川寺の玄賓僧都の故事、又僧都添水の論は歌書の注解【雜事筆海】【和字正濫】等の諸說、考合せて分辨有。又國々にて其形異なる品數多しといへとも事繁けれはこゝに略す

篩　ちきり（機の具なり）○關西にて。ちきり、關東にて。をまきと云

きぬまき（きぬをまく物也）○關西にてきぬまき、紀州にて。ちまき、東國にて。まへがらまき、下總にて。まへがらみと云

機蹻　まねき○京江戸ともに。まねき、遠江にて。いのとゝ云

かさり（梭みちをわくる糸也）○關西にて。かさり、武州にて。かけいと、紀州にて。あそび、下總にて。あやいと、西國にてあぜいとゝ云

あぜ竹（升(3)をわくる竹なり）○關西にて。あぜたけと云を、東國にて。あやだけと云

くさ（經をまく隔に用ゆる物也）○關西にて。くさと云物を、關東にて。はたくさ、西國にて。しとりといふ

杼　ひ梭同、筬○今按に、二品ともに諸國の通稱か。歌に

(1)「又神繩」なり共云「一ノ七字無シ」をしがみ

(2)

(1)添水ノ振假名「そふす」ト アリ

(2)そふつ

(3)あやたけ

は梭をなぐるまなどゝ、光陰のうつりやすきを詠格とす。又李白之烏夜啼ノ詩ニ機ー中織レ錦ヲ秦ー川女碧ー紗如レ烟ノ隔テレ窗語停梭帳ー然憶ニ遠人ー なども作れり。又世俗互に面を和して内心の和せざる人を「ひをする」と云諺有。是は杼と箴とすれあふてひとつ所に寄らぬにたとへたるなるべし

尺　ものさしたかばかり○武州河越にて。しやく共云。常陸にて。しやくごと云

綿筒　わたあめ　○京大坂にて。ぢんき、西國にて。けいまき又。しのまき、土佐にて。へちま又。しのまき、尾張にて。あめ、越後にて。しの、武藏にて。しのまき、遠江及安房上總常陸にて。よりこ又ねぢこ、豐前豐後にて。まるわたと云

終樣　さいづち○畿内にて。ばんじやうつち、西國及四國にて。さいこづち、東國にて。さいづちと云。又鉄槌を奥州にて。かなさいづちと云

鉋　てをの○關東にて。てうな、大坂にて。ちよんのと云

鋸　のこぎり○畿内及山陽道にて。のこと云。上州にて。のこずり、上總安房にて。のふぎりと云。これはいにしへ、のほぎりといひし名の轉したる也

算盤　そろばん○薩摩にて。ろくろと云

杠秤　ちぎ○關西にて。ちぎと云。越後にて。きんれうといふ。關東にて。ちぎりといふ

錢　ぜに○畿内にて表の方を。もじと云。東國にて。かたと云。同く裏のかたを畿内にて。ぬめと云。東國にて。なめと云。又錢緡の事を日向にて。つらぬきと云。東國にてつらぬきと云は、出錢の事なり。尾張にて各出と云も此たぐひならん。伊勢にて集錢と云

箸　いかき○畿内及奥州にて。いかき、江戸にて。さゞる、西國及出雲石見加賀越前越後にて。せうけと云。武州岩附邊にて。せうぎ、安藝にて。したみ、丹波丹後にて。いどこ、遠江にて。ゆかけ、越後信濃上野にて。ほてといふ。又江戸にて。かめのこざるを、畿内にて。どんがめいかき、藝州にて。どうがめしたみ、下野にて。ひらざると云。又江戸にて。御前籠といふ物を、備前にて。しまふぐ又小き物を。こしをりと云。又關西にて。めかごと云を、東國にて。めかいと云。或。ふご。びく又。こめあけざる、又其大ィなるを。かたまきと云。其外品類盡しかたし。今爰に略す

椀　わん（飯椀・汁椀・菜椀等の品類あり）○西國及北國にて。ごきと云。東國中國四國にて日用の飯器を。じやうぎと云。相模安房上總下總武藏邊に至るまて。かうだいと云（江戸は勿論其國々々の驛舍にてはかうだいとは稱せず。わんとのみよぶ也）

今按に、「ごき」と云事卑賤の詞にはあらざるべし。【續日本紀】に御器膳と有。又「ぢやうぎ」と云へるは則常器也。西國にては「ぢやうぎ膳」「ぢやうぎ椀」「ぢやうぎ箸」など丶云。又「かうだい」といふは、今の椀の制とは少たがへり。今の世に椀といふ物は、いにしへ引入合子などいひし也。【壒囊抄】に見えたり【平家物語】に木曾義仲精進がうしの詞あり。【職人盡歌合】に「いなばがうし」などの詞あれば因幡の産を上品とせしにや、今も年の初に門松につくる「藁合子」といふ物有。古き詞なり。○大峰の圖司のわたりにて人々俳諧連歌せしに、いとせばき家なりければ、ゆふけもる器物こしらへる音、席に聞えけれは

〃大峰の圖司のあたりのちかきにやなりわたるらんごきもぜんきも　季吟

平（ひらざら）○下總及奥州にて。ひらきといふ

皿○常陸及下野にて。かにことといふ

(1) のぞきちく

坪○肥前佐賀にて。のぞきと云。箸○豫州にて。をてもと丶云。又食盤を俗に膳といふ。然とも膳は飯食を兼備ふるの物名也。又俗に折敷は食机にていにしへ食を「をし」といひし也

猪口　ちよく○薩州にて。のぞきと云。江戸にても底深きを。のぞきちよくと云。又福建及朝鮮の方言に鐘を呼て「ちよく」と云

盆　ぼん○中國にて。ほにといふ（歌に蘭を「らに」紫苑を「しをに」といふごとく、「に」は「ね」也）

俎板　まないた○駿河及上總にて。きりばんと云。下總或は奥の津輕にて。さいばんと云。信濃にて。まなべいたと云。まなは卽魚なり。いにしへ魚菜を「な」と云けり。後「菜」を「な」といひて「魚」を「まな」といひかへたり

摺鉢　すりばち○江戸にて。すりばち。大坂にて。すりこばち、山陽道及四國にて。かゞつ、西國にて。すりこのばち共いふ。東國の女言に。しらぢと云。上總及出羽にて。いせばち、奥州にて。らいばん（擂盆か）同三ノ戸にて。かはらけばちといふ

擂粉木　すりこぎ○江戸にて。すりこぎ、五畿内及西國

中國四國にて。れんぎと云。出雲にて。めぐり、越後にて。めぐり又まはしぎとも云。出羽にて。めぐりこぎ、津輕にて。ますぎと云

焙昇　じうのう○京にて。をきかき、江戸大坂共に。じふのう、北陸道及因幡伯耆或は土佐にて。せんばと云。奥州南部にて。ひかきと云。今按、遞火「ひかき」と訓す。江戸にて臺じふのうと云物也。炭鉤、是江戸にて云じうのう也

【合類節用】に十王は冥官の像の手の形に似たる故十王と云々

鐵灸　てつきう○上總及信濃越後にて。てつきと云。仙臺にて。ごとくといふ

飯櫃　めしびつ（めしつぎ）○京にて。いご、上總下總常陸これにをなじ。安房にて。あまご、伊勢にて。さうないといふ

煙筒　きせる○江戸にて。きせる、京にて。きせろ、伊勢にて。きせりと云。是皆五音相通にて如此の類餘多あり。たとは江戸にて歌骨牌といふ物を、京にて「うたがりた」と云。ならべたる形刈田に似て、殊に秋の田のかりほの御製歌卷

(1) 頭ノ振假名「とう」トアリ

し物を、後かまといひ、はがまなどいふ。安房の國の浦里にて「かなへむら」といふ所あり。大いなる釜のふた、荒波に打あげられて、今なを有とかや。往古かなへむらとなづけたる成べし。又古竈と稱せしは今竈といふ。然とも塩竈・炭かまなどの名遺れり

鍋　なべ○江戸にて。くちなべ といふを、遠江及上總下總にて。せんばと云（四國にては銅にて制たるを「せんば」といふ）泉州にて。てとりなべと云

和泉國堺の南に一路菴といふ有。一路上人住給ひし舊跡とて今なを存す。上人は一休禪師同時の僧也。世に在せし頃、一休此菴室に來りて、いかなるか是一路と問ひ玉ひしかば、一路言下に、萬事皆休すへしいかんぞ一休、と答へられしと也。草菴もとより余財なし。手取鍋ひとつ有けるを、窓前に掛置て食を乞ふ。道ゆく人其德をしたひて、米一穀菜一瓜のたぐひを施をとりて其日々々の糧とす。一首の歌あり

「てとりめよをのれが口のさしでたぞさふすいたくと人にかたるな

○なべのふたを房州にて。かさしといふ

(2) ひさご

(3) とそ

(3) 焙爐ノ振假名「はいろ」トアリ

頭に置侍れは、刈田ははなはだ雅名とやいはん○火皿。京にていふ。江戸にて。がんくび、伊勢にては。ぶくといふ○斑竹は羅宇國より出す故にその名あり。羅宇國は南天竺の内、暹羅の西隣國也。又きせるの脂を大坂にては。ずと云

煙盒　たばこいれ○薩摩國の農夫。のんこつと云。かくの如の形に桐をもて制たる物也。提銚卵又は提たはこ入なといふ物に形は殊也といへともをなじ類也。又提たばこ入を、越後にては。やらうと云

今按に、「やらう」とは藥籠の略語なるべし。世に印籠と稱する物は、むかし印石・印肉を入たる器にて、竹をもて小く籠を制、腰にたれたるものなりしが、今藥を貯へる具となれり。「やらう」と云も此たぐひにてやあらん

釜　かま○江戸にて稱するかま　如此を、畿内及西國四國俱に。はがまといふ（關西にては、はがまの小なるものにて茶を煎して「茶がま」といふ）又江戸にて云ちやがま　如此を、畿内及西國にて。くわんすと云。東國にて「くはんす」とよぶものは、はのなき物につるをかけたるをいふ。四國にて「あられくわんす」とよぶたぐひ也

今按に、上世かなへといひし、あし鼎。まる鼎などいひ

杓　ひしやく○關西にて。しやくといふ。關東にて。ひしやくと云。もとひさご(1)にてつくりたり。よつていにしへは「ひさご」といひし也。瓠をば生ひさご(2)といひし也。「ひさご」轉して「ひしやく」となれりとそ

茶碗　ちやわん○北國及中國西國四國或は常陸にて。てんもくと云。肥前ノ鍋嶋奥州二本松にて。いしごきといふ。信州筑摩邊にて。けんぐりと云。此邊の山民は隣家へ行かふに、茶碗を袂に入行て其うつわにて湯茶を飲と也。其ゆへをしらず

鍪　いりなべ○京にて。いりごら、大和及東國にて。ほうろく、下總にて。いりがら、常陸にて。ちやほうじといふ

今按に、いりなべ俗に「いりがはら」と云。いりごら、いりがら又こうらなといふは共に、いりがはらの轉語なるべし。又ほうろくは「ほいろ」の器といふ意、是鍪の屬也【東雅】【下學集】を引て焙爐(3)の字、訓て「ほいろ」と云、ほいろは火色なり。其火を得て、色の變するをいふと見えたり。又「いりがはら」は、土のやきなべといひて、今の制とは形かはりたる物也

湯鑵　やくはん○大坂及中國四國にて。ちやびんと云。

(1) 芭蕉ノ振假名「はせう」アリ
(2) 「晉ヲ」ノ字無シ

遠江にて。とうびんと云。信濃にて。てどりと云。　土州の客予に語ていはく、我故郷にやつくわんと云有。ちやびんと云物よりは少大きくして口短を云。ちやびんと云は、形丸らかにして口長きを云とぞ。江戸にて其かたちいろ〳〵有といへともすべてやくはんと云。又茶びんは其制別物なり

土瓶　どびん○薩摩にて。ちよかと云。同國ちよか村にてこれをやく。ちよかはもと琉球國の地名なり。其所の人薩州に來りてはしめて制るゆへにちよかと名づく。又常陸及出雲或は四國にて「どひん」と「ひ」の字を清て唱ふ。出雲常陸などにては「どびん」となづくるは牛馬の睾丸也。四國にては人の睾丸の大ィなるをいふとぞ。武藏の國にて春のたはふれにすなる寶曳の親縄といふ物のしるしにつくる物を「胴ぶぐり」又「どつびん」などゝいふも、此意なるべし

提燈　てうちん○仙臺にて。ひぶくろ、常陸にて。をつべしあんどんともいふ。日向にて。へことといふ

行灯　あんどん○加賀にて。しほんばりといふ○江戸にていふ。丸あんどんを、加賀にて。まはしあんどんと云。津國にて。ゑんちやんどんと云。　是は「ゑんしうあんどん」の誤也。小堀遠州侯の物數寄にて制りはしめ給ひしと也

江戸にて。はちけんと云もの有。竹をもて丸く輪を作り、菅笠の如くたてに骨を組て紙にて張、灯を點じて、うつばりなどにかくる物也。加賀にて。かさあんどん、越前にて。つりあんどん又はつぼう又につぼんといふ。津國にても。はつぼう、武藏にて。さんとく共云。○灯心を。とうしみと云時は和訓和名と成。縱(1)芭蕉(2)を。はせを、文を。ふみ、紫苑をしをにと云類也。是晉ィ和語に用ィ例也

灯檠　かきたてぎ（とうしんをさえ）○備後福山にて。へけ〳〵と云。筑後國久留目にて。さんとくといふ。越前にて。かきたてぐる、越後にて。かんだしといふ

發燭　つけぎゆわうぎ○東國にて。つけぎといふ。關西にて。ゆわうと云。越後にて。つけだけと云。土佐にて。つけぎと云。又。つけだきと云

今按に、關西にて「ゆわう」といふは「ゆわうぎ」の下略成へし。又外より重の物にもあれ、何にもあれ、贈り來る器の内へうつりに紙或はつけ木を入て返す事有。硫黄又いわう共いひ侍れは、祝ふといえる心にて、つけぎを入る事ならん。又東國にて「うつり」といへる物を、土佐の國なとにては其器に入て返ス物の名をは。とめといふ。又越後にて「つけ竹」といふはむかしは竹を薄くへぎて、今のつけぎの如く用ひたるとぞ。土佐のつけだき、つけだけ成へし

(1) かけさほ

衣架　かけさほ(1)（俗稱）○上野にて。みせさほ、下總猿嶋郡にてみぞゞと云。筑紫にて。ならしと云。　今按に、みぞゞは御衣なり。「そ」は「さほ」の反「へ」なれば、「みぞゞ」と稱するは古き詞なるべし。疑らくは、平ノ將門の時代の遺風にてやあらんか。又世に衣桁を「みぞかけ」といふも同し心也。【杜甫ノ詩】翡翠鳴ク衣桁ニと有は是衣を曝す竿なり

歩障　ついたて○豐洲にて。ざちうと云（肥前にて「つきたて」といふは「ついたて」といふに同し）

剃刀　かみそり○西國にて。そりと云。奥州白河にて。すりといふ（婦女の用ゆる剃刀の小なるものを。けたれと云は、畿内東武ともに同し）

櫛　かうがい○參河及遠州にて。ほせと云

櫛　くし○京大坂にて。たいまいのくしといふを、江戸にて「べつかうのくし」と云

蟬髩挿　つとさし○畿内にて。つとさし、東國にて。たほさしといふ（關西にて云髩のつとを東國にて「たほ」といふ）中國西國共に。つとはね、土州にて。つとさし又つとばりと云。加賀にてつとかうがいと云

罟　てんのあみ（小鳥を捕あみ也）○關西四國にて。てんのあみと云。京にては。かすみといふ。東國にて。ひるてんと云

竹簍　たつべ（魚をとる具也）近江にて。たつめといふ。河内にて。ぢんどうといふ。四國にて。うゑと云。武州にて。どうと云。　江戸の北いなかにて「どう」と云物に似て、少し別なる物を「ごしうけ」と云。其形椀をふせたるに似たり。いにしへ椀を「がうし」といひけれは盒子魚器とやいひつらん。今は詞ちゞみて「ごしうけ」とよぶ也

人偶　にんぎやう　てくゞつ○京江戸共に。にんぎやうと云。豐後にて。でこんぼうと云。中國にて。できのぼうと云。四國にて。でこ又でく共云。豐前及武藏相模安房上總下總にても。でくのぼうと云（これいにしへ「でぐるぼう」と云し詞の變したる也。「京大坂のいなかにても「でこ」といふ）又京大坂にていふ。そろまと云人形は、東國にて。のろまと

いふ物也。又京にて。つくね人形といふ物を、江戸にて。ねりにんぎやうと云。又起上小法師といふ物を、勢州久居にて。うてかへりこほしといふ(この所にてはかたなの鞘のかへり角といふものを「うてかへりづの」と云。其外もこの類にてをして知るべし)

紙蔦　いかのぼり○畿内にて。いかと云。關東にて。たこといふ。西國にて。たつ又ふうりうと云。唐津にては。たこと云。長崎にて。はたと云。上野及信州にて。たかといふ。越路にて。いか又。いかごといふ。伊勢にて。はたと云。奥州にて。てんぐばたと云。土州にて。たこと云(上かたにて、いかをのぼすといふ。江戸にてたこをあくるといふ。東海道にてたこをのぼすといふ。相州にてたこをながすと云)

穀匣　こめびつ○東國にて。こめびつ、京にて。からとと云。大坂及堺にて。けぶつ、奥州仙臺にて。らうまいびつ粮米、津輕にて。けしねびつと云(東國西國ともに雜穀を「けしね」と云。余國はしらす)

桶　をけ○上下總州及武藏にて。こがといふ(江戸にて四斗樽、京にて四斗をけと云を、總州にて四斗こがといふ。すえふろをけを、すえふろこがなと丶いふ)常陸にて。とうご、豐州及肥前佐賀にて。かいといふ。長崎にて。そうと云(大なるを「ふといそう」といひ、小なる物を「ほそいそう」と云)畿内にて。たご搗桶といふを、江戸にて。になひといふ(これになひをけの略也。又になふとは、人ふたりにてもつを云。かつくと云、かたぐると云は意遠へり。又「たご」とはをけの惣稱也。上かたにては、なにたこかたごといふ。たごばかりいふ時は、畿内西國共に水桶也、東國また豐後にては「たご」と云は糞器をいふ也。【多識】尿桶と有この事にや)京にて。かたてをけと云を、江戸にては。かたてを丶け又。さるほう又。くみだしとも云。越前にて。かいみづをけと云。加賀にて。かいけ、上野にて。ひづみと云(造酒屋にて用ゆるかたてをけの大なるものを、肥前にて。たみをけといふ。)

盥　たらい○奥州南部にて。たいへと云。陸奥にて。せんそくばちと云。因幡にて。はんざうと云。江戸にては匜盤を匜と云。又角だらいといふものは、耳だらいに角の有物也

籠　たが○京にて。かづらと云(工匠を「かづらかけ」と云)畿内近國及九州四國にて。わと云(同桶のわ入といふ)江戸にて。たがといふ(同たがかけと云。田舍にてたがやといふ)

裹　かますかまけ○西國にて。かまきと云。肥前島原にて。ゑなまきと云。唐津にては米穀を入るを「かまき」といひ、錢を入るを「かます」といふ

苞　つと○西國及四國ともに。すぼといふ

木鉢　きばち○江戸にてきばち、京にて。ひきばち、越後にて。ふくばち、土佐にて。きぢばちといふ

杵　きね○出羽にてうちぎといふ。下總にて。をといふ○腰の細き杵を關西にて。かちぎねと云(かちは搗也。搗栗と云もをなしこゝろ也)東國にて。てぎねといふ。上總にて。きゞといふ(婚禮に用る手杵に、鶴龜やうのもやうを粉こを以て畫くことあり)

梯　はしご○伊勢の長嶋にて。ほうじうといふ又。ごすけといふ。

今按に、東海道五十三次の内に、桑名の渉より言語音聲格別に改りかはるよし也。將五十三驛とは【山谷詩】鬼門關外莫道遠五十三驛是皇州と有詩によつて定られしと云(1)

甄　とくり○下總にて。ぼちといふ。この國にて。酢ぼち・酒ぼちなと丶云○江戸にて。ゑだる(とくりの家也)といふを、京及北越にて。たじといふ○江戸にて云ぬりだるを、遠江にて。やなと云。又此國にて酒を嗜む人の、女子を生む時は其名を「やな」とつくる人多し(柳樽の略語なるへし)

漏斗　じやうご(酒を器にうつす具なり)○上野にて。すひかん又。すひはくなど丶いふ(別に米穀を俵にいる丶竹器に同名あり)

屐　あしだ○關西及西國にて。ぼくり又。ぶくりといふ。中國にて。ぼくり又。ぶくりと云物は、江戸にて云けたの事也

草履　ざうり○江戸にて。こんがう又。のりものざうり(うらおもて共に藺の穀をもつて織たる物也)畿内西國にて。こんがうと云(乘物ざうりの名はなし)○江戸にていふ。かはざうり(竹の皮にてつくりたる物)を九州にて。うらなしと云。東國にて。がづざうりと云○江戸にて。なかぬきざうりを、京にて。すべざうりと云(江戸にてわらのしべといふ物を、京大坂にてわらすべといふ)因幡にて。わらみござうりと云○江戸にていふ。わらざうりを、奥州仙臺に

(1) と云ノ下ニ「說あり」トアリ
(2) こんがう
(3) なかぬきざうり

て。ちりさうりと云。○江戸にて云。ごんずわらぢを、關西にて。あとづけさうりといふ。九州にて。むしやわらぢ。又。むしやさうりといふ（小兒のはく物也）　今按に驕靴和名たちはめといふ物なり。地下にて用るは制異といへとも、こんがうとよぶ。昔比叡山安然僧正貧窮にして書を求る力なし。よつて金剛法器也を手に持給ひて草履を制しより「こんがうざうり」と世にいひならはしたるとなり

樏　かんじき　○畿内にて。なんばといふ。　今按に、「かじき」はくろもじの木をたはめて輪となし、繩にてあみ、革の紐をつけ、大サ壹尺ばかりあるもの也。北越及奥羽などにて雪沓をはき、かじきを結ひ付て、道路を踏かたむるに用ゆ。畿内にて「なんば」といふは、深田の泥の上を行ものにて、是則かじき也。西行家集に

〽あらち山さかしく下る谷もなくかじきの道をつくるしら雪

【太平記】曰、かじきを踏ざる故、雪中に四五尺落入たりと云々【史夏記】山行乘(1)樏と有。是山上を行の具也。樏は又深き泥を行もの也。又越前にて山の雪崩れて落る時は、山人聲を發して「跡くろもじに端ナはぜの木、あめうしの革で八赤延」といひ〳〵、其處を逃去るとなり。かく呼ぶ時は、其難を遁るゝと云つたへたりとかや。「跡くろもじ」とはかじきの輪をいひ「はなはぜの木」とは櫨の木なるべし。皇紐といふ物を、はぢの木にてつくりたらんか「黄牛の革」とは紐の事「八ひろばる」は繩八ひろをもつてあみたりといふ事にてやあらん。倘可尋　○雪車といふ物を越前にて。こいすき又。こすきともいふ。かじきとは別物なり。そりたる木にて制り、雪の上をすべらかし行ものと見へたり。【堀川治郎百首】

〽初深雪降にけらしなあらち山こしの旅人そりにのるまて

供饗　くぎやう○江戸及び四國にて。けそくといふ。東國にて。ろくがうと云。西國にて。ろくごう又ごうと云。近江にて。くけと云。越前にて。くぎやうと云。　加賀にて。をけそくだいと云（供したる品ををけそくといふ）今按に、ろくごうと云はおくぎやうの訛か(2)

財布　さいふ○甲州及上野上總邊にて。ぎんきちといふ。これ武田信玄陣中にて陳吉と名づけ給ひしといひつたふ

(1) 乘ノ振假名「のる」ノ二字無シ

(2) の訛訛歟

巾着　きんちやく○豐州にて。ふうづうと云。長崎にて。だらと云。津輕にて。だらこと云

衣　食

羽織　はをり○安房國にて。はごりと云。阿波にて。どうぶくと云。　今按に、姓氏に錦織とよめり。羽織を「はごり」といへるもおなじ心歟。又道服といふ物は、もとより道子の服にして、其制法有。はをりは又旅道中に便よき服なれは、道服共いふなるべし。同字別物也と古人もいえり

袴　はかま○信濃國木曾路にて。じんぎぶくろ又いんぎんぶくろともいふ

頭巾　づきん○奥州南部の俗。てつぺんぶくろといふ。江戸にて。桑づきん又。がんだうづきんと云を（强盜東國にて「がんだう」と云）北國にて。ぼうしと云又。をくそづきん。をくづづきんと云。武州秩父にて。ちよつぺいと云（品類多しこゝに略す）

腰帶　こしをび○東國にて。こしをびといふ物を、畿内にて。かゝえをびと云。又東國にて。しごきと云物を、畿内にて。かゝえぼうしと云。肥後にて。てほそといふ（江戸にて「てほそ」といふは「わたぼうし」也。泉州堺にて「こきんわた」といふにをなじ）

繻半　じゆばん○諸國ともにじばんと唱ふ。東國及西國にて。はだぎともいふ。關西にて。はだつけともいふ。越中にて。はだこと云。北國及東奥の所々にて。てゝらといふ

今按に、「てゝら」夏の日農民の業をつとむるに着る物也。單にて丈ケみぢかく紐はありなしにてひら〳〵としたる物也。又「どてら」といふも「てゝら」といふ詞の轉したるなりといへる人も侍れと、今「どてら」と呼物を見るにひとへなる服にはあらず。わたを入たる布子となづくる物也。てゝらといひ、どでら又つゞれなど云。是皆通音也。其制はかはり有て、名は同し心ならんか。又小兒の繻伴を、肥前及土佐にて。らんこといふ。【萬葉集】の歌に

〽たのしみは夕顔たなの下すゝみおとこはてゝらめはふたのして

嚏鼻褌　ふどし○東國にて。ふんどしといふ。西國および中國にて。へこといふ。奥州にて。へこしといふ。常陸にて。てこと云（てこをかうなどいふ「てこ」は「へこ」の轉したるか）畿内及美濃近江にて。まはしといふ。上總にて。

たふさぎといふ。【日本紀】懷鼻褌【萬葉集】

〃わかせこかたふさきにするつふれいしよしの〻川にひをそか〻れる

【和字正濫】ふみもだし、昌郁翁ノ説にふみとほしなど〻有。たふさぎは胯褰の上略也。禮家にははだまきといふ。又相撲を業となすものは「まはし」といふ。其外下をび・はだの帶など〻いふ所有。○二布（女の身に近く腰をふさぐ具也）京にて。きやふといふ。畿内及美濃近江にて。ゆぐといふ。西國にて。ゆのものと云。上總にて。みゝねと云。江戸にて。下をび又ゆもじと云。陸奥にて。こしまきと云。津輕にては。よまきといふ

寢衣　よぎ○奥州にて。よかぶりといふ

雨衣　あまぎぬ和名○江戸にて。もめんがつぱと云。中國四國ともに。あまばをりといふ。肥後にて。じうりんと云。大和にて。じうりがつぱと云。伊勢にて。じうりと云

今按に、じうりといひ、じうりんなど云。是は時雨凌成へし

清水谷實業卿の狂詠に

〃霜月に霜のふるのはことはりやなど十月に十は降らぬそ

中院通茂卿かへし

〃十月にじうはふらぬと誰かいふ時雨はじうとよまぬ物かは

飯　いゝめし○加賀及越中又は武藏の國南の海邊にて。おだいといふ。薩摩にて。だいばんと云。出羽にて。やはらといふ（羽黑山の行者のことば其國にひろまりたるなるべし）○小兒の詞に關西關東共に。まゝといふ。又東國にて。ごゞ共いふ（これは供御なるべし。いせ流の女詞にも「ごゞ」といふ）上總下總の小兒。ばつばといふ（余國にては「たばこ」の事を「ばつば」といふ。總州及常州にて「まゝ」といふは水のことなり）

今按に、飯を「おだい」といふは古き詞也。故に飯を炊く所を諸國通じて「おだい所」といふ。又土佐國幡多郡は西の境也。此所にては女の陰門を「まゝ」と云。專ら少女のをいふとぞ。又往古には飯を「をし」といひし也【古事紀】【日本紀】等に袁須・袁勢など見え侍るは是則食の事なり。今の世に婦人產の時產棚にをし桶といふ物を飾る。「をし桶」は「飯器」をいへり。【徒然草】御產の時甑おとす事は定れることにはあらず。御胞衣とゞこほる時のまじなひ也。（下略）甑【和名】古之岐。飯を炊く器也と有。又應に餌をするを「をしする」といふも同じ意にやあらん○晝食○畿内にて。おこゞといふ。南都にて。けんずいといふ。　今按に、東國の農家にて午未の尅の間に食事爲を。こぢうはんと云。或村老の云、晝食を「こぢうはん」となづくるは、午時半と云意なりとぞ。予おもふに農民は形を勞する事はなはたしければ、日の長きころはふたゝびも食すべし。再びめの晝食なるか故に小晝飯なるへしや。駿河國にて。やうびるいと云は「夕晝飯」の轉語にや。土佐の國にて。こびるまといふ。是におなじ。土州にては晝飯を。ひるまといひ（ひるまゝなり）夜食を。よいと云（夜飯なり）上總下總にてこうだいごろと云は、是は晝飯をいふ（「こうだい」とは汁椀をいふなり）

小豆粥　あづきがゆ○加賀にて。さくらがゆと云。但馬國にて。ざふすいといふ。

世俗わたましに赤豆粥を煮て祝ふこと有。一說に是はもと伊豆の國風にて、三嶋明神の氏子伊豆の豆と三嶋の三を象りて豆三粒入るより、今通じて世上の流例となるといへり。（未詳）　又正月十五日小豆がゆを煮て都鄙家毎に是を食す。【清少納言枕草子】十五日はもちがゆのせくまいる、とかきしも此こと也。をなじ草子に、かゆの木にて女をうつ事を書るも此日なり【狹衣】にも見えたり。今も北國及西國には松の枝、柴などにて男根の形をつくりて女の腰をうては子をうむまじなひとて今もする事也。東國にも聟嫁なとをうつ事有。又今日河内國平岡の神社に卜田祭と云有。御粥殿に大ィなる釜をすへ小豆粥を煮て神供とし、五穀成就の祈念終りて、竹を五寸ばかりに伐て管となしたるを五十四本、それに五穀及色々の種もの五十四品に書分て、釜の中へ投じ、さて一々其管をわりて、粥管の中に入たる多少、或は蘂の加減を見てそれ〳〵に、何の種は十分、何の種は八分など、神主高聲に吉凶をよみ上る事也。近國の農民群參して其卜の善惡を書付置て、神卜に任せて、農事をつとむる事也。これを平岡の御粥といひ卜田祭とも云。又或人曰、粥を目出度ことに用るは、粥祝通音ゆへなりとぞ。又諸國にて此日の粥の初穗をとり置て、十八日の朝これを食す。その糜（やわらかなるかゆ）粥（かたきかゆ）によりて一年の風雨を卜

(1) トノ掘假名「うら」トアリ

事有。是を則十八日粥といふ。【千金月令】【荆楚歳時記】の說爰に略す

奈良茶　ならちや　○大和奈良にて。やじふと云。畿内にて。ならちやがゆと云（諸國にてならちやと稱するは、ならちやめし也）【宇陀法師】〽たしかなる夢を掃込む椽の下、といふ句に

〽茗粥たく火の夜は明けり、と李由か附たり。李由は近江の産、亮隅律師也

雜炊　ざふすい　○河内及播州邊にて。びやうたれと云。加賀越中或（但馬にて。みそづといふ。越前にて。にまぜと云。伊勢にて。いれめしと云。東國にて。さふすい又。いれめしといふ。婦人の詞に。おぢやといふ。又京都にて正月七日の朝若菜の鹽餡(1)を祝ひて食す。これを。ふくわかしと云。大坂及堺邊にては神棚に備たる雜煮、あるは飯のはつほ等を集置て糝に調へ食す。これを福わかしと云。こながきとは俗にいふ雜水也。土佐の國にては正月三日上野谷中口護國院に福わかし有。大黑の湯と稱す。男女群參すること也

餡　もち　和名もちひ　○關西にて。あもと云。江戸にては小兒に對して。あもといふ。○雜煮（餅にいろ〳〵の菜肴を加へ煮てあつものとし、年のはじめに祝ひ食ふ。俗にこれを雜煮といふ）畿内にて。雜煮と云　又かんとも云。江戸にては新吉原にて。かんと云（おかんを祝ふ。又をかんばしなど云）案に新吉原市中をはなれて一ト廓を構へ住居す。ゆへに古く遺りたる事多し。又淺草の市にて商人の雜煮箸おかんばしとよびて賣侍るも、古く云傳たるなるへし。「かん」とは羹なり。あつものと訓す○ぜんざいもち　京江戸共に云。上總にて。じさいもち、出雲にて。じんざいもちと云（神布餅と書よし也）土佐にて。じんざい煮といふ。土州にては小豆に餅を入て、醬油にて煮、砂糖をかけて喰ふ。神在煮又善哉煮など〻稱すとなり○かゞみ餅諸國の通稱也。圓なる形によるの名なりとかや。東國にて。そなえと呼又。ふくでん共云。越後及信濃にて。ふくでと云　○搗餅（鏡餅に刀劍をいる〻を嫌て手を以てかく故にかき餅といふ。今双物を以てへぎたるを、へぎもちといふ）越後にて。けづり餅と云。同國にて「かき餅」を氷らせて名づけて。しみ餅といふ。ある人のもとにて搗餅を炙りて出せり。余りにかたかりけれは、老の齒には得及ばしといふ。あるじのいふ、さらば搗餅によする述懷と云題にて狂歌よめといひ侍れは

〽老の身の今さら恥をかき餅のむかふ鏡の昔戀しき　吾山

○しるこ餅　○江戸にて。しるこもち、京にて。ぜんび、西國にて。ゆるいこ、出雲にて。にごみ、越後にて。さふに、上野及駿河にて。ゆるこ、總州及常陸下野邊にて。ぜんびんと云（染餅と書よし也）加賀にて。あづきがゆ、薩摩にて。おとしれとよぶ

牡丹餅　ぼたもち（又はぎのはな、又「おはぎ」といふは女の詞なり）○關西および加賀にて。かいもちと云。豐州にて。はぎ餅と云。羽州秋田にて。なべしり餅と云。下野及越前越後にて。餅のめしと云。下總にて。がうはんと云。

今按に「ぼた餅」とは牡丹に似たるの名にして中略なりとぞ、萩のはなは其制煮たる小豆を粒のまゝ散しかけたるものなれば、萩のはなの咲みだれたるが如しと也。よつて名とす。かいもちとは、上かたにて「かい」といふ詞は關東にて「つる」といふにをなじ。つる餅になる故にかいもちと云。又粥餅也とも云。いかゞ。奥の仙臺には鮑を日にほし粉になしてもちに制す。名づけて「貝もち」といふ。出羽の最上にては蕎麥ねりと云物をかい餅と云。又下總の國にては糯米を燒て煮たるに、小豆の粉を上下〻に置て椀に盛たる物を「合飯」と云。或は「夜舟」といふはいつの間につくともしれぬと云意なり。又「隣しらず」といふも同し意なるべし。「奉加帳」とはつく所も有、つかぬ所も有といふ心也。【發心集】〽やせおとろへたる老尼、清水寺に奉加すゝむる所に行、硯をこひて

〽かのきしにこぎはなれたるあまなれはをしてつくへきうらもなきかな

此歌の心も同しことはり也。又京都にて土藏の壁を塗るいわゐとてかい餅を饗す。されば「かいもち」は燒ても火の通らぬ物故にいはふての事なるべし

團子　だんご　○伊勢にて。をまりといふ。女詞に「いしゝ」と云（尾州にてはひらめに丸きを「いしゝ」といふ）又筑紫にて。けいらんと云有。江戸にて云。米まんぢうの丸き物にて、今江戸にては、いまさか餅といふに似たり（雜卵と書り團子にはあらず）○をとごの餅又川びたり餅とも云。十二月朝日につく餅をいふ。中國及九州にて。か

(1) 鏹ノ振假名「こな」トアリ

はわたり餅と云

煎餅　せんべい○出羽ノ秋田にて。をへらまきと云

白雪糕　はくせつかう○仙臺にて。さんぎくはしと云

滑飴　しるあめ○畿内にて。しるあめといふ。西國にて。ぎやうせんと云。關東にて。水あめ又ぎやうせんと云。「水あめ」は「ぎやうせん」よりもゆるし。又「ぎやうせん」は濃煎なるべしや。又地黄煎とも書。江戸にては「下り」ともいふ

糒米　やきごめ○奥ノ津輕及豐州薩州にて。ひらごめと云。越州にて。いりごめと云。加賀にて春は。いりごめ、秋は。とりの口といふ

炒　こがし○東國にて。こがし又みづのことといふ。畿内及西國にて。はつたいと云(麥粉と書てはつたいと訓ず。)上野或は越前にて。こぐはしと云(粉のくはし成といふ意とそ)加賀にて。むぎいりことといふ(賀州の諺に「いろまぬさきの麥いりこ」なといふ事あり)近江にて。いりことといふ。奥州及總州肥州にて。かうせんと云

今按に、香煎は是和品なり。洛陽祇園町、江戸にては下谷の池の端にて制し賣を名産とす。こがしとは其制少し異なり。然とも此國々にてはこがしを香煎と呼也

菜漬　だいこんづけ○京にて。からづけといふ。九州にて。ひやくぽんづけと云。關東にて。たくあんづけといふ

今按に、武州品川東海寺開山澤庵禪師制し初給ふ。依て澤庵漬と稱すといひつたふ。貯漬(1)といふ說有。是をとらず。又彼寺にて澤庵漬と唱へず。百本漬と呼と也。又澤庵和尚百首の中に

〃老らくの耳にはうときほとゝきすおもひ出るや初音なるらん

烏丸光廣卿御點添書に、初音の僧正同日の論にあらずと云々。

又初音僧正と聞えしは、興福寺花林院別當永緣

〃きくたひにめつらしけれはほとゝきすいつも初音の心地こそすれ

酒　さけ○出羽にて。いさみと云。和州大峰にて。ごまのはいと云。　今按に、いさみといふは羽州羽黑山などの行者の隱語なるべしを、俗人もそれに倣ひて專ら「いさみ」といふ事にや成けん。「ごまのはい」といへるも是にをなじかるべし。又畿内の番匠の詞に間水といふ。今は「けづり」ともいふ。江戸にても番匠は「けづり」と云。かゝる

(1) 貯漬ノ振假名「たくはづけ」トアリ

たぐひの隱し詞を、東國にて「せんぼう」と云。士農の上にはなくして巧商或ハ遊女野郎の類ひ馬士竹輿舁に至まて符帳詞あり。今爰に略す。又西國にて「けんずい」と云は、灸治する節、酒食を饗するをいふ○江戸にて參州酒などの味辛〻つよき酒を「鬼ころし」と云。如此の類を美作にて。やれいた酒と云。野州日光にて「鬼ごのみ」といふ。又駿河邊にては。てつぺんといふなり

物類稱呼卷四

物類稱呼卷之五

言語

○大いなる事を五畿内近國共に。ゑらいといひ又。いかいと云

今按に、東國にても「ゑらひ」と云。物の多き事をいひて、大いなるかたには用ひず。上かたにては高大なる事に聞えたり。又いかいは、いかいものといふ時は大い成事、いかい事と唱ふる時は多き事也。諸國の通稱にや。四國にて「いかい」と云は、いかいお世話・いかい御苦勞など丶云事にのみつかふ。是も大いなる義なり。古には大なるを「いか」といひしと見えたり。貝原篤信は「いかい」といふは「いかめしい」の略語ともいへり

伊豆駿河邊には、いかいとも又。がんかうともいふ。上野に。野風と云。陸奥にて。でつかいと云（いかいの轉語か）仙臺にて。をかると云又。がいとも云（關東すべていふか）又。づないと云。安房上總及遠江信濃越後にて。でこといふ。越後にては大きし・小さしといふを、でこし・のこしといふ。西國及四國にて。ふといと云

(1) わらひかな

(2) どんどゝ云

○多いと云事を。たんと。ぜう。だいぶん。たくさんなどいふ時は關西關東共に通稱なり。又尾張にて。ふんだくといふは、東武にていふ。ふんだんと云に、ひとしき歟。又たんと丶は足ぬといふ事。膽斗と書く時は【蒙求】姜維膽斗といへるより出て大なる事也。を丶しにはあたらず。又饒は「を丶し」と訓ず。古歌に

〽大和なるうちのこほりの戸たて山ぜうにをりたるかぎわ(1)

らびかな

京にてせんど丶云。相模にて。たうど丶いふ。常陸にて。だらくと云。信州上州共に。もうにと云。上總にて。どん(2)と丶云。遠江にて。しごくだまと云。東國にて。しこたまといふ。仙臺にて。よんこと云。肥州にて。よんにやうと云。是は餘饒也

○わざと丶いふ事を、參州奥州にて。やくとうと云

今案に、わざといひ、わざ〳〵などいふ。をなじ詞也。尾張にて。ゑりわざといふ。東武にて。ゑりわりといふ。是もおなし意也。わざ〳〵といふにもかなふ歟。又東武にて。やくと云詞は尾張邊にて。やわといふにあたる。たとへば、かゝる碁にやくと負んや又やはと負んやなどいふこゝろ也。【枕草子】やくとしてといふ詞の註に、役としてと有は、わざといふにかよふなるべし

○所の仕來といふ詞のかはりに京都及丹州邊にて。所法則と云。豐州邊にては。恒規と云。大隅薩摩にて。いかたと云又捉といふ（をきてとは諸國の通語也）

○見よといふ事を、奥州南部にて。みどうらいと云。南部の方言にてよめる歌に

〽見どうらい山にちとべこ雪もありこの春がいにさぶうかるべい

此歌の見どうらいは見よやいの轉語にて、よびかけたる詞なるべし。ちとべこは、ちとばかり也。がいと云は尾張邊より東奥までの通稱には古代よりの詞とこそ聞ゆ。又べいとは可にて、歌には「べら」とも詠り。祖來翁の「あんべいやうもない」といふは田舍詞なりとて今は人の笑ふなれど、源氏物語にも有也といへり。予考るに、見よといふことを、東國にて「見ろ」と云。又聞よ・聞よといふを、きけろ・をけろと云類ひ、古く云ならはしたる詞にや。津輕にては、ちてべことといふも是にをなじ。此所の童謡に「あまりさむさにつらひばた、山にちてべこのこる雪、なんせばぢうかいどん」こゝに云所の「つら」は頬にて【枕草子】頬杖など云事なり。俗にほう杖なと云にひとし。「なんせばぢうかいどん」とは、なんとしやうかいなと云事ならんか。又【萬葉集】

〽草まくら旅のまろ寢のひもたえばあがてとつけろこれのはるもし

○勞して苦しむことを、「せつない」といひ又じゆつないといふを、加賀にて。てきないと云。　按に、せつなるとは自語にて今いふ轉語に「せつない」「じゆつない」「てきない」などいふ語に當れり。自語なれば文字なし。「せつな」と云べきを「せつない」と云は、せはしい・せはしないの詞にて考合すべし。歌書物語等にも「せちに思ふ」なと書

○いかにしてもと云事を長崎にて。いかなちうつろばつてんからと云

○女色の事を、丹波丹後にて。知音と云。父母のゆるさゞる妻を「ちいん女房」と云（知音の二字は伯牙鍾子期の故事に出）長崎にて。しやんすといふ（想思を唐音に唱るか）同所丸山にて。がつと云。九州及中國にて。らかづきと云。長門にて人に始て對面するを近づきに成とは敢いはずして、べ

(1) 云事なら

つしてになると云。薩摩にては女色を「ちかづき」と云詞を耻らふ也。男色を念者と云。土佐にても「ちかづき」と云詞を耻らふ也。奥州にては。ならびといふ。南部にては。けいやくといふ。出羽・秋田にて。はなぐりと云。江戸にて。いろと云。しやうねと云。又念頃・念者などいふは諸國の通言也。色と云は【經文】に通し女曰色と有。是による歟。又しやうねと云詞は五六十年來の流言歟。又しやうねとは執念の轉語なるべし。又男女交合することを、信州にては。ねつれると云。上總にては。めぐすといふ

○呵らるゝといふ事を、長崎にて。がらるゝと云。薩摩にて。がらりうばあと云（是はしかられんなり）肥後にて。をぐると云。房總邊にて。をださるゝと云。尾州より遠州邊。をめると云。是を汗面と書時は晉語のやうに聞ゆれ共「をめる」は和語なり。又【江家次第】に「をめるといふは、劣たる事にあたる歟。又畿内にて「ひかる」と云は「しかる」なり。如此の類かそへかたし。尾州知多郡にては「ひとつ・ふたつ」と云を「ふとつ」「ひたつ」とかぞへて「ひ」と「ふ」との相違あり。下野にても「ひ」と「ふ」と、あちらこちらに云在所有。尾州北在所にて馬を「イマ」と云。又今を「ムマ」と云、是もおなし詞也。但【日本紀】に今「ムマ」馬を「イマ」とよませたる所見え侍れは笑ふべき詞にはあらざるか。又安房の國にてはカキクケコの牙音をアイウエヲにつかふ。たとへば「百」「二百」なと云如き也。上總の東房州境邊是に同し。すべて東國にて「見えぬ」「しらぬ」なと云「ぬ」の字を延て「見えない」「しらない」といふ「ナイ」の反「ヌ」なれば是も則「ぬ」の字の拗音と見るべし。歌にも、松も昔の友ならなくにとは「友ならぬに」と云「ぬ」の字をのべたる物歟。その外此例をゝし

○よひとよといふ事を、關東又は四國にて。よがよつぴといと云。畿内にて。よがよさゞらと云。【大和物語】に「よひとよ立わづらひてと有

○方外なる物を、關東にて。だうらくと云。大阪にて。どろばうと云。薩摩にて。沒落と云。　東國にいふ「どうらく」は蕩落の轉語にや。又「どろばう」とは東國にては盜賊を云。おもふに「だらく」變して「だうらく」といひ、又「だうらく」と云詞ちゞみて「どら」となりたる歟。但葬禮の時、僧の鉦をうつもの故に、どらをうつは人の終りなりといふ意にや

○かはいらしいと云詞のかはりに、下總又信濃にて。つほいと云。（【大江山の謠】にうち見にはをそろしけなれと、なれてつほいは山ぶしとあり）越後及奥羽にて。めごいと云。津輕にて。いずいと云。武州片田舍にて。むぢこいと云也。上總房州又四國にて。むごいと云。上野にて。いけちないと云。肥前及薩摩にて。むさうと云。是等は皆かはゆひといふ事也

今案に、かはい又かはゆしなど云自語（上古よりの自然の詞を云）ありて漢字渡し後、可愛の字を假借したるもの歟。正字とは見えず。　土御門内ー府通ー親記に云、むけにちかく候はんまてぞかはゆく覺ゆると有。又正親町一位公通卿の狂歌に

さみせんの、いとしかはゆし、などゝちゝ詠(1)し給へり

○あぢなし（食物の味ひうすき也）京江戸共に。無味と云（但江戸にてうまくなひともいふ也）東國にて。まづいと云。大和及攝河泉又は九州のうちにて。もみないといひ又もむないといふ。いにしへ吉野の國栖(2)の邑人蝦蟆を煮て上味とし食ふ。名付けて毛濡といへるよし【日本紀】に出る。今云「もみない」とは「もみな」物と云心成べし。「い」は助字也。又武藏國桶川の驛近邊にて目摺鱠と名つけて蛙を食ふよし聞り。山東の人目摺鱠を食ふと云事【俗說辨】に委し。よつてこゝに略す

○情なきといふ詞のかはりに、大坂及播磨邊にて。いけちないと云。東國にて。むけちなきといひ又きせちないと云。江戸にて。むごらしいと云。【涅槃經】に佛ー性者名曰無ー礙ー智とあれは、佛性のなきといふ事なるべし。又あぢきなしといふも情なき心なり

○しぐむといふ事を、江戸にて。はにかむと云。又びゞるともいふ。東國にて。しごむと云。又はがむと云。房總海邊にて。がなづうと云。がなづうとは寄居虫の事を云。己か家より外へ出る事あたはず、内に斗居るにたとへたり。遠江にて。やにると云。關西にて。わにるといふ。越後にて。けすむと云。【萬葉集】につのゝふくれにしぐひあひけん、とよめり。しぐひは、しぐむといふにをなしと有

○久しきといふ事を、出羽にて。よつぱるかといふ。（世遙といふ心か）關西關東共に。やつとといひ又忍つとゝ云（但多い又よほどなと云詞にも當るか）　京に住む人太刀魚に

【2】曰無ー礙ー智とあれは

(1) 詠し給へばかはゆしと云かたよろしからんや

(2) 國栖ノ振假名「く」ノ字無ク「ず」トノミアリ

食傷せし友に狂歌よみておくる

〈太刀の魚さして毒とはしらねどもやつと參つたものでかなあろ

〈あるましき事をするといふ詞のかはりに、東國にて。てんこちもないと云。又つがもないと云詞も是にひとし。【宇治拾遺】に無天骨(1)と有。或人曰、東風は則谷風にて、きはめて地を吹て空を吹ず。されば天に東風なしと云心也とぞ未詳

〇他をさしていふ詞に、畿内にて。吾身といふ。東國にて、おのし又おぬし又そなたなと云。參河にて。おのさと云(是おのさまの略語なり)豐前豐後邊にて。わごりよといふ。畿内及出雲若狭邊にて。わごれと云。【太平記】に和殿と有。これらの轉語歟。上總にて。にし、下總にて。いしと云。奥州津輕にて。うがといふ。又畿内にて。おどれといひ、對馬にて。あやつ。こやつ又そやつなどゝ云詞は、人を罵る心成べし。今按に【萬葉】には。わぬとも。わけとも有。我身の事也。又あれとも、吾とばかりも見えたり。あれといふは彼と云にひとし。【狭衣】に、あはれあれが身にてだにあらばやと有。又【源氏】に。すやつ(2)【枕草子】に。かやつ【宇治拾遺】に。くやつなと有は今いふ「きやつ」と云に似たり。又そいつと云は其奴なり。或は「そなた」は「こなた」に對していえる詞也。【神代口決】に汝不レ忘レ之ヲと有。和歌には汝と詠ぜり。これらのことばのたくひ、かぞふるにいとまあらす。又中品已上の言語は萬國かはる事なきが、こゝに略す

〇自をさしていふ詞に、豐前豐後にて。わが(3)とうと云。又身が等といふもおなじ。又身ども・身とばかりもいふ。【正徹物語】に身が家は二條東洞院に有し也と云々。又「おれ」と云「おら」といふは已の轉語にて、諸國の通稱か。東國にては。おいらとも云。中國にて。うらと云。　寄田百姓言葉飛鳥井雅章卿

〈田をかるにあつうも寒うもあらなくにうらゝがいねは色になる稲

〇穴のあいたといふ事を、九州にて。ほけたと云

〇おそろしこはし畿内近國或は加賀及四國なとにて。をとろしいと云。西國にて。ゑずいと云(薩摩にては人に超て智の有を「ゑずい」と云)伊勢にて。をかれいと云。遠江にて。をそおたいといふ。駿河邊より武藏近國にて。をつかないといふ。飛驒及尾州近國又は上總にて。をそがいと云。

按に「をそがい」と云詞は、恐れ怖いの略語也。こはいの「こは」を反しつゞむれば「か」の直音となる。しかれは「をそがい」とは、恐れこはいの略也。

〇こゝろなくと云を、甲斐國にて。けゝれなくと云。又遠江にて九っを、「けゝねつ」と云。是にひとし。【萬葉】に心を「古古里」とも有。又【古今集】に

〈かいがねをさやにも見しかけゝれなくよこをりふせるさやの中山

〇あそこ・こゝといふを、西國にて。あんなけ・こんなけと云。肥前にて。そこねい・こゝねいと云。尾州にて。あそこなて・こゝなてと云。京にて。あこと云

按に、そこねい・こゝねいと云は「そこに」「こゝに」といふ心歟。江都にて、見へぬの「ぬ」をのべて「見えない」と云にひとしかるへし

〇あのやうに・このやうにといふを、勢州長嶋及出雲邊、又は播磨なとにて。あがい・こがいと云。九州にて。あんがい・こんがいと云。總州にて。あけへに・こけへにといふ。又あんな・こんなといふは、あのやうな・このやうな也。そんなといふは、そのやうな也。肥前・佐賀にて。そがいと云是なり

〇出るといふを、出羽の秋田、或は肥・長崎又四國にて。づると云。づるは、いつるを上略していふ。能の狂言に「身ともが國もとをづる時に」と云。是出なり。又でるとは出るの上略にてをなし心也。長崎にて。づらんばいとは出んかと云事なり。又肥前及薩摩にて「さるく」と云は「あるく」なり。尾張遠江にて「ゆかず」といふは「行んずる」也。馬をやらんずる、かごをやらんずるなれとも、譯しらさる人は笑ふこそをかしけれ。又行を「いく」といふは【萬葉】に多く見えたり

〇よいと云事を、筑紫にて。よかと云。若狭にて。ぶすといふ。遠州にて。よかんなと云。　西行上人の【撰集抄】に、いとよかなりと有。但よかん也と讀む口傳なり

〇わるいといふ事を、備前及筑紫にて。おろよいと云。若州にて。ぶさぬと云。豐前にては。をろしいと云。尾張邊又は奥州仙臺にて。をぞいと云。上總下總にて。いしいと云。筑紫の方言にてよめる歌に

(1) 無天骨
(2) すやつ
(3) わがどう
(4) うらゝかいれは

〽櫻ばなさへてなじかい散ていろおろよか風のふいたけいこつ

「さへて」は咲て也。「なじかい」はなせになり、いかなれば也。「いろ」はいる也。あしき風の吹し故に櫻の散りしと也。又「おろ」とは「おろふる雪」などゝ歌にもよみて、少〻の事をいふ。然ともこゝに云「おろよい」は少しの義にてあらさるべし。西國に「おろの島」といふ一島有。此地の詞は皆さかしまにて、よいと云事をわるいと云。大いなるをちいさいといふたぐひの方語也。さればおろの嶋にて「よい」といふは、西國にて「わるい」といふ事なれは、おろよいとはわるしと云事也。又「をぞい」とは尾州奥州邊にて、物のあしき事也。然るに駿河わたりより武藏上野邊迄、物事かしこき事に云ならはせり。もとより自語にして、相當の文字なければ猶更はかりがたし。【和字正濫】には「からすてふ大をそどり」の歌を「おほをぞどり」と濁音によみて「あしき鳥」の事とし「我心からをそや此君」と云るも「をぞや此君」とあしきに解したり。其清濁は予しらす。東國にては賢事をも「をぞい」と云侍る也。又南總にてあしき事を「いしい」と云。畿内又東武にても味の美なる物を「いしい」と云。

(1) をぞや
(2) しらす

女の詞に「をいしい」と云。これ又「をぞい」の詞とひとしく表裏の違とやいはん

○すてると云事を、東國にて。うつちやると云。關西にて。ほかすといふ（東國にて。ほうるといひ、越州にて。ほぎなげると云は投やる事なり）【伊勢物語】に「ぬきすを打やりて」と有。此ぬきすは女の手洗ふ所の竹にてあみたる簀のこを云。打やりてを東國に「うちやる」とつめて云也。又ほかすは渤海捨といふ三字の頭字を一字づゝ取ていふとぞ。又放下すにて、禪家の語也ともいふ

○負ふと云事を、東國にて。せうと云（背負ふのちゞみたることば也）長崎又四國にて。かるふと云。東武にては荷を負ふて賃銀を取ものを「かるこ」と云。又物を荷ふ春といふ物を、泉州堺にては。かることいふ。又淺草御藏前にて。小揚といふ物は、大坂にて。中仕と云にひとし

○東へ西へといふ事を、肥前にて。東さなへ・西さなへと云

案に、邊〻といふ事を、薩摩にて。さまといふ。東さなへは東さまへの轉したる詞にて、東の邊と云事なるべし。又江戸にて日のくれかたを「日くれさま」と云は、日の暮る有樣の略言なり。聚かさ・寂しさなどの「さ」も有樣ならんか。

但し助語なるにや

○右へ・左へといふ事を、武之秩父にて。ゆふじ、きうじと云。奥州にて。鑿方・槌方と云。　案に山路にて石工の云出せし詞にや

○つかはせといふ詞を、大坂にて。おこせと云（おこせは送り越せといふ詞の略なり）京にて。くせと云。江戸にて。よこせと云。羽州秋田にて。のべると云。尾張にて。いこせと云。【萬葉】八鹽爾染而於己勢多流、又蒼公の御歌に東風吹はにほひおこせよ梅の花と詠しさせ給ふ。　又源〻信綱、俗間に物をかりて返さぬを「横にねる」といふは「おこす」といふの裏なるへしとの給へり

○くるゝといふ事を　（【神代卷】養と有、人に物をあたふる也）出羽にて。けろと云（くれろ也、「くれ」の反〻「け」なれはなり）又。けとうらいともいふ。　案に、くるゝとは自語か。但有〻下を略して「クダサレ」又略して「クダレ」又略して「クレ」となりたる詞か（他より我にあたふる也）【徒然草】に、よき友三〻有、一〻には物くるゝ友と有。又【十訓抄】に云、むかし無縁なる法師、人の許にて物こひけるに、東おもてに居たる人はあたへず、西おもてにあるひとは時々物をとらせけれは

〽をこなひをつとめて物のほしけれは西をぞたのむくるゝ方には

とよめりけるとぞ。又芭蕉翁あるとしの十五夜に

〽米くるゝ友をこよひの月の客

○なに事じやといふ事を、上總にて。あんだちふと云。會津にて。あんちふだびつちふだと云。あんだは何〻ぢや也。「ちふ」は何々と云言をつゞめて、何々「ちふ」とも、何々「とふ」とも、何々「てふ」とも、上代よりいひし言なり。戀すてふなど歌によめるも、戀すといふ詞なり。長門又は土州の山家にて、何ちふと云。又事ぢやと云を、京近邊西國にては「何〻の事ちや」とつめて云。尾州邊にて「何の事でや」と直にいひ、東國にては「何〻の事だ」とはねて云。是等のはねるとつめるの相違は風土のならはし也

○たのみなきといふ詞のかはりに、上總にて。ろかいのないと云。　案に艪櫂は俱に舟の具也。曾禰好忠の「ゆらの戸をわたる舟人かぢをたえ行衛もしらぬ」と詠せし歌考合すべし

○ある時にと云事を、長崎にて。あるばつせんと云

○くたびれといふ事を（草臥とは山伏の入峰修行より起れる詞也、と貝原の說也）畿内にて。しんどゝ云（「しんろ」の轉語にや。「しんろ」は辛勞なり）伊勢にて。ざんなうきけた又ひどうきけたと云。薩摩にて。だつたと云。東國にて。かつたるいと云又ごちたとも云。徂來翁のごうしたりとは困の字なり。田舍人は「ごちたり」といふといへり。又肥前の佐賀にて。ぬたのごとしといふ

○打擲すゝといふ事を、肥前の平戸にて。とらすといふ。同國佐賀にては。つくにうにやせと云。「づくにう」とは天窓の事をいふ也。肥前にて。くれつけると云。肥後にて。きいつくといふ。　良基公【榊葉日記】に云、神人をはらひうちはりしかば、と有。しからば人を打を、はるともいふ。但杖棒などにて打を、たゝく・ぶつ[1]といふは諸國通していふか。「はる」といふは拳などにて打事成へし

○ゆるやかに坐する事を、京大坂にて。じやうらくむといふ。關東にて。あぐらかくと云。又ろくに居る共いふ。大和及伊賀伊勢遠江にて。あづくみと云。南都にて。をたびらかくと云。加賀にて。あいぐちかくと云。越前にて。あぐしと云。肥前及薩摩にて。いたぐらめといふ

案に、じやうらくとは藏六也、龜の首尾手足の六を藏に似たれはかく云。然らはじやうらは轉語か。【和漢三才圖會】常樂とも見えたり。又あぐらと云。「ア」は脚也「クラ」は坐也。【日本紀】跌坐讀で「うちあぐみゐる」と云か如し。又胡床俗にいふ床几也。これより起たる名なりや。又ろくといふは直の字に當か。物を直に置事を「ろくに置」といひ、直ならぬ人を「ろくでなし」と云。琉球人の「アンジキ」と云も、ろくに居る事をいふと也

○かりそめと云詞のかはりに、畿内にて。あじやらと云。東國にては大抵の事ならぬを云。考るに其意をなじ

○あとかたもなしといふ事を、關西關東共に。とてつもないと云。下野にて。とつぺいもないと云。遠州にて。しやうくもないと云。【性理大全】に塗轍とある是歟。又江戸にて。とつけもないといふは轉語なるべし

○やをら（そつといふ心、又少しのこゝろも有ことば也）西國および常陸にて。やうらと云（そろ〳〵といふ事に用ひていふ）【源氏橋姫卷】に云。「ひめ君御硯をやをら引よせて」と有。尾州近國にて。こそ〳〵と云。伊豫にて。ほし〳〵と云

○急にといふ事を、豫州にて。あたゞにと云。【古文】に遽又あはて又あはつなど云は「あはたゝし」也。あたゞにもあはたゝしの轉したる詞にや

○目さむるといふ事を、薩摩及肥前にて。をぞむと云（尾州にては、をそるゝと云事を「おぞむ」と云）

○明日・明後日といふ事を、播州赤穗にて。あすてり・あさつて照といふ（この所鹽濱なれは日和よかれと祝していふなるへし。土佐にて。きのふり・ゆふべりと云も是に同しきか）

○雨降らんとして日和になりたるを、畿内近國にても。日なをるといふ。東國にて。俄ひよりと云

○日和の定らぬを、尾張にて。一兩日和と云。筑紫にて。一石日和と云

今按に、尾州にて鈍々したる日和と云を、金子の貳歩々々にとりなして、一兩の天氣と云。又一こく日和といふは、雨ふらんや、ふるまいやといふを、筑紫にて降うごとふるまいごとゝ云。【十六夜ノ日記】阿佛の短歌に

〽今はたゞくがにあがれる魚のごとかぢをたえたる船の如、などよめるにて「ごと」は如し也。如々を米穀などの五斗五斗になぞらへて、一石日和と云。又天正文祿の頃脩呂里新左衞門と云者有。泉州堺の住にて鞘師也。細工の名譽を得たり。刀の鞘口にそろりと納るをもつて異名とす。太閤秀吉公朝鮮征伐のをりから、一首の落首をぞたてける

〽太閤が一石米を買ひ　かねてけふもごとかい　あすも御渡海

又江戸に一石橋と云有。【江戸砂子】に後藤氏の兩家かの橋の前後に有。故に一石橋と名くと有。これ皆同日の談なり

○羞明といふ事を、中國にて。まほそしと云。江戸にて。まほしいと云。東奥にて。まじぼひと云。美濃尾張邊にて。かゝはゆひと云。土佐にて兒童など。ばゞいひといふ（「ば」の濁音は「ま」の清音にかよふ也）

○あたらしいといふ事を、相模にて。にひしいと云。たとへは新宅を「にひ家」といふ。總州野州をなじ。上野にて。にひ家と云も是又同し詞也（古代の言なり）

○うつぶくと云事を、肥後にて。くるぼくといふ

○律義なる人を、中國にて。まてな人と云。畿内及東國に

(1) ふつ

(1) 如ノ振假名「ごと」ノ二字無シ
(2) まじぼひノ「ひ」ノ振假名「イ」ノ字無シ
(3) かゝはゆひノ「ひ」ノ振假名「イ」ノ字無シ

(1) 尾花にて
(2) 云、小田原
(3) 玉たれ

て。またうどと云。　案に「まてな人」又「またうど」共に全人と云事也。【萬葉】全手と有は左右の手の事にて諸手とも書よし、同抄に見えたり。これは別なり

○太義なといふ事を、薩摩にて。だりがていと云。常陸にて。ぼりないと云。上總下總にて。こわいと云。仙臺にて。うさねはくと云

○なぜと云事を、薩摩にて。なじかいと云。古き歌に

〽大和かい西はあじかを關東べい都こさんすいせをりやります

西土にて「あじかを」と云も「なじかい」といふにひとし。總州及東奥にて。あぜといふ。江戸にて。なぜといふ。京にて。なせにと清ていふ。　案に、なぜとは胡也。とがめたる言葉也。【萬葉】に「あぜそもこよひよしろきまさぬ」なと詠り。古き詞なり

○脇へ退といふ事を、上總邊下野にて。ちやがれといふ

〽ちやがれはあかしやしや庭のきり〳〵すをなし所にねまりてぞなく

下野の方言を詠たる歌也とて古くいひつたへたり。はあとは「はや」也。すべて東國にていふ詞也。かしやしやは「かしましや」也。ねまるは居ると云ことにて奥羽又は加賀なとにて云。尤古代の詞也。出羽の尾花澤(1)にて、はせを翁の發句にもきこえたり。又【畠白集】(2)云、小田原と云所の宿にとまる。明れば玉(3)だれの小瓶に酒少し入て粽めくもの御前にとてさしいづ。あるしのおとこにやあらん。けふはめてたきせちに候。一盃けしめされ候へかし。とあいたちなくいふも顔まほられぬへし。しどけなき事打語て、今しばしねまり申べいを、それがしが旦那のえらまからんとて立ぬる。彼かふるまひにつけて（下略）此文章を見る時は、相州邊にても「ねまる」といふ詞を遣ひたるとおもはる。むかしはすべて通語にや

○しらぬといふ事を、上總にて。いちやしらねと云。上總の國人の云〻、いちやは一社也。其故は上古當國に鎮坐の神靈のうちに一社其祠る所の地を今時知るものなし。よつて國俗、物のしらざる事を一社しらなひといふとそ。予が云、是妄說なり。いちやはいさ不知なり。邊土は其國かぎりの地音にして、却て古代の詞遺れり。然るに方言鄕談にも漢字を主とするの誤より、あらぬ靈說も出來る也。徂來翁の云〻、いにしへの詞は多く田舍に殘れり。都會の地には、時代の流言詞といふものひたもの出來て、古きは皆かはり行に、田舍の人はかたくなにて、むかしをあらためぬ也。此頃は田舍人も都に來りて時の詞を習つゝ行て、田舍詞もよきにかはりたりといふは、あしきにかはりたるなるべし

○互に人を雇ひつゝやとはれつする事を、武州及上總にて。えいにすると云。下總邊にて。いひにするといふ。今案に、これはいにしへ「ゆひする」といへる詞の轉したる成べし。俊賴朝臣の歌に

此里にゆいするひとのなきやらんみふしたつまて早苗とらねは

○たづぬるといふ事を、播磨及出雲邊、又土佐にて。とめると云。京加茂の南堤の下に西念寺といふ有。西行法師此寺に暫く住す。庭に梅あり。愛翫ひて

〽とめこかし梅さかりなる我宿をうときも人の折にこそよれ

此歌の「とめこかし」は、求めこよかし也。尋る同意也【萬葉】尋とあり

○めてたきと云詞のかはりに、長崎にて。けいくわんと云。

(1) めてらし

今按に、けいくわんとは慶歡と書にや。又めてたきといふに品有。「散れはこそいとゝ櫻はめてたけれ」といふ歌の「めてたき」は愛の字也。花を愛したるの心也と、肖柏老人の說也。めでる・めづるなとよむ同し心也。又珍の字「めづらし」とよむは、めでらし(1)の轉語にや

○嫁といふ事を、出羽及信濃にて。むかされと云。薩摩にて。御前むかひと云。　案に「むかされ」は迎えらるゝのちゞみたる詞なるべし

○夕を、東國の詞に「よんべ」と云。今案に、【遊仙屈】宿「ヨベ」「ヨンベ」と訓す。又【萬葉】大伴ノ郎女か歌に

〽あまさはりつねする君は久かたのよんべの雨にこりにけんかも

【土佐日記】舟子のうたふうたに、よんべのうなひもかなひもがなと有。又今夕を「ゆふべ」といふは勿論の事にて、昨夜の事をよんべと云。萬葉の歌并土佐日記に云よんべも昨夜の事とぞ聞ゆる。又一昨夜の事を、きのふの晩といふは是か非歟。又人の寢る事を「をよる」といふは御夜にて、「をひんなる」は御晝なるにや。黃昏は誰彼也。曉更は彼誰也。其さだかならぬ所をいふ也

○他人を馳走する事を、上總にてほとめくといふ

○醜き女を戯る詞に、西國にてぶつそうづらと云。東國にて腹立顔をぶつでうづらと云。【袖中錦】云。胡國の婦人黄色の物を以て面に塗る、これを佛粧といふと有。又佛頂面とは面ふくらして螺髮を見るがことしと云たとへ也ともいふ。又東國の俗、人に對するに和せざるを「ぶにんさう」といふは【金剛經】に「無人相」とあり。此事なりとぞ

○おめきさけぶと云詞のかはりに、九州及四國にておらぶと云【神代卷】哭聲と有。いたくこゑをはかりに泣をおらぶと云と聞えたり。【平家物語】をめかせ給へと有は「うめく」といふにひとしき事にや。東國にておめきさめくといふは、おめきさけぶの轉語か。(1)雨々と泣なといふ心ならん

○咳をせくと關東にていふを、關西にて「せきをせたぐる」といふ。播磨邊にて「咳をたぐる」といふ。阿波にては「せきをこづく」と云。中國にて「咳をこつる」といふ。【神代卷】にいさなぎの尊たぐりす、金山彦の神となると云云。又東國にて「咳ばらひ」又「しやぶきする」なといふは「欬嗽」のちがみたる詞にて通稱也

(1)雨々ノ振假名「さめ〳〵」トアリ

○めいわくといふ事を、上野にてさぶけさんがいといふ

○道路のぬかりを、關西にてしるいと云。東國にてぬかりといふ

○へあぜおこす苗代水のほと見えて道のぬかりのかはくまもなし

又道のすべるを、常陸にてなめり道といふ。　案に、是に似たる事有。俗に「猿すべり」と云ふ有。歌に猿滑とよめり

○へあし曳の山のかけちのさるなめりすへらかにても世をわたらめや

深山に猿すべりといふ木有。百日紅に同して葉粗厚く、四時不凋、花さかず。此木を酒家にて榕木とす。又寺院にて撞鐘の撞木に用ゆ。又百日紅は夏秋に花さき冬に到て葉凋む木也。同名にして少異也

○跨といふ事を、東國にてあごむと云。　跨を「あとこゆる」といふ足迹のまたがりこゆると云意なりとぞ。又「あごむ」は「あとこゆる」の轉語也

○水にものを浸す事を、關西にてほとばかすと云。東國にてひやかすと云。【伊勢物語】「かれいひの上に泪をとしてほとびにけりと有

○なぶる（手にてなれふるゝなり）關西にていらふと云。東國にていぢる又いびるといふ。西國にてあつかふといふ

○されたはふるゝ事を、上方にてほたえると云。關東にてをどけると云。又でうけるといふ又そばへるといふ。陸奥にてあだけるといふ。【源氏】おどけたる人こそたゞ世のもてなしに隨ひと有【春曙抄】そばへとはざれほこりたる也と有

○さうじや・かうじやと云を、安藝にてさあつく・もうつくといふ

○物に驚くことを、東國にてたまけると云。下總にてちめうしたと云。津輕にて勁轉したと云。出雲にてをびへると云又肝をつぶすと云。びつくりしたなどいふ詞は、諸國の通語也。土佐の西境にてはたまけるといふ。上土佐中土佐には此稱なし。薩摩にてはたまがると云。案に、東國にていふ「たまける」は【源氏】に魂消ると有。「ける」は消也。(1)「けぬがうへなるふじの初雪」とよめるは、(2)消ぬがうへなる也

(1)けぬかうへなる
(2)消ぬかうへなる

○養生といふを、但馬にてやうすけるといふ

○正直といふを、播磨にてうちぬきといふ

○いつはりうそといふを、房總にてうそをかたると云。常陸下野邊にてちくとも又ちくらくとも云。尾張にては謀計なる事すべて深きたくみを「ちくらく」と云。江戸尾張邊及上野にてすうごと云。又彌助といふ（はやり詞か）又千三ともいふとぞ。按に、千の僞の内に實三ッもあらんかといふ意にや。万八といへる流言も是に似たる事なるべし。又いすかなどゝいふ。是はうそ鳥の雌なれはかく云にや。いすかといふ鳥はくちばしの合ぬ故、口の合さるにたとへたるか。【萬葉】乎曾と有は今云宇曾也

○やくたいもなしといふを、奥の南部にてぎがないといふ

○いかやうにもといふを、伊豫にてどうばりと云。土佐にては「どうまれ・かうまれ」といふ。　案に、土佐にて「どうまれ・かうまれ」と云は「どうもあれ・かうもあれ」なり。豫州にていふ「どうばり」は、是も「どうまれ」の轉語也。東國にてなでう又あでうなどいふは「いかやうな」といふ意也。【紫日記】なでう女のまなぶみ、とあり

○是ほどゝいふ詞のかはりに、西國にて。是しこ・彼しこと云。伊勢にて。これほどき・あれほどきと云。肥ノ久留米にて。是しころ・あれしころと云。東國にて。是しき・あれしきと云

○はなはだしきといふ詞のかはりに、尾張にて。りうとと云。又。きうとともに云。「りうと」ゝいふ語は、物を振廻し、或は物を打時、或は走る時など、猶豫なくけはしき事を「りう〳〵」と云語有。其如くはけしくゆるかせにせさる事に用ゆる詞なり。上古よりの自語と見えたり。たとへば「フハ〳〵」の語を「浮和々々」と書て正字の様に用ゆる事妄說なり。強て文字を施時は、和語も漢語のやうになり行やせん

○物を借るといふ事を、甲斐國にて。いらうと云。　案に、東國には物を借ると云時。かりいらひと云詞有。同し心ばへなるべし。たゞ。いらうとばかりは唱へず。又京都にて。借つてこいといふは、江戸にていふ借てこい也。京にて買ふてこいといふは、江戸には買つてこい也。西國にていろはぬといふは、かまはぬと云意也。土州などにていろはぬといふも、物に手をふれずかまはぬと云にをなし意なるべし。東國にても「いろふ。いらはぬ」などの詞あれ共「いぢる・いぢらぬ」と云方多し。尾州にていぢるの語は物を賴みて催促する心に用る也

○ぎしむ　畿内の語也。關東にて。りきむといふに當る言也。上總にて。ぎしやばると云。仙臺に。ぎづむと云。これ皆をなじ心歟。ぎしやばるは義者振の轉にや。又義者張といふ事なりや

○直にといふ事を、大坂及尾州邊又は土佐にて。いづきにといふ。其意は休ますして一ゝ息に物をする事也。關東にて。すぐさまといふも是にひとし

○他と連立行を、東國にて。同志に行といふ(一所にいかふともいふ)播摩にて。つんのふて行と云。又誘て行を、尾州にて。をこづらるゝと云。又いざかつせと云も人を誘詞也。【日本紀】誘と有。又いざかつせは「いざ」は發語也。さそふ也。東國にて「さ。御出」「さ。いかう」と云詞にあたる。「いさ」とも又「さ」とばかりも唱ふる也。「いぬる」はかへるなり。「いなふ」は歸らん也。「いんでは」歸りて也。如此の詞は諸國かそへ盡しかたし

○際(そばと云に同し心か)畿内また尾張邊播州邊にても。ねきといふ。根際の略なるべし。土州にて。いづきに・ねきにといふは、すぐに近所をいふ也

○外の事を、西國にて。あだと云。常陸及奥州にて。とはと云。上總房州にて。とでといふ。【日本紀】外と有(上世の語にや)「とは」とは外端にて、そとのはしといふ意歟。「はし」は「はな」ともいふ也

○物に饌の生したるを、上總にて。かもじれると云。　案に、饂の和名「かも」と云は羚羊の皮を敷物にする故に名づく。關東にて「かもしか」と云是なり。冬瓜といふ物も、冬に到れは白毛を生ず。故にかもうりといふ。物の饌も白毛を生ず。よつて「かもじれる」といふ

○焦臭を、京にて。かんこくさしと云(紙臭なり)東武にて。きなくさいと云(木にてはないにほひ、と云こゝろ)尾張遠江邊にて。かこくさいと云(京にをなし)近江にて。やぐさいと云。和泉にて。かこびくさいといふ。奥州にて。ひなくさひと云。津輕にて。ふなくさいと云。薩摩にて。かなくさいと云。土佐にて。けふらぐさいと云

○おろかにあさましきを、京大坂にて。あんた又あんだら共云。伊勢にて。あんがう又せいふと云。越中にて。だらけと云。因幡にて。だらすと云。信濃にて。だほうと云。奥州にて。ぐだまと云。豐州にて。をうかましいと云。尾州にて。をごさと云。俗に馬鹿と云は【史記】秦趙高故事もとづけり

拾遺

ゝ鹿をさして馬と云人有けれはかもをもおしとおもふ也けり。又。あほうは秦ノ阿房ノ宮號に出たる詞也とぞ。又。たわけとは田分也といふ。(未詳)【日本紀】結婚と有。たはふれけの略語也。又淫と書【萬葉】をなじ。婚亂者をいふと見えたり

○月水を、畿内の方言に。手桶番と云(水に付といふ秀句)美濃及尾張伊勢邊に。たやと云(待室の略也といふ)江戸にて。さしあひ又さはりと云。仙臺にて八左衛門といふ(はやり詞なるべし)

○物事輕卒に騷しき事を、東國にて。ひやうきんと云。西國にては、をどけたる事を「ひやうきん」といふ

○殘りなくと云詞のかはりに、尾州にて。こつべりと云。東武にて。さつぱり又。すつへりなどの語と同し意也。匹如の末訓より出たる詞と聞及たり。東國にて。すきとなし又すつきりないなどゝいふもをなしこゝろ也

○たび〳〵といふ事を、伊勢及駿河相摸にて。さんたいと云。東武にて再々といふに似たり

○ねんごろなる事を、下總にて。おふな〳〵といふ。信州にて。おなごらといふ。他のもとへわざ〳〵行なといふ事也。懇なる心也。【源氏】おふな〳〵おほしいたづく、とあり。

【伊勢物語】にあふな〳〵思ひはすべし(1)なぞへなく。など(2)もよめり

○いろ〳〵といふ事を、肥前佐賀にて。ぐせことゝいふ

○居るといふ事を、日向及北陸道又下野邊にて。ねまるといふ。畿内にて。いしかる(3)といふ。關東又は泉州境邊にて。へたばると云。伊豆にて。ぎかる(4)と云。但馬にて。へこたれると云。長崎にて。をらすと云。土州にて。いざると云

○八道(わらべの地上に大路小路の形を書て、錢を投てあらそひをなすたはふれ也)京の小兒。むさしと云。大坂にて。ろくと云。泉州及尾張上野陸奥にて。六道と云。相摸又は上總にて。江戸と云。江戸の町々にたとへて云。信濃にて。八小路といふ。越後にて。六道路といふ。奥の津輕に。をえどゝ云。江戸にて。きすと云。江戸田舍にて。十六といふ

○十六むさし　京江戸共に。十六むさしと云。中國にて。むさしと云。上野下野邊にて。十六さすがりと云。陸奥にて。辨慶むさしと云。信濃にて。さすがりと云

○石投　江戸にて。手玉といふ。東國にて。石なんご又なつこともいふ。信州輕井澤邊にて。はんねいばなと云。出羽にて。だまと云。越前にて。なゝつごと云。伊勢にて。をのせと云。中國及薩摩にて。石なごといふ

〻石なごの玉の落くるほどなさにすぐる月日のかはりやすさよ　西上人

○かくれんぼ(小兒のたはふれ也)出雲にて。かくれんごと云。相摸にて。かくれかんじやうと云。鎌倉にては。かくれんぼと云。仙臺にて。かくれかじかといふ

○鬼わたし　江戸にて。鬼わたしと云。京にて。つかまえほと云。大坂にて。むかへほといふ。東國及出雲邊又肥前長崎にて。鬼ごとゝ云。奥仙臺にて。鬼々と云。津輕にて。おくりごと云。常陸にて。鬼のさらと云

○他の呼に答る語　關東にて。あいと云。畿内にて。はいと云。近江にて。ねいと云。長門邊にて。あつつと云。薩摩にて。をゝと云。肥前にて。ないといふ。土佐にて。ゑいといふ(又ゑつともいふ。奴僕のたぐひは。をゝとも。やつともこたふ)越後にて。やいと云。越前にて。やつといふ。陸奥にて。ないと云

案に、國々のこたふる詞大いに同しくして少く異也といへとも、各轉語なるべし。有が中に「をゝ」といへるは諸國にて、下輩にこたふる語なるに、九州にては上さまの人に對してかくの如く答る所も有也。俗間に應の字を書もあれど「をゝ」は和訓なれば、唯々書べきよし、先哲も沙汰し侍る。

【漢書】唯唯恭應之詞有。【枕草子】に、をゝと目うち引てと有

〻をゝ〳〵といへとたゝくや雪の門　去來

○助語(ことばのをはりにつくことなり)京師にて「ナ」、八瀬大原邊にて「ニヤ」、橋本邊にて「ノヨ」、大和にて「ナヨ」、播津にて「ノヤ」、播磨にて「ノ」、石見にて「ケニ」、因幡にて「ケン」、但馬にて「ガア」、紀伊及豐後にて「ニ」、豐前にて「メセ」、西國及中國にて「ドモ」「テヤ」、土佐にて「ナア」「ノチ」「ネヤ」、星巡遠駿甲信にて「ズ」、武藏にて「ケ」、上總にて「サ」、下總にて「ナサイ」、安房にて「サア」、上下野州にて「ムシ」、越後にて「ナ」、加賀にて「ナ」、陸奥にて「サア」、出羽庄上にて「ベ」、同國庄内にて「チヤ」、同國秋田にて「サイ」、關東にて「ベイ」、美濃にて「ヂヤ」、○畿内近國の助語に。さかひと云詞有。關東にて。からといふ詞にあたる也(「から」と云詞「故」といふに同し。吹からに秋の草木のと詠るも吹ゆへに也)

(1) なそへなく
(2) なとゝも
(3) いじかる
(4) ぎかる
(1) 丈艸
(2) 大坂屋平三郎、伊南甚助
(3) 「ナ」ノ横線無シ

二篇
三篇　近刻

安永四乙未正月

江都書林　須原屋　市兵衛
同　善五郎

物類稱呼卷之五終